

## 2. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成21～23年度発掘調査報告

### (1)長岡京跡右京第970・1007・1024次(西条地区)・下海印寺遺跡

#### 1. はじめに

今回の発掘調査は、京都第二外環状道路建設事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。道路は、大山崎ジャンクションから小泉川沿いに北上し、京都市西京区大原野を經由して京都縦貫自動車道に通じる。この路線の内、長岡京市域にかかる範囲を、平成15年度から当調査研究センターが発掘調査を行ってきた。本報告は、長岡京市下海印寺西条において平成21～23年度にかけて実施した調査成果について報告する。なお、平成20年度に実施した調査成果については既に報告したところであるが、出土遺物については今回新たに報告するものである。また調査地の表記については、長岡京跡の調査回数や各遺跡名のほかに、小字を地区名として使用してきた。今回報告する地区は西条地区にあたる。

調査地は、桓武天皇によって造営された長岡京跡の南西部付近にあたり、長岡京の条坊復元では右京七条四坊十一・十二町にあたる。また、小泉川左岸の段丘上に広がる縄文時代から中世の集落跡である下海印寺遺跡の南端にも位置する。

本報告は、岩松・引原・岡崎・高野が執筆し、文責については文末に記した。本報告で使用した国土座標は、日本測地系(第Ⅵ座標系)である。土層および土器の色調は、農林水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を用いた。

現地調査・報告については、京都府教育委員会をはじめ長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係各機関並びに職員のご指導・ご助言をいただいた。また、下海印寺自治会や地元の方々には多大なご協力を得ることができた。記して感謝します。

#### 〔調査体制等〕

平成21年度調査 長岡京跡右京第970次調査(7ANOSJ-5)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課第2係長 森 正

同 主任調査員 松井忠春・引原茂治

同 専門調査員 竹井治雄・岡崎研一

同 調査員 村田和弘・奈良康正

調査場所 長岡京市下海印寺西条

現地調査期間 平成21年4月8日～平成22年2月19日

調査面積 4,000㎡

平成22年度調査 長岡京跡右京第1007次調査(7ANOSJ-6)

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸  
調査担当者 調査第2課第2係長 森 正  
調査第2課主幹調査第2係長事務取扱 石井清司  
同 主任調査員 増田孝彦・中川和哉  
同 専門調査員 岡崎研一  
調査場所 長岡京市下海印寺西条  
現地調査期間 平成22年9月2日～平成23年2月3日  
調査面積 1,030㎡

平成23年度調査 長岡京跡右京第1024次調査(7ANOSJ-7)  
現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克  
現地担当者 調査第2課第2係長 岩松 保  
同 専門調査員 岡崎研一  
調査場所 長岡京市下海印寺西条  
現地調査期間 平成23年4月6日  
調査面積 30㎡

## 2. 位置と環境(第1図)

長岡京市は京都盆地の西南部に位置する。長岡京市域の東側を小畑川が、西側を小泉川が南東方向に流れ、ともに大山崎町で桂川に注ぐ。今回報告する下海印寺遺跡は、小泉川中流域の左岸低位段丘上に広がる遺跡である。同遺跡は旧石器時代から江戸時代にかけての集落遺跡で、その範囲は東西700m、南北600mである。今回の調査地は、その範囲の南東部にあたる。

以下、長岡京市と大山崎町に流れる小泉川流域に所在する主要遺跡を取り上げ、時代毎に概観したい。

旧石器時代には、南栗ヶ塚遺跡で石器の集中部や接合資料が発見された。

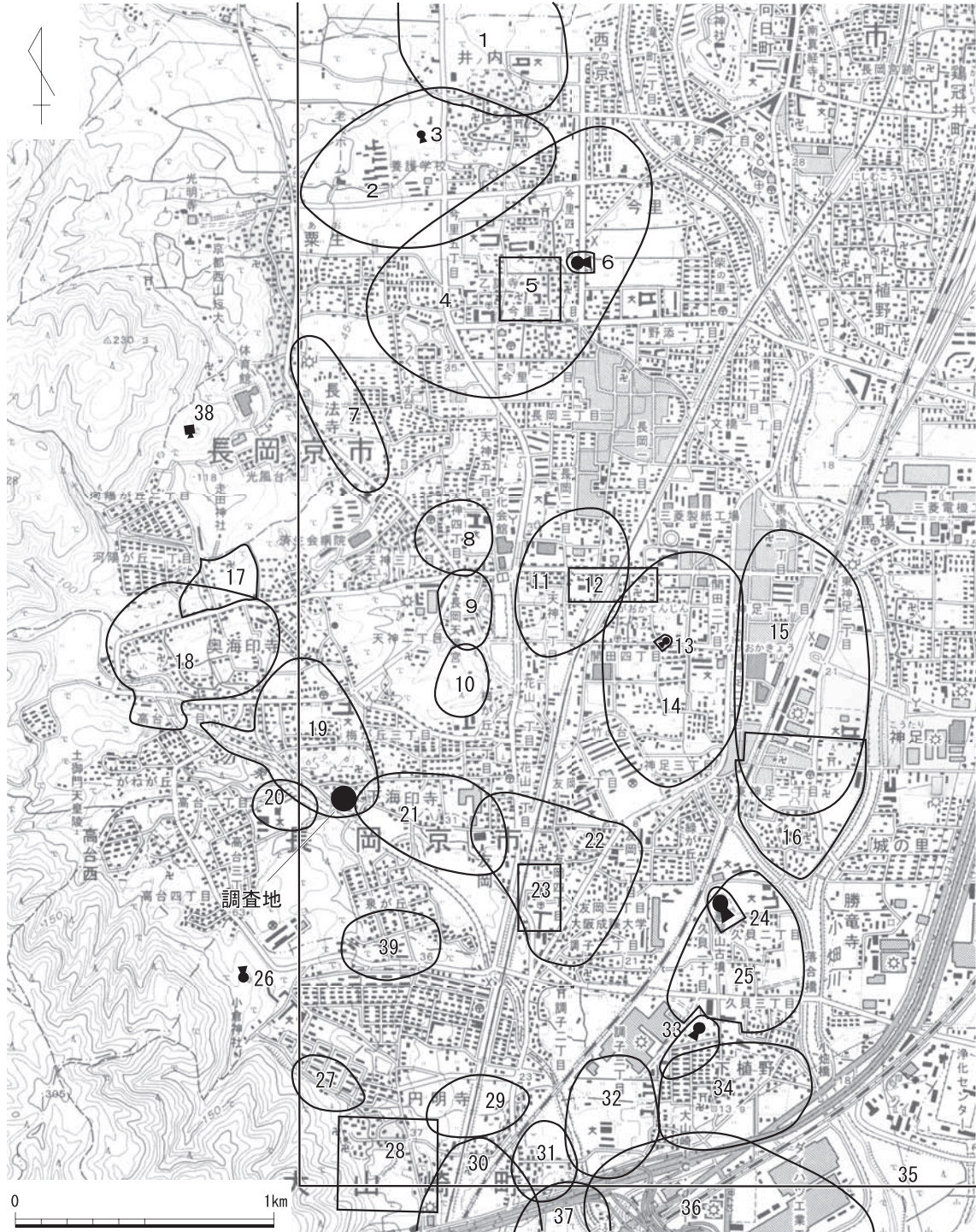
縄文時代以降になると、小泉川周辺の段丘や低位段丘上に集落遺跡が展開する。

縄文時代の遺跡としては、草創期には下海印寺遺跡や久保川遺跡、早期には松田遺跡、前期には南栗ヶ塚遺跡、中期には友岡遺跡や伊賀寺遺跡、後期には伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡がある。前期以降の遺跡では、竪穴式住居跡や土坑・溝などの遺構が確認されている。このように、小泉川流域には縄文時代の各時期の集落が分布していることから、小泉川流域が居住に適した環境にあり、流域の中で場所を移しながら継続的に集落が営まれたものと考えられる。

弥生時代では、南栗ヶ塚遺跡で前期末の土器が出土したほか、中期前葉の方形周溝墓が検出されている。下海印寺遺跡では中期の溝が、脇山遺跡では中期前半の遺構が検出されている。また、下植野南遺跡では方形周溝墓を主体とする中期後半の墓地がみつまっている。

古墳時代の各時期の代表的な古墳を挙げると、前期には長法寺南原古墳や鳥居前古墳が築造さ





- |             |           |             |            |            |
|-------------|-----------|-------------|------------|------------|
| 1. 上里遺跡     | 2. 井ノ内遺跡  | 3. 井ノ内稲荷塚古墳 | 4. 今里遺跡    | 5. 乙訓寺     |
| 6. 今里車塚古墳   | 7. 長法寺遺跡  | 8. 東代遺跡     | 9. 西陣町遺跡   | 10. 天神山遺跡  |
| 11. 開田城ノ内遺跡 | 12. 開田城跡  | 13. 塚本古墳    | 14. 開田遺跡   | 15. 神足遺跡   |
| 16. 中世勝龍寺城跡 | 17. 海印寺跡  | 18. 奥海印寺遺跡  | 19. 下海印寺遺跡 | 20. 西山田遺跡  |
| 21. 伊賀寺遺跡   | 22. 友岡遺跡  | 23. 鞆岡廃寺    | 24. 恵解山古墳  | 25. 南栗ヶ塚遺跡 |
| 26. 鳥居前古墳   | 27. 西法寺遺跡 | 28. 円明寺跡    | 29. 久保川遺跡  | 30. 百々遺跡   |
| 31. 金蔵遺跡    | 32. 松田遺跡  | 33. 境野古墳群   | 34. 宮脇遺跡   | 35. 長岡京跡   |
| 36. 下植野南遺跡  | 37. 算用田遺跡 | 38. 長法寺南原古墳 | 39. 脇山遺跡   |            |

第1図 調査地ならびに周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

れ、中期には境野古墳群や前方部に刀剣など多量の鉄器を副葬していた恵解山古墳が、後期には周濠内から木製の埴輪などが出土した今里車塚古墳が築かれる。

集落遺跡としては、友岡遺跡や下海印寺遺跡において後期の集落が見つかっており、今里遺跡や開田城ノ内遺跡では後期の段階に集落が大きく拡大することが判明している。また、大山崎町内の古墳時代の集落遺跡を見ると、後期には、下植野南・松田・算用田・金蔵・宮脇遺跡を包括する範囲で竪穴式住居跡が見つかっており、乙訓地域の中でも傑出した一大集落が営まれている。その後の後期後半には、今里・井ノ内・開田城ノ内・神足・友岡・伊賀寺遺跡で集落跡が確認されている。

飛鳥時代には、法起寺式伽藍配置と想定される乙訓寺が創建される。また、長岡京市と大山崎町との境界付近には鞆岡廃寺があり、瓦が出土している。

奈良時代には、神亀2(725)年に行基によって山崎橋が築かれ、天平3(731)年には、行基が布教活動の拠点にした山崎院が建てられる。また、疫病流行や藤原広嗣の乱などが起こる中、国分寺・尼寺が建立される。

延暦3(784)年、桓武天皇により長岡京が造営され、平城京から遷都される。長岡京遷都に伴って、道路や港の整備が行われる。長岡京初期の建物は、難波宮から移設されており、その際に港(山崎津)で荷揚げが行われ造営されたようである。

延暦13(794)年、桓武天皇は長岡京を廃し、平安京に遷都する。この時、久我暉と西国街道の道路が整備されたと考えられている。条里地割を斜めに横切る久我暉は、平安京の羅城門に続く道であり、西国街道は、町の山手を北へ延びる道で平安京に通じる。廃都後の長岡京域は水田へと変わっていく。

この頃、西山山地の麓には多くの寺院が建立されたようである。下海印寺・奥海印寺の地名の基となった海印寺もその一つである。海印寺は、嘉祥4(851)年に長岡京市奥海印寺明神前・大見坊付近に建立され、東大寺の末寺、華嚴宗の道場として栄えた。その場所は定かではないが、十の子院が造られたようである。現在、その一院である寂照院が残っている。その後、海印寺は定額寺となり、国家の庇護を受けるようになるが、平安時代末期には当時の摂政であった藤原基房の祈祷所として摂関家に寄進される。鎌倉時代には、文永2(1265)年に院宣が出され、東大寺別院の尊勝院の末寺となる。室町時代には、寂照院を残して一山焼亡し、その栄華は幕を閉じることとなる。<sup>(注2)</sup>

(岡崎研一)

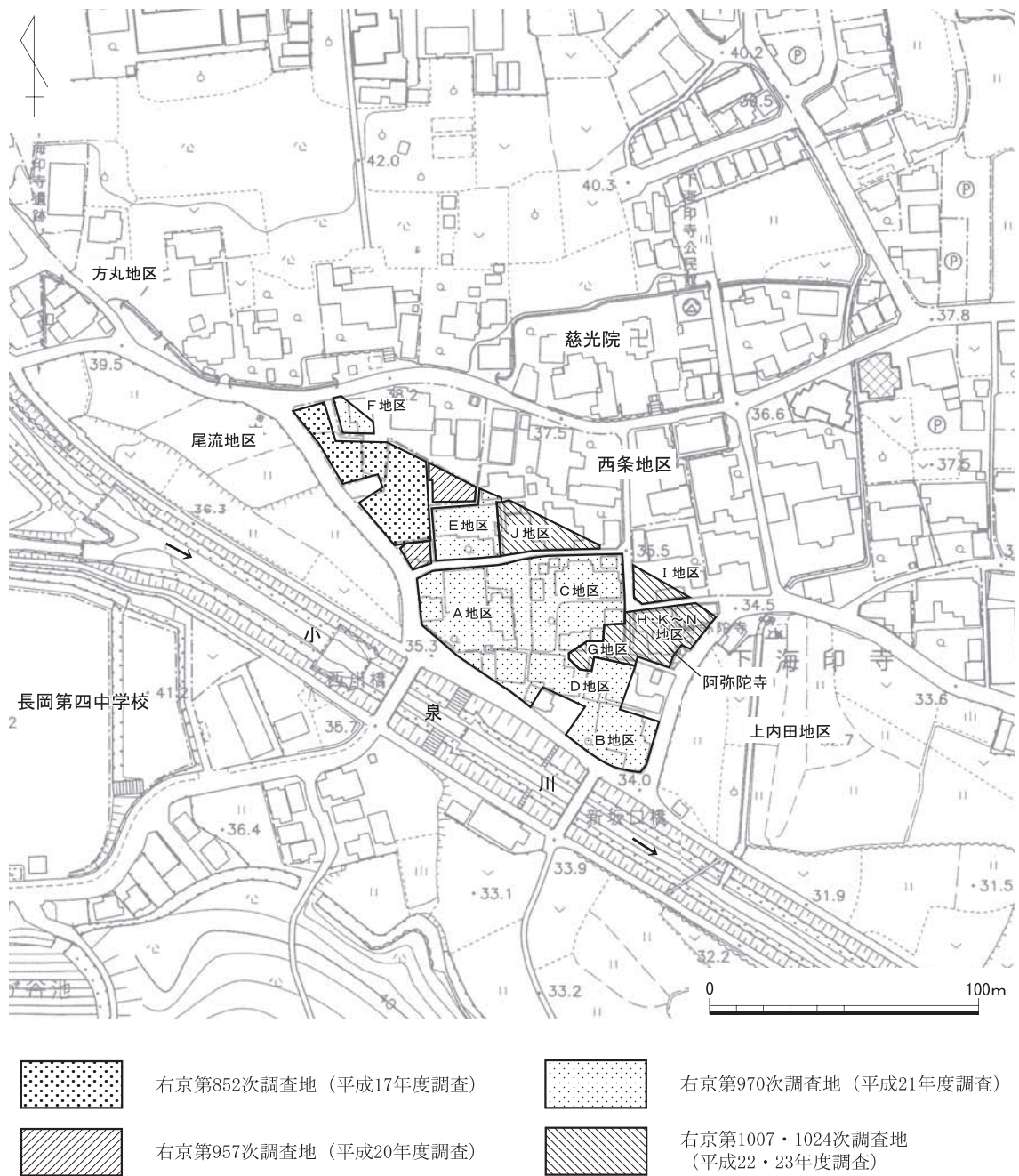
### 3. 調査経過(第2図)

平成20年度に右京第956次調査として、西条地区の東半分を対象に調査を実施した。<sup>(注3)</sup> その結果、遺構面が2面存在し、古墳時代から江戸時代にかけての遺構が存在することが明らかになった。この成果をもとに、平成21年度に右京第970次調査、平成22年度に右京第1007次調査、平成23年度に右京第1024次調査を実施した。



調査対象地は広範囲におよび、道路によって数か所に分断されている。調査も分割して行う必要があり、そのため、アルファベットを付して地区名を設定した。調査は、工事の進展に合わせて調査区を順次設定して実施し、右京第970次調査としてA～F地区を、右京第1007次調査としてG～J地区を、右京第1024次調査としてK～N地区を調査した。遺構番号は地区毎に付したため、遺構が地区を越えて広がる場合には、複数の遺構番号がつくものがある。また、掘立柱建物跡や柵列については、構成される柱穴のもっとも若い遺構番号を付した。

各遺構の詳細については、時代別に報告する。

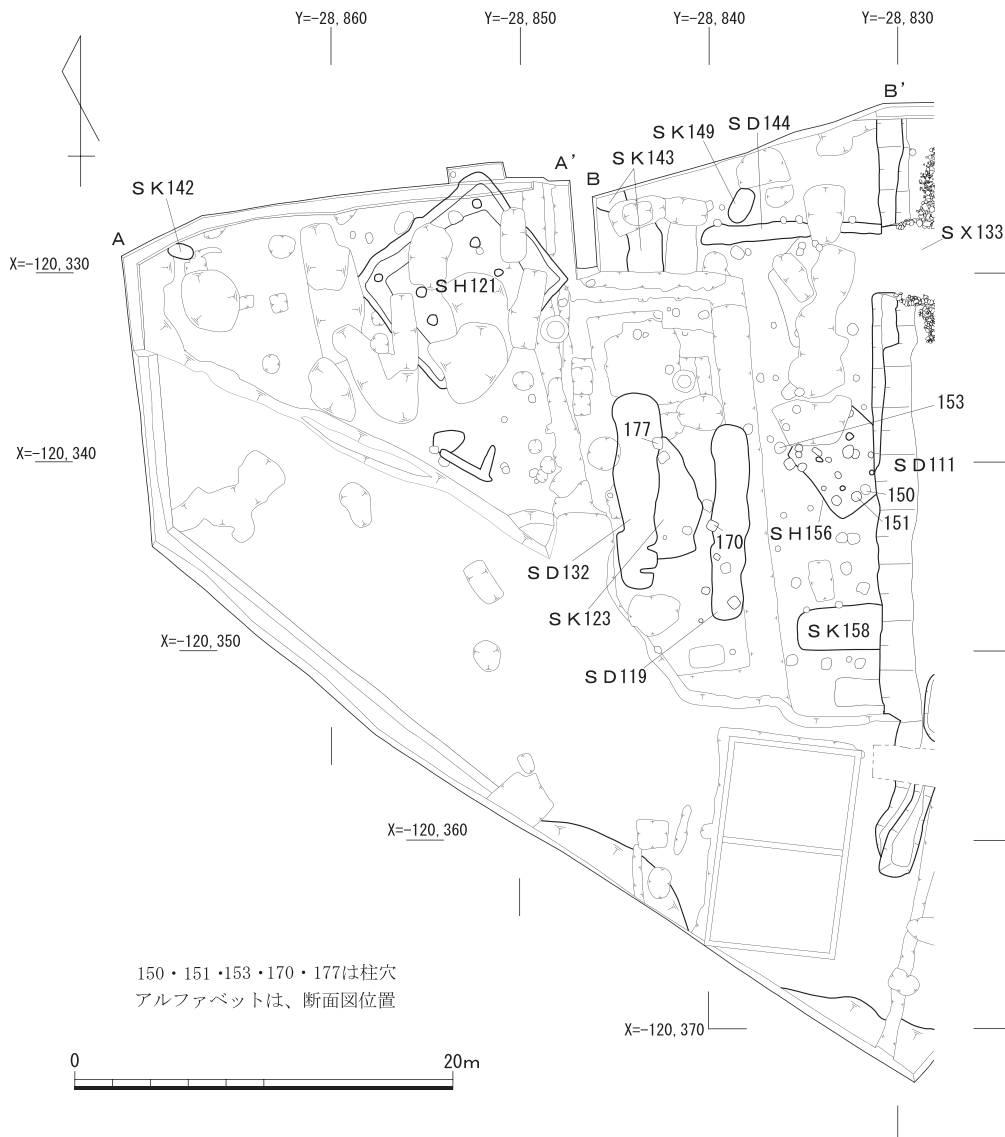


第2図 調査地位置図(G・H・K～N地区の詳細については第12図参照)

#### 4. 層序と調査概要

今回報告する調査地の大半は、西条地区の中央部から南東部にかけて広がっており（A～E・G～N地区）、北西部分にも一部調査地がある（F地区：第2図）。調査前はすべて宅地であった。発掘調査により検出した各地区の遺構面の標高は、F地区が37.0m前後、E地区がおよそ36.5m、A地区がおよそ36.2mで、南北方向の比高は0.8mほどである。東西方向の比高は、西端のA地区が36.2m、C地区ではおよそ35.1m、H地区東端ではおよそ34.2m、B地区南端ではおよそ33.8mで、比高は2.4mほどである。F地区とB地区南端では比高差3.2m、E地区とB地区南端では比高差2.7mを測る。このように、西条地区では北西部が高く、南東方向に下る地形である。

（1）A地区（第3・4図） 調査地北側の土層断面から、A地区東側では、にぶい黄色土（第15層）上面から江戸時代陶磁器を多量に包含する溝SD89（第60図）が掘り込まれることから、第15層の上面が江戸時代の遺構面になる。ただし、江戸時代の遺構は良好な状態では残っていなかった。A地区西側では第15層が認められないことから、江戸時代以降に大きく削平されているものと想

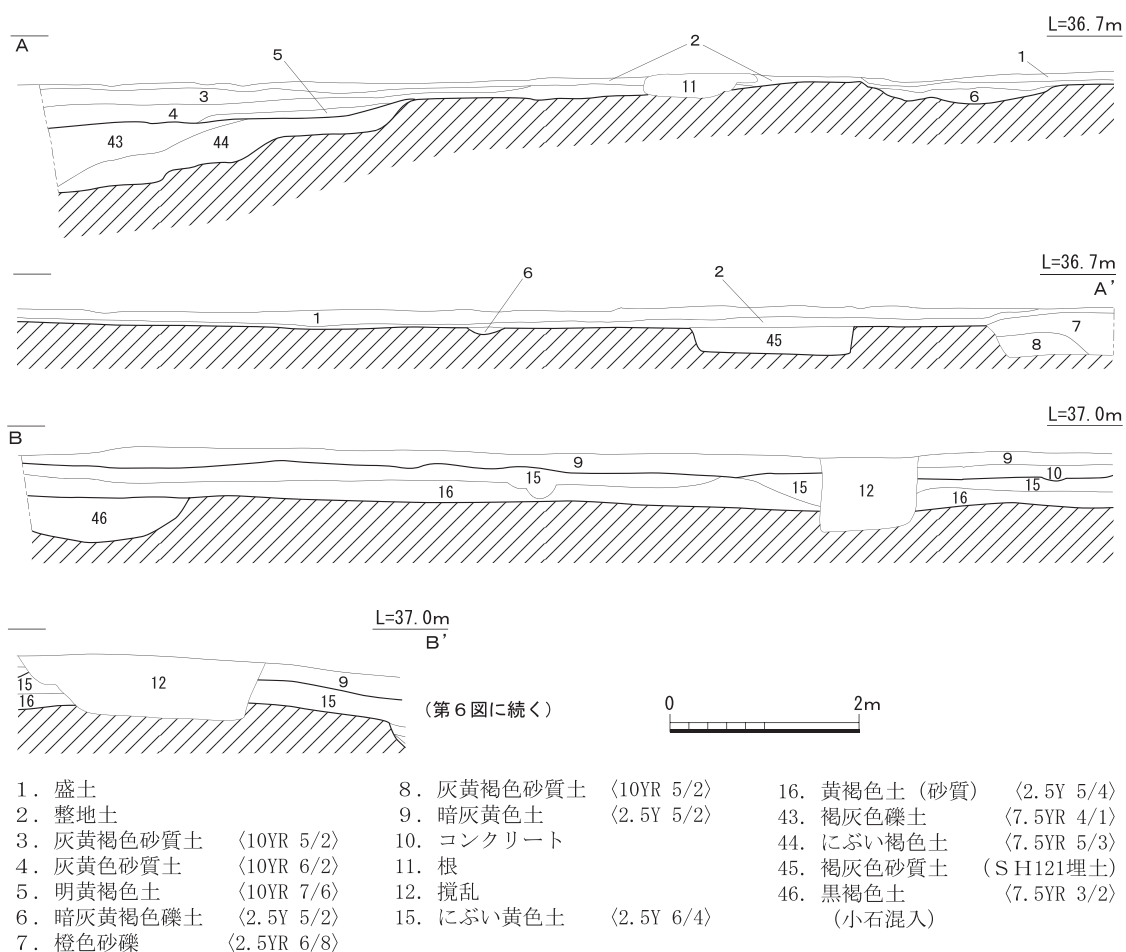


第3図 A地区遺構配置図

定された。また、調査地西側では、右京第957次調査地と同様に西側を下る地形を検出した。傾斜地には、褐灰色礫土(第43層)とにぶい褐色土(第44層)が堆積していた。出土遺物はなかったが、北側の第852・957次調査でも小泉川に向けて下る地形が確認されており、この斜面を埋める包含層中から庄内併行期の遺物が出土していることから、古墳時代初頭の段階には小泉川に向けて下る地形をなしていたと考えられる。また、A地区南半分は整地層(第9層)を取り除くと黄褐色粘質土の地山となった。顕著な遺構は検出できなかったが、土層の観察からこの地区は大きく削平を受けているものと考えられる。A地区北半分には、現代住居に伴う攪乱が数多くあったが、攪乱を受けていない部分で、古墳時代初頭の竪穴式住居跡S H121、土坑S K123、古墳時代後期の竪穴式住居跡S H156、長岡京期の溝S D119・132を検出した。いずれも黄褐色粘質土(地山)の上面で確認した。

(2) C地区(第5・6図) A地区の東側、B・D地区の北側をC地区として調査した。この地区は、後述のように、平安時代末期に築かれた屋敷地の南西部あたる。

この地区では、にぶい黄色土(第15層)および地山である黄褐色粘質土の上面で遺構を検出した。前者は江戸時代以降のもので、後者は古墳時代後期から鎌倉時代のものである。検出した遺構は、第60図の溝S D89や柱穴群が江戸時代以降のもので、第5図の遺構群は古墳時代から鎌倉時代の

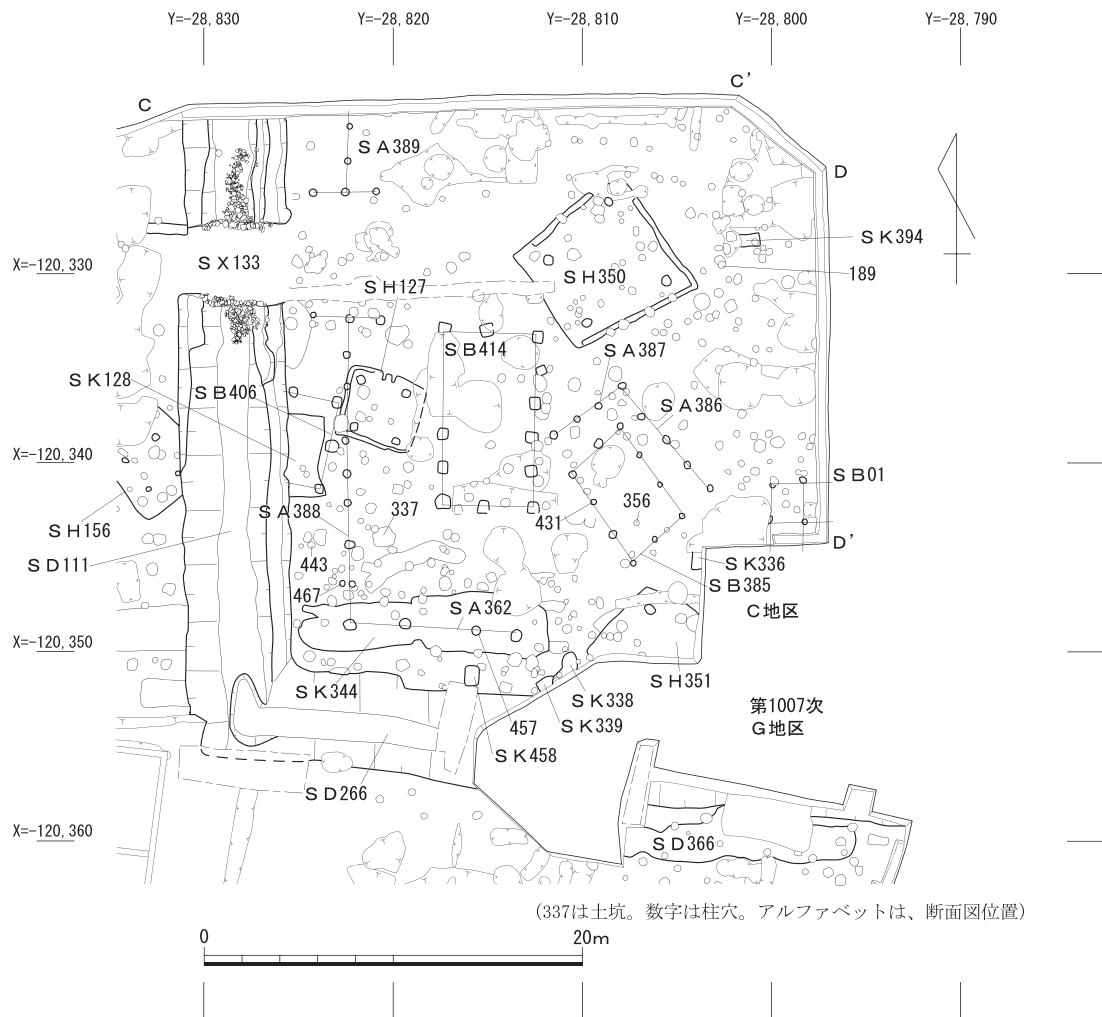


第4図 A地区土層断面図(土層図の位置は第3図参照)

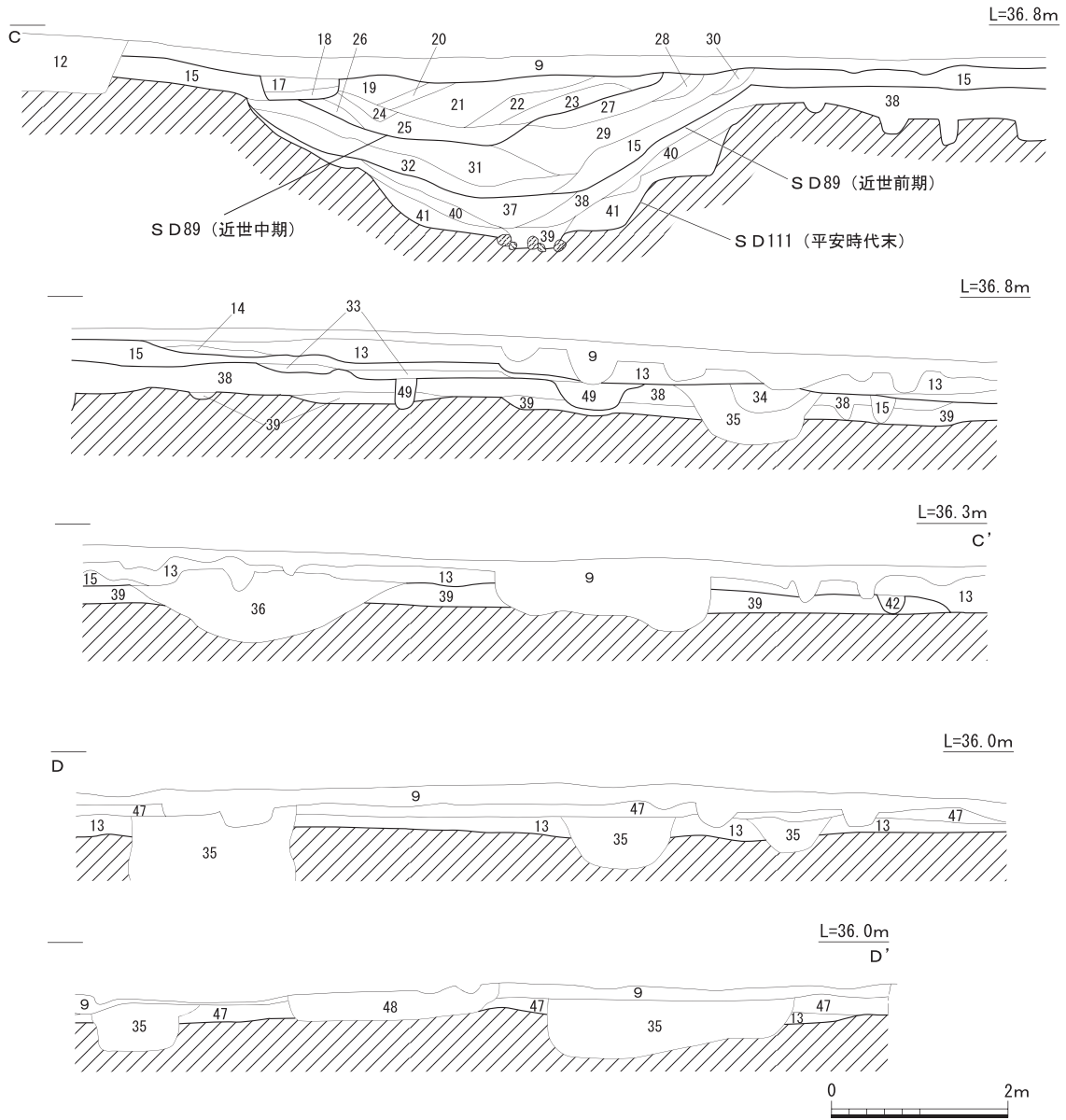


ものである。古墳時代後期の遺構には、竪穴式住居跡 S H127・350・351、土坑 S K394がある。平安時代末期の遺構には、堀 S D111・266、堀の上に構築された土橋 S X133、堀の内側を巡る柵列 S A362・388・389、区画内施設である掘立柱建物跡 S B414がある。鎌倉時代の遺構には、掘立柱建物跡 S B385と柵列 S A386・387がある。

(3) B地区(第7・8図) 調査対象地南東隅に設定した調査区である。包含層である明黄褐色土(第2層)とにぶい黄色砂質土(第3層)を除去すると礫混じり黄褐色粘質土の地山となり、遺構はこの地山上面で検出した。B地区北半では、後世の削平や攪乱が著しく、顕著な遺構は認められなかった。遺構は、調査地の南東部において検出した。調査地東端の溝 S D112の西側で古墳時代後期の竪穴式住居跡 S H26を検出した。溝 S D79・112は長岡京期の溝である。S D79からは土馬やミニチュア竈、鍋などの祭祀に関連する遺物が多く出土した。調査地の西方約250mに所在する西山田遺跡と関連する遺構であると考えられる。<sup>(注4)</sup>土坑 S K125も長岡京期の遺構と判断される。掘立柱建物跡 S B08は、S D79と重複して見つかった建物跡で、長岡京期以降のものと判断される。これらの遺構は、礫混じり黄褐色粘質土(地山)の上面で検出した。この地区の東方約50mにある上内田地区では、古墳時代初頭と後期の竪穴式住居跡や流路が確認されている。<sup>(注5)</sup>現



第5図 C地区遺構配置図

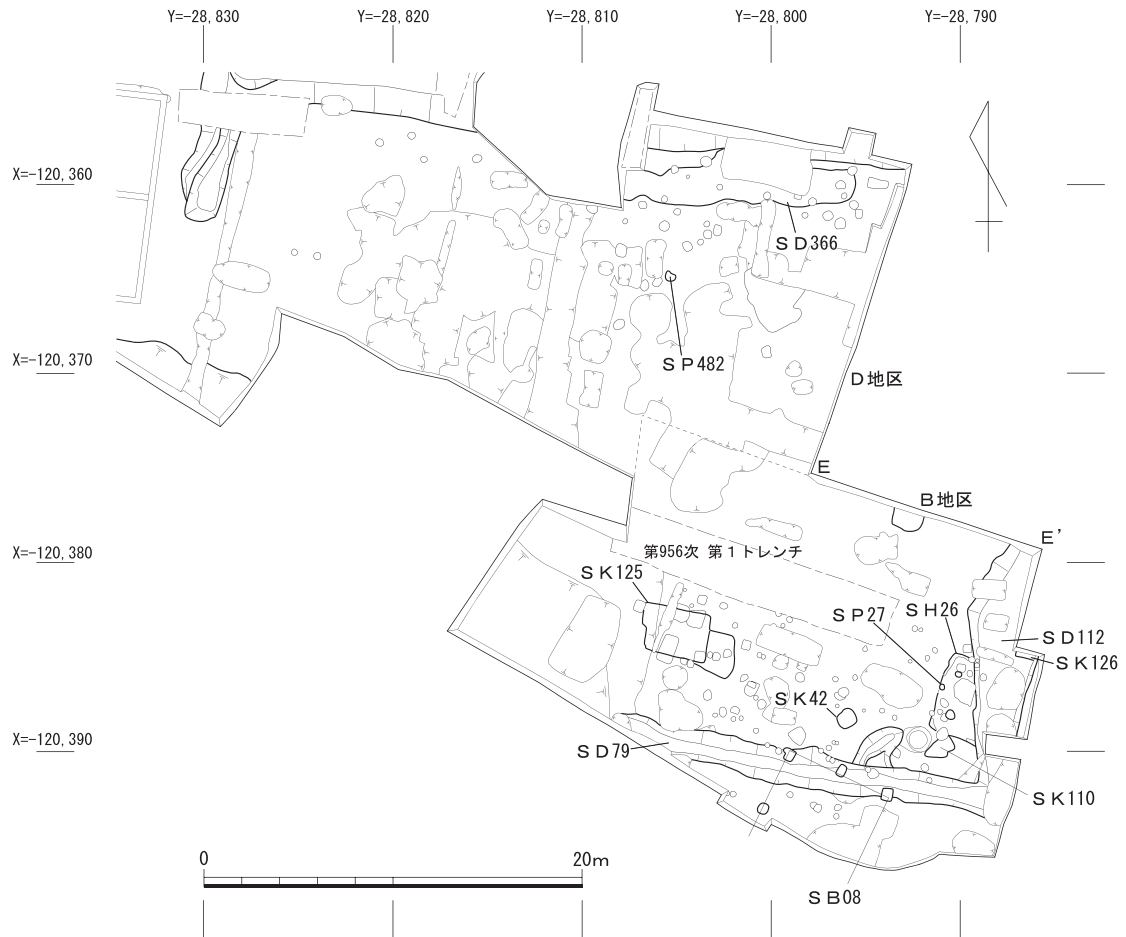


- |  |  |  |
|--|--|--|
| 9. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)                    | 24. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)<br>(焼土・壁土混入)     | 36. にぶい褐色土 (7.5Y 5/3)<br>(拳大の礫混入)      |
| 12. 攪乱                                 | 25. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)<br>(拳大～人頭大の石混入)    | 37. 暗褐色礫土 (10YR 3/3)<br>(人頭大～小石を多量に含む) |
| 13. 灰黄色土 (2.5Y 6/2)                    | 26. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)<br>(焼土・壁土混入)     | 38. 黒褐色土 (7.5YR 3/2)<br>(小石混入)         |
| 14. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)<br>(焼土・壁土混入)     | 27. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)<br>(拳大～人頭大の石混入)    | 39. 明黄褐色礫土 (10YR 6/6)                  |
| 15. にぶい黄色土 (2.5Y 6/4)<br>(やや砂質)        | 28. 黄褐色砂礫土 (2.5Y 5/3)                  | 40. 黒褐色土 (2.5Y 3/1)<br>(礫混入)           |
| 17. 灰褐色礫土 (7.5YR 6/2)                  | 29. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 5/2)<br>(2cm～拳大の石混入) | 41. 黒褐色砂質土 (2.5Y 3/1)                  |
| 18. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)<br>(焼土・壁土混入)     | 30. 褐色土 (7.5YR 4/3)                    | 42. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/3)                 |
| 19. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)<br>(炭混入)          | 31. 灰黄色土 (2.5Y 6/2)                    | 47. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)<br>(焼土・壁土混入)     |
| 20. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)<br>(焼土・壁土混入)     | 32. にぶい黄色土 (2.5Y 6/4)<br>(壁土若干混入)      | 48. コンクリート                             |
| 21. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)                   | 33. 灰黄褐色土 (10YR 4/2)                   | 49. 黄灰色土 (2.5Y 6/1)<br>(やや砂質)          |
| 22. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 5/2)<br>(2cm～拳大の石混入) | 34. 黄橙色礫土 (10YR 8/6)                   |  |
| 23. 灰黄色砂質土 (2.5Y 6/2)<br>(焼土・壁土混入)     | 35. 黄橙色土 (10YR 8/6)                    |  |

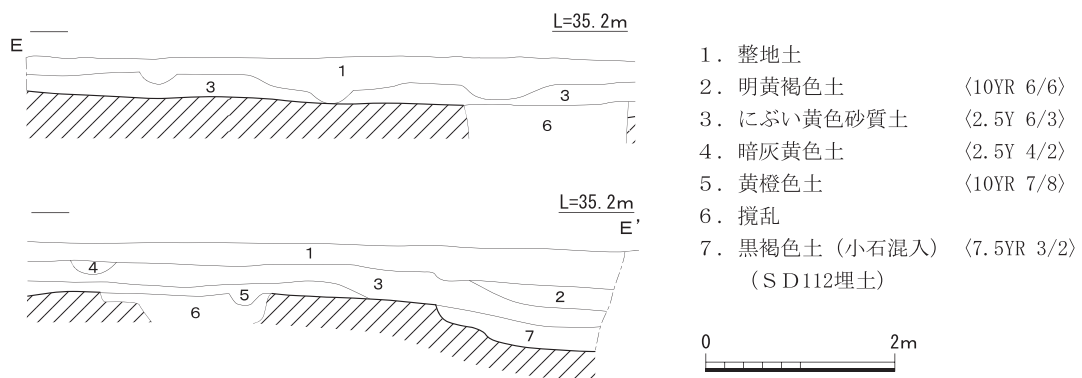
第6図 C地区土層断面図(土層図の位置は第5図参照)

在の道路に沿う形で微高地が分布し、小泉川に沿って湿地帯が認められるが、竪穴式住居跡はその微高地上で検出されている。

(4) D地区(第7図) B地区とC地区をつなぐ形で設定した。地表下には明黄褐色土層、にぶい黄色砂質土層が堆積しており、礫混じり黄褐色粘質土(地山)まで掘削して、精査を行った。精査の結果、長岡京期とみられる東西溝 S D366を検出することができた。その他数十か所で柱穴を検出したが、掘立柱建物跡などを復元するには至らなかった。



第7図 B・D地区遺構配置図

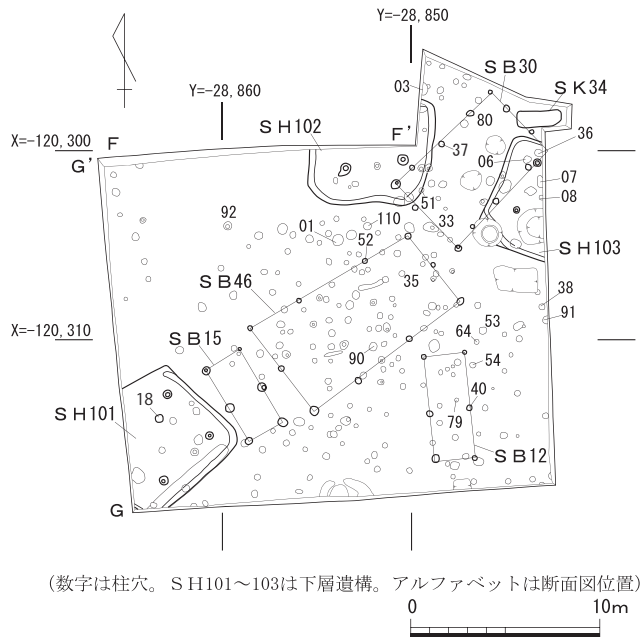


第8図 B地区土層断面図(土層図の位置は第7図参照)

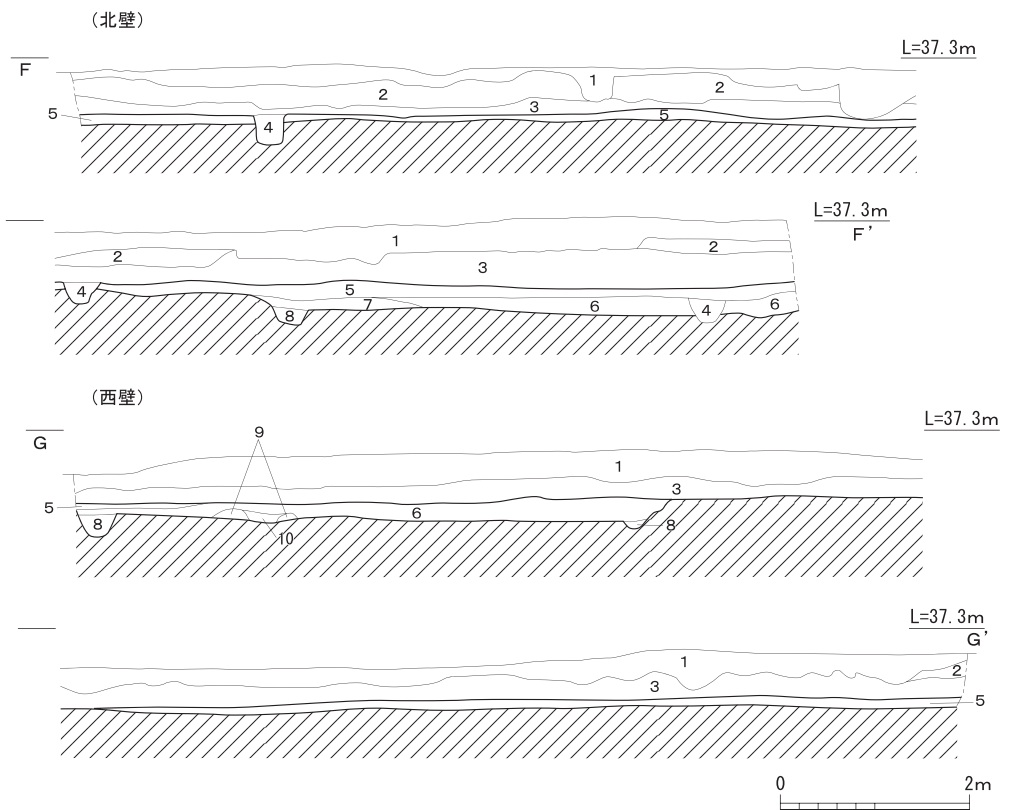


(5) E地区(第9・10図) A地区北側に設定した地区で、第852・957次調査地に隣接する。この地区では、遺構面が2面存在した。上層の遺構面は褐色礫土(第5層:山砂利を敷き叩きしめた整地土)の上面で、柱穴や土坑など中世の遺構を検出した。地区南西部では後世の削平により整地土は認められなかった。下層の遺構面はさらに10cm程下げた礫混じりの黄褐色土(地山)の上面で、竪穴式住居跡など古墳時代の遺構を検出した。

中世の遺構には掘立柱建物跡4棟(SB12・15・30・46)、土坑墓1基(SK34)、柱穴群がある。柱穴の中には、土師



第9図 E地区遺構配置図



- |                                   |  |                                      |
|-----------------------------------|--|--------------------------------------|
| 1. 盛土・攪乱                          | 5. 褐色礫土 (10YR 4/4)<br>(礫を多く含む。山砂利を敷き、叩きしめた整地土) | 8. 暗褐色粘質土 (10YR 3/4)<br>(4~6cm大の礫含む) |
| 2. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)             | 6. 黒褐色粘質土 (10YR 2/2)<br>(4~5cm大のれきを含む)         | 9. 赤褐色焼土 (10R 4/4)<br>(焼けた小石を含む)     |
| 3. 褐色土 (10YR 4/6)<br>(2~3cm大の礫含む) | 7. 黒褐色粘砂土 (10YR 2/2)<br>(4~5cm大のれきを含む)         | 10. 暗赤色土 (10R 3/6)<br>(焼土塊を含む)       |
| 4. 暗褐色土 (10YR 3/3)                |  |                                      |

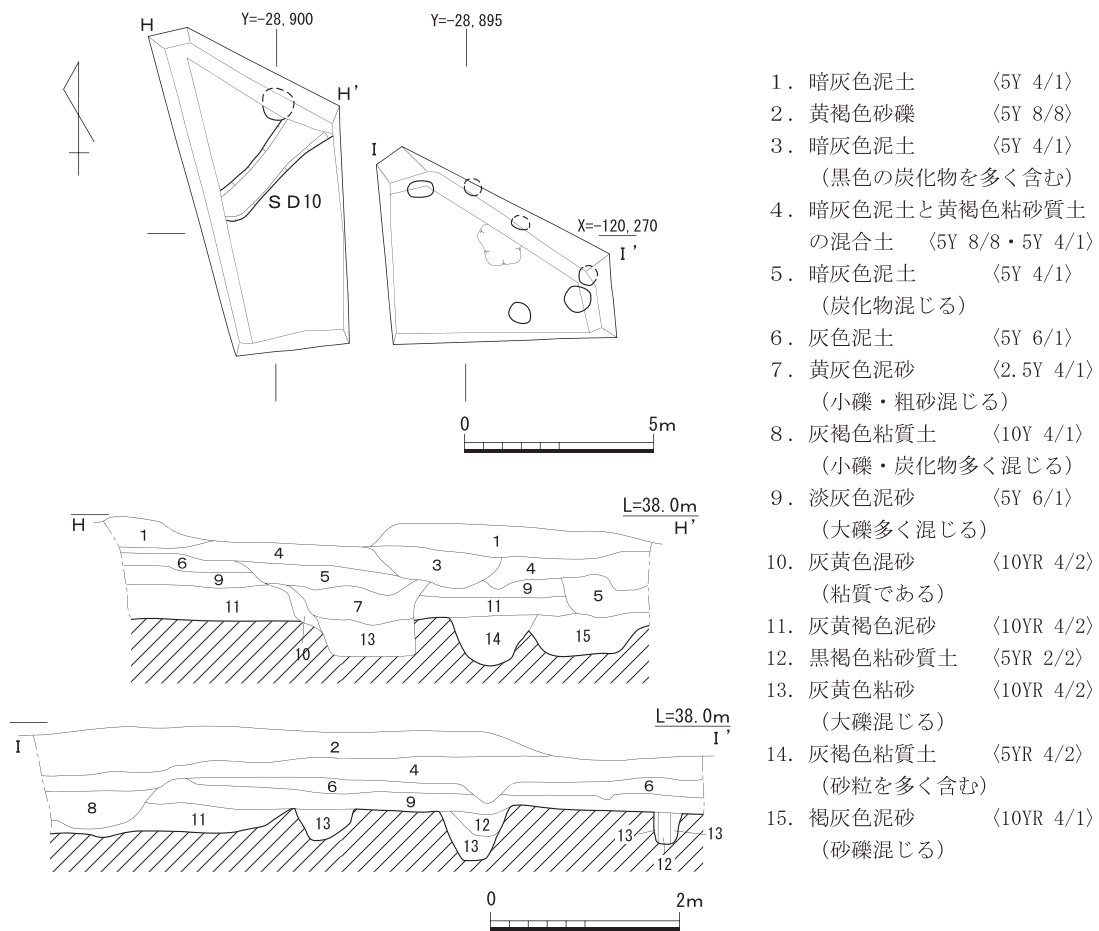
第10図 E地区土層断面図

器皿や瓦器碗が完形に近い状態で埋められていたものもある。また、古墳時代の遺構には竪穴式住居跡 S H101～103があり、出土遺物から古墳時代後期の遺構と考えられる。S H103の東半分は J 地区で確認しており、J 地区では S H79としている。

(6) F 地区(第11図) 西条地区でもっとも北側に位置する地区である。灰色泥土(第6層)や淡灰色泥砂(第9層)を掘り込む攪乱は江戸時代のものである。その下に堆積する灰黄褐色泥砂(第11層)は出土遺物がなく時期不明である。この地区では後世の攪乱があり、黄褐色土(地山)の上面で柱穴や溝を確認した。出土遺物がなく時期については不明である。南側の右京第852次調査地北端でも柱穴を数か所で検出していることから、F 地区で検出した柱穴はそれに伴う可能性がある。

(7) G 地区(第12図) 右京第970次調査の C・D 地区間を G 地区として、電柱設置か所付近については L～N 地区として調査を実施した。G と H 地区の境は L 地区東側の道である。

G 地区には、多数の攪乱があり、それらの間から柱穴や溝跡などを検出した。遺物包含層である褐灰色土(第13図第19層)を除去すると黄褐色土の地山となる。遺構は地山の上面で検出した。この地区では、北側の H 地区から南に続く掘立柱建物跡 S B01に伴う柱穴や、南側の C 地区から



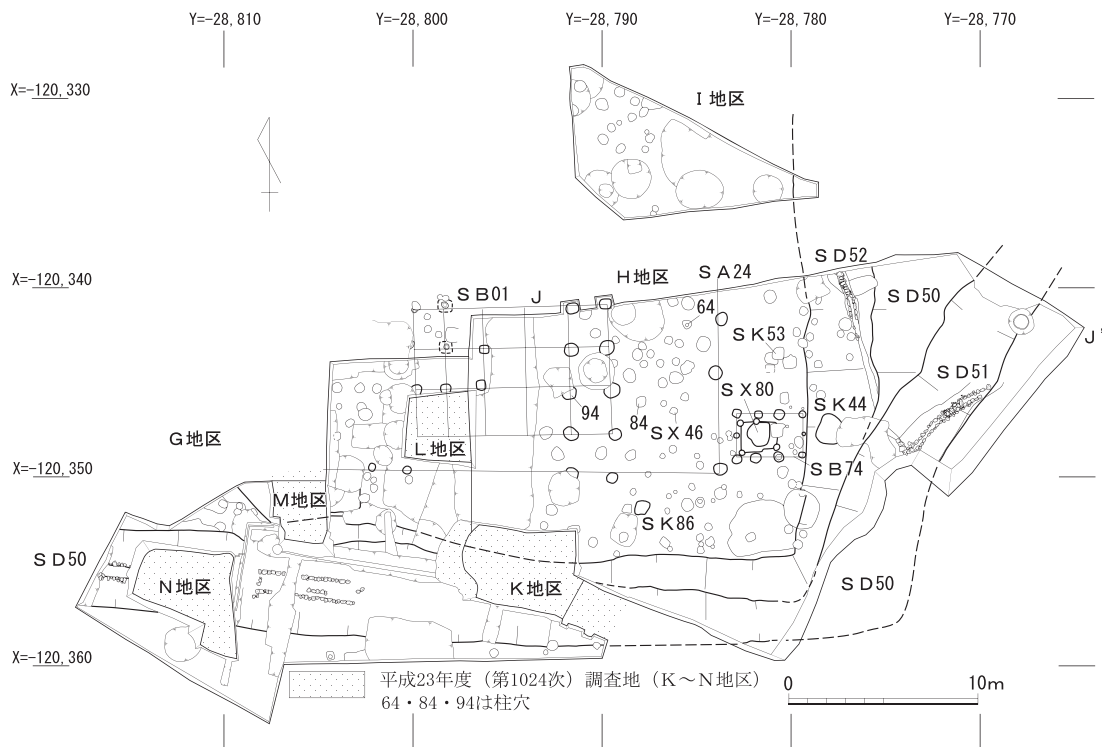
第11図 F 地区遺構配置図・土層断面図

続く江戸時代の溝と平安時代末期の堀を検出した。江戸時代の溝はS D21とし、平安時代の堀はS D50とした。

(8) H地区(第12・13図) 調査対象地東端にあたる。阿弥陀寺が建っていた場所である。地区の南東部には、農業用水として利用されていた田苗池がある。地区北側で土層断面を観察したところ、遺構面は2面存在した。第1面は褐灰色土(第19層)や褐色砂礫(第21層)の上面で、江戸時代の遺構を、第2面は地山である明褐色礫土の上面で、平安時代末期から中世にかけての遺構を検出した。江戸時代の遺構としては、地区の南側をG地区から田苗池の方向に延び、池付近で大きく屈曲して北から北東方向に延びる溝S D21を検出した(第60図)。平安時代末期から中世の遺構としては、地区北西部で掘立柱建物跡S B01を、その建物を囲む柵列S A24を、櫓的な構造物の可能性が高いS B74、皇朝十二銭を埋納していた土坑S X46、土坑S K44・86などがある。また、南辺を画する堀S D50と柵列S A24の間には褐色土(第22・24層)と褐灰色土(第23層)が0.2mの厚さで堆積しており(第39図)、この層から瓦器片や土師器片が多量に出土した。遺物や土層の堆積状況からS D50が埋まっていく過程で堆積した層であると考えられ、上面から掘り込まれるS K86(第59図)などは鎌倉時代の遺構と考えた。

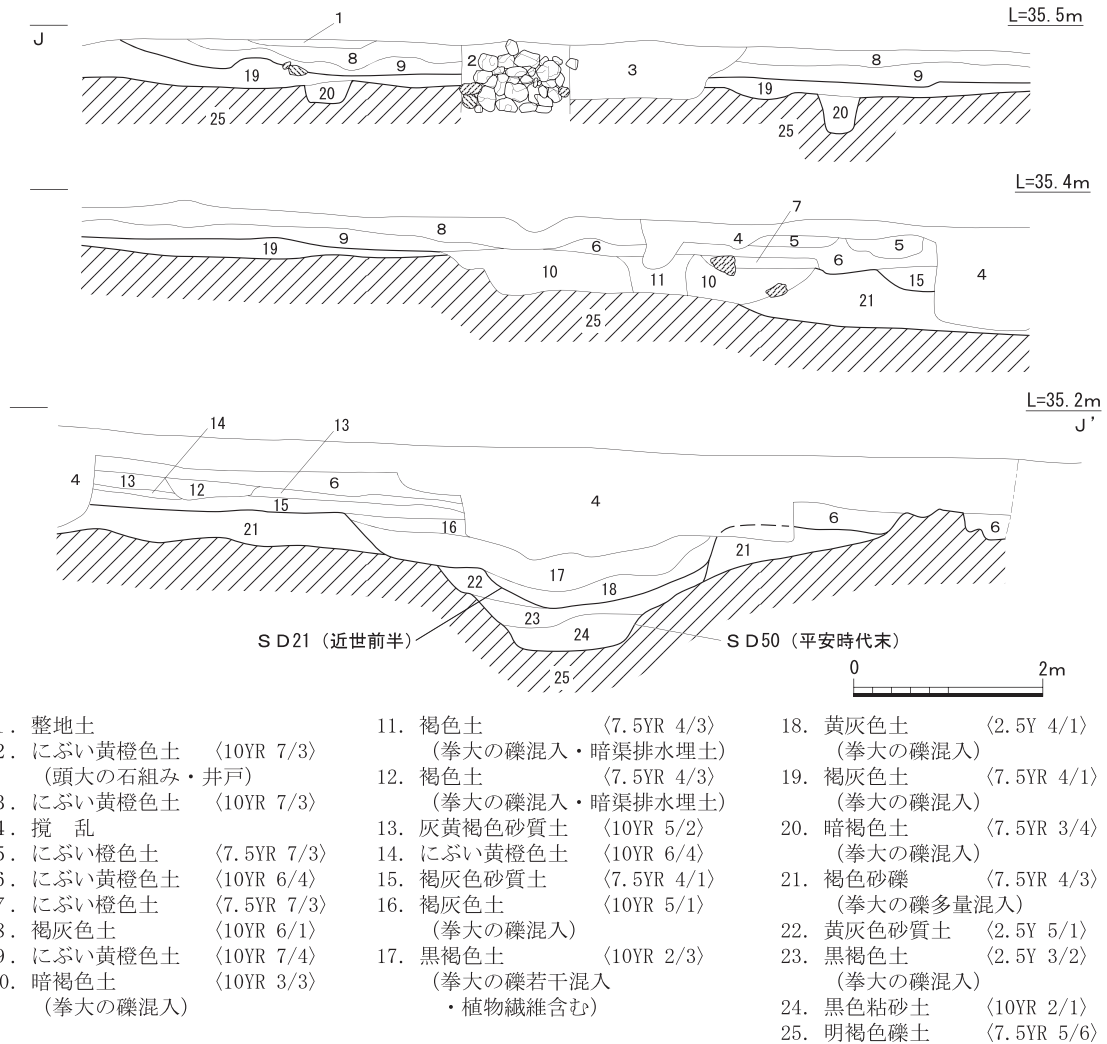
にぶい黄橙色土(第2・3層)は井戸本体とその裏込め土である。また、地区東側では溝S D21を切る形で、2列の石列からなる溝S D51・52を検出した(第60図)。これは、明治時代から現代にかけての阿弥陀寺の東限に沿う位置にあることから、現代に非常に近い遺構と判断される。

(9) I地区(第12図) H地区北側に設定した地区である。多くの攪乱がある中で、地区西側でわずかな数の柱穴を検出し、東端近くで東側を下る地形の落ちを確認した。柱穴群は掘立柱建物



第12図 G・H・I地区遺構配置図

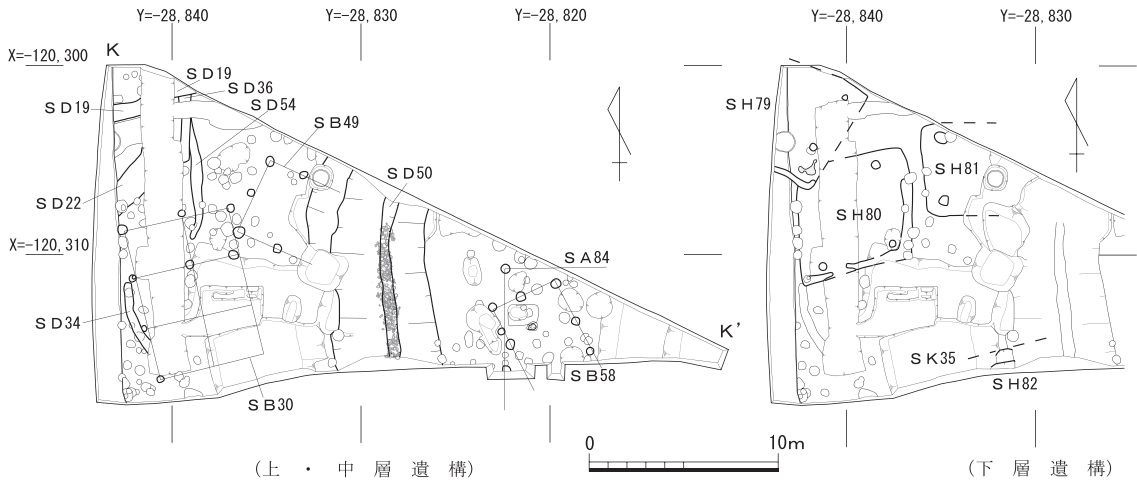




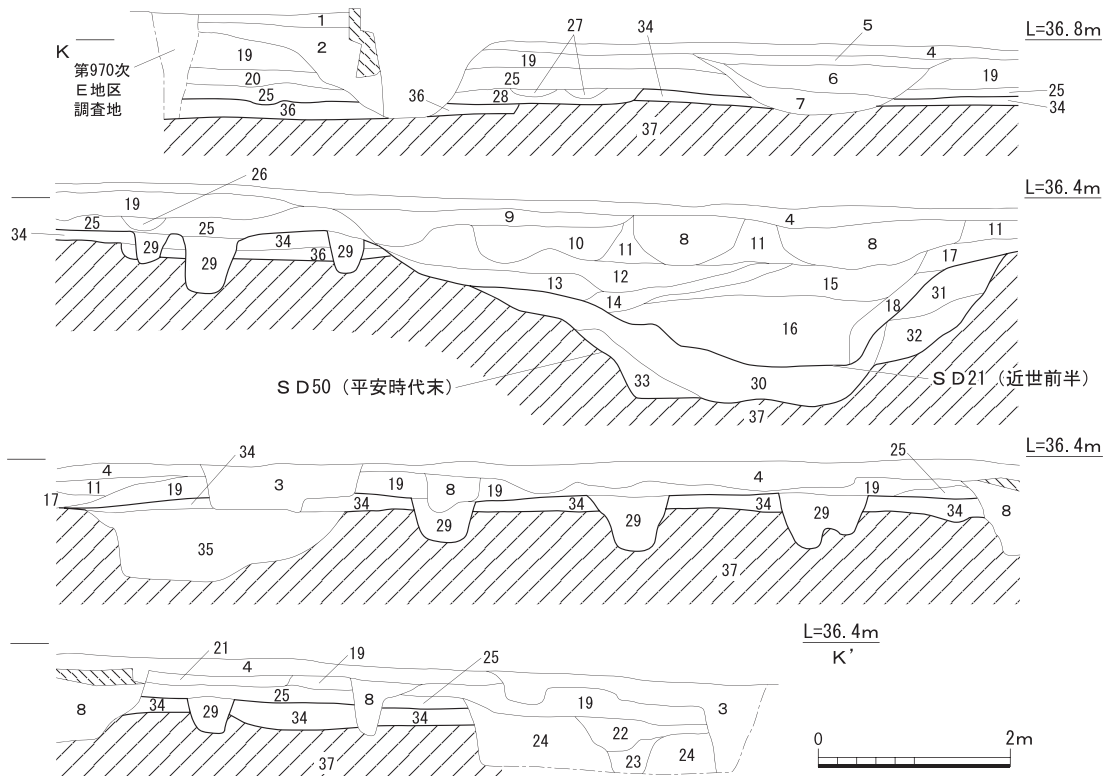
第13図 H地区土層断面図

跡に復元できなかった。東端で検出した地形の斜面は、H地区南東コーナー部から続くS D50の西肩部にあたる。H地区の土層断面と同じであるため、図示していないが、基本的な層位は、褐灰色土(第8層)・にぶい黄橙色土(第9層)・黄褐色礫土(地山)となる。

(10) J地区(第14・15図) C地区の北側で、E地区の東側に設定した調査区である。この地区では、遺構面を3面確認した。第1面は明黄褐色砂質土(第19層)上面で、江戸時代の遺構を、第2面は灰黄褐色土(第34層)上面で、平安時代末期から中世にかけての遺構を、第3面は暗褐色礫土(第37層)で、古墳時代の遺構をそれぞれ検出した。江戸時代の遺構としては、地区中央を縦断する溝S D20・21、土坑S K35がある。平安時代末期から中世の遺構は、C地区の屋敷跡から続く遺構として、堀S D50、柵列S A84である。その他、掘立柱建物跡S B30・49・58、溝S D19・34・36・54などがある。これらの遺構を第14図の上・中層遺構として図示した。古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡S H79~82があり、第14図の下層遺構として図示した。竪穴式住居跡S H82は古墳時代初頭、竪穴式住居跡S H79~81は古墳時代後期のものである。地区の東側では、灰黄褐色土(第34層)を除去し精査したが、下層では遺構は検出できなかった。



第14図 J 地区遺構配置図



- |                          |                            |                         |
|--------------------------|----------------------------|-------------------------|
| 1. 整地土                   | 13. 礫混じり褐色砂質土 <10YR 4/4>   | 27. 明赤褐色土 <5YR 5/6>     |
| 2. 埋土                    | 14. にぶい黄褐色砂質土 <10YR 4/3>   | (焼土)                    |
| 3. 攪乱                    | 15. 褐色砂礫土 <10YR 4/6>       | 28. 暗赤褐色土 <5YR 3/2>     |
| 4. 褐灰色砂質土 <10YR 5/1>     | 16. 褐色砂質土 <7.5YR 4/3>      | 29. にぶい黄褐色礫土 <10YR 5/3> |
| 5. 褐灰色土 <7.5YR 5/1>      | (拳大～頭大の礫混入)                | 30. 暗褐色砂礫土 <10YR 3/3>   |
| 6. 橙色土 <7.5YR 7/6>       | 17. 褐灰色砂質土 <7.5YR 5/1>     | (細砂混入)                  |
| (拳大～頭大の礫多く混入)            | 18. 黄灰色細砂 <2.5Y 5/1>       | 31. 暗褐色砂礫土 <10YR 3/3>   |
| 7. 明褐色砂質土 <7.5YR 5/6>    | 19. 明黄褐色砂質土 <10YR 7/6>     | 32. 暗褐色礫土 <10YR 3/3>    |
| 8. 攪乱                    | 20. 褐灰色砂礫土 <10YR 4/1>      | 33. 黒褐色砂質土 <10YR 3/1>   |
| 9. 明黄褐色砂質土 <10YR 7/6>    | 21. 明赤褐色土 (焼土) <5YR 5/6>   | 34. 灰黄褐色土 <10YR 4/2>    |
| 10. 攪乱                   | 22～24. 攪乱                  | 35. 攪乱                  |
| 11. にぶい黄褐色砂質土 <10YR 5/3> | 25. 灰褐色砂礫土 <7.5YR 4/2>     | (3 cm大の礫混入)             |
| 12. 灰褐色砂質土 <7.5YR 4/2>   | 26. 橙色土 (焼土・炭混入) <5YR 6/6> | 36. 黒褐色土 <7.5YR 3/2>    |
| (3 cm大の礫混入)              |                            | 37. 暗褐色礫土 <10YR 3/3>    |

第15図 J 地区土層断面図

(11) K～N地区(第12図) 平成23年度に右京第1024次調査として調査を実施した地区である。調査か所は4か所あり、東からK～N地区とした。K・L地区では、G・H地区で確認していた配管に伴う攪乱が続いているのが認められた。その攪乱は堀S D50の底面をも掘り抜いており、遺構を検出するには至らなかった。M地区では遺物包含層である褐灰色土を除去すると、黄褐色土の地山を掘り込んで竪穴式住居跡の一隅を検出した。この住居跡は、C地区南東隅で検出した竪穴式住居跡S H351の南半分にあたる。N地区では、その大半が平安時代の堀S D50と江戸時代の溝S D21が占め、両遺構は第38図と同様の土層の堆積が認められた。

(岡崎研一)

## 5. 検出遺構

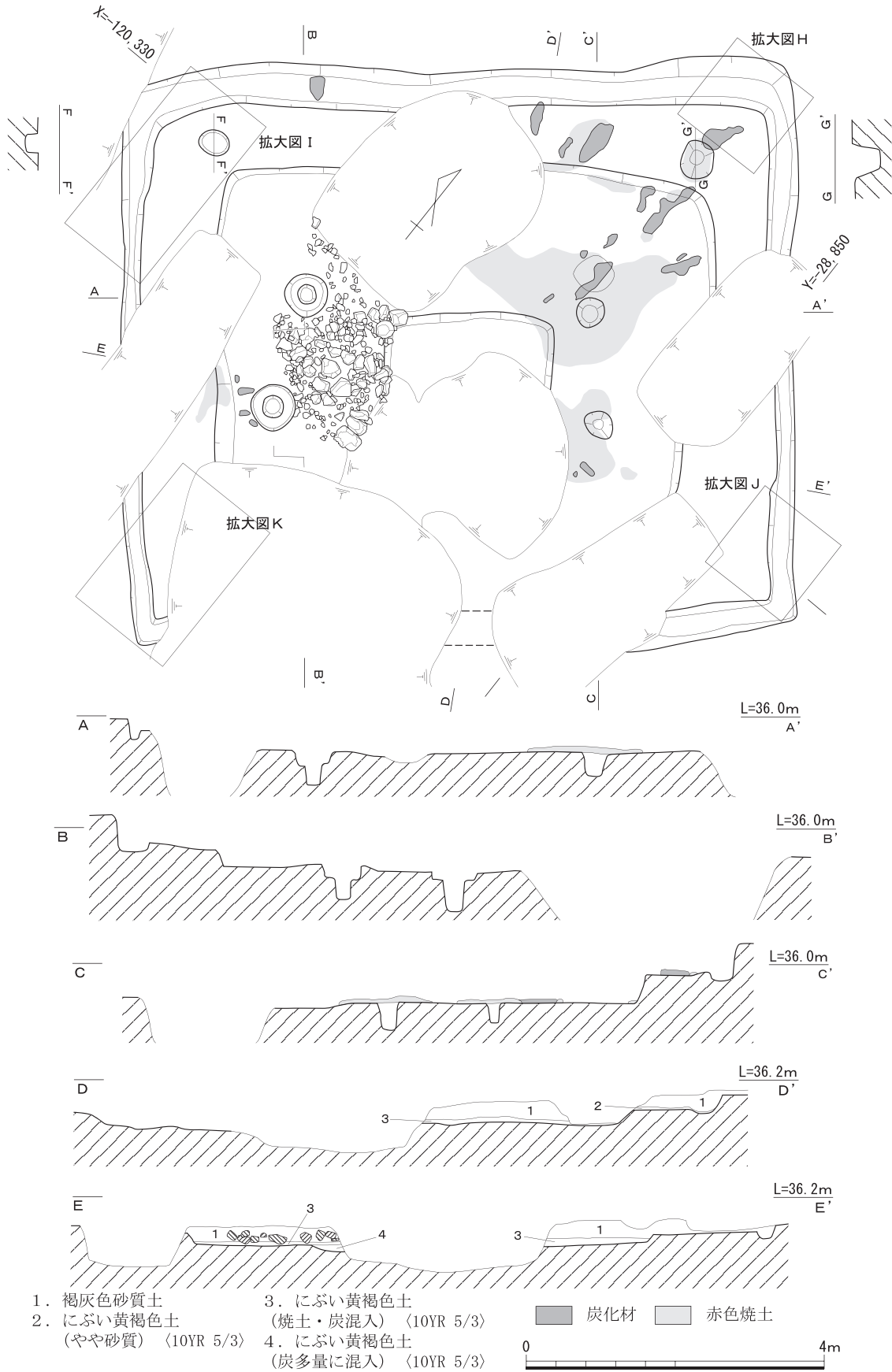
右京第970・1007・1024次調査で検出した遺構は、古墳時代初頭から江戸時代にかけてのものである。以下、時代ごとに遺構の詳細を記述する。

### (1) 古墳時代初頭

この時期の遺構としては、A地区で検出した竪穴式住居跡S H121、土坑123・149とJ地区の竪穴式住居跡S H82がある。

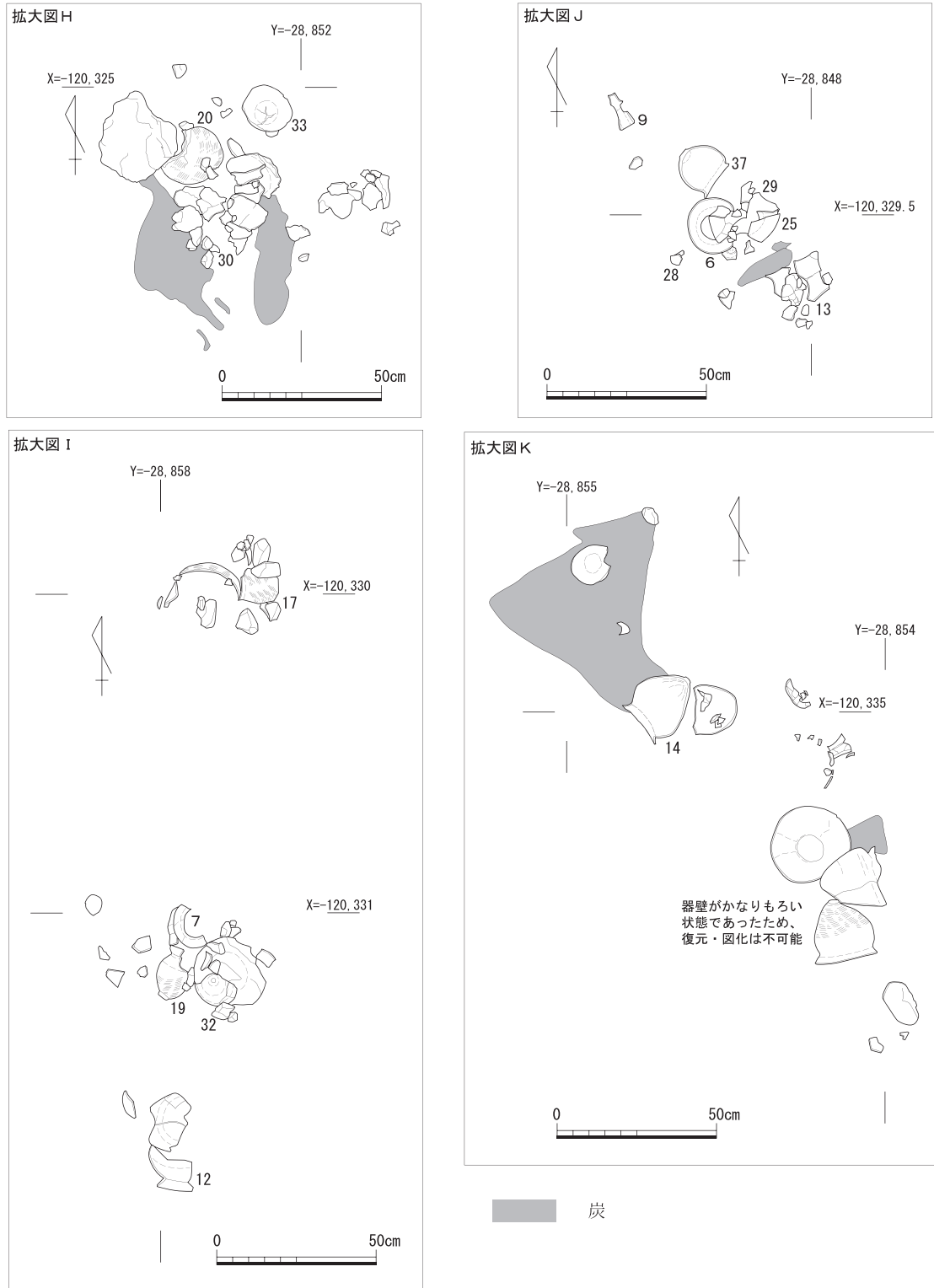
**竪穴式住居跡S H121(第3・16・17図)** A地区北西部で検出した。平面形は方形で、規模は9.0×7.6m、検出した深さは0.8mを測り、方位はN40°Wである。住居跡は6か所の攪乱により大きく削平されていた。竪穴床面の四周には、幅0.3～0.6m、深さ0.1mの周壁溝が巡る。周壁溝の内側では幅0.8～1.3mの範囲が、床面より0.2～0.3m高く掘り残されていて、ベッド状遺構となっていた。床面では4か所の主柱穴を検出した。その規模は、径0.4～0.6m、深さ約0.5mである。ベッド状遺構の北・西コーナーで径0.2～0.4m、深さ0.2～0.3mのピットを検出した。上部構造を支える支柱の痕跡と判断される。東・南コーナーは攪乱のため検出できなかったが、それぞれのコーナー部分にも支柱が存在したと考える。また床面中央では、床面から約0.1m掘り下げられた方形の落ち込みを検出した。この落ち込み中には、多量の炭が混じったにぶい黄褐色土が埋まっており、炉として機能していたと考えられる。ただし、底面・壁面は火を受けた痕跡は認められない。この遺構の南半分は攪乱で消失していたが、西辺付近で拳大から人頭大の石を敷いた状況が認められた。この住居内床面直上付近では、数か所で径0.2～0.4m程度の焼土を検出したほか、部分的に炭化材が放射状に分布していた。このような状況から、焼失家屋であったと考える。またこの住居内から出土した土器は、庄内併行期のもので、主にベッド状遺構の上面から出土した。これら土器の大半は、かなりの歪みが認められるが、その原因は不明である。また器壁面が薄く剝離したものもあり、火を受けたためと考えられる。南隅から出土した土器(第17図拡大図K)については、器壁がもろく、接合・実測はできなかった。

**竪穴式住居跡S H82(第14・18図)** J地区中央の南壁近くで検出した。検出したのは北壁の一部で、南側に二段の掘り込みを検出した。一段目から二段目に落ちる肩部分よりほぼ完形の庄内期の土器が出土しており、ベッド状遺構を備えた住居跡と判断した。住居跡東側はS D50・21



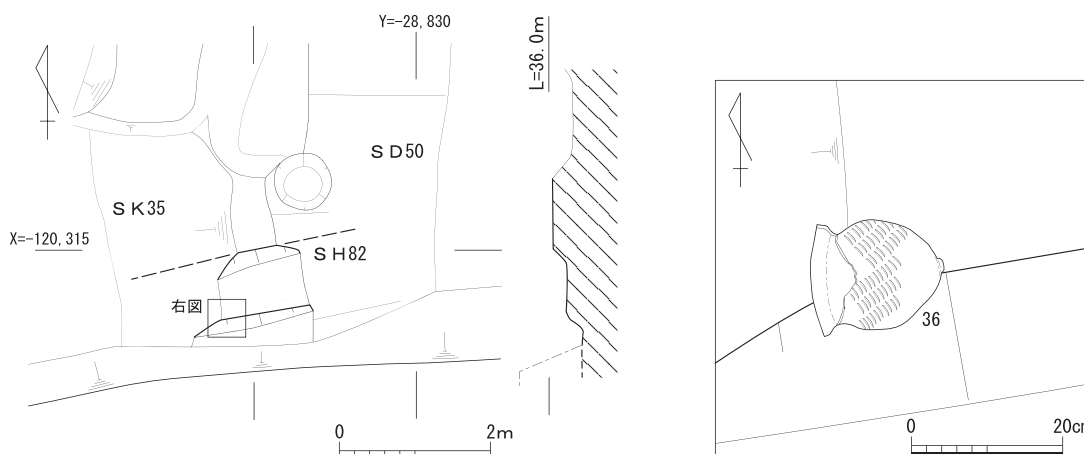
第16図 A地区竪穴式住居跡 S H121実測図





第17図 A地区竪穴式住居跡S H121内遺物出土状況図

に、西側は土坑S K35に削平されており、南半分は調査地外へ続くため、1.7×1.3mの範囲を検出ただけである。床面までの深さは0.4mで、幅0.6mのベッド状遺構を有し、床面から0.2m高い。周壁溝は存在しない。ベッド状遺構端から庄内併行期の壺(第18図36)が出土した。また、西側の江戸時代の土坑S K35内からも庄内併行期の土器片(第65図46)が出土しているが、これらの土器

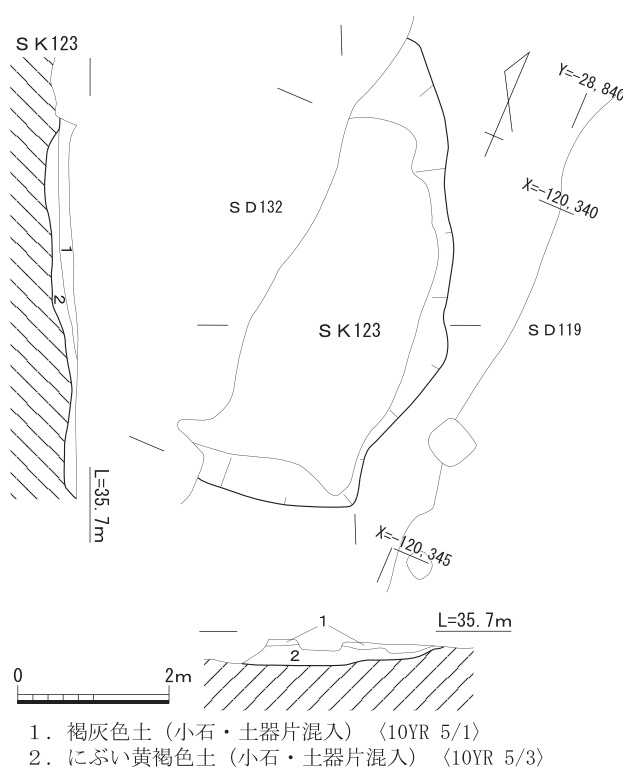


第18図 J地区竪穴式住居跡S H82実測図・遺物出土状況図

は、本来はこの住居に伴うものであったと判断される。

**土坑S K123(第3・19図)** A地区中央で検出した南北方向に長い土坑である。土坑の西半分は長岡京期の溝S D132に切られている。規模は東西2.5×南北6.4m、深さ0.4mを測る。土坑の床面は平坦でなく、出土遺物の大半は南側の埋土中から、破片の状態で出土した。土坑の性格については不明である。

**土坑S K149(第3・20図)** A地区の北側中央で検出した土坑である。規模は、1.0×1.8m、深さ0.1mを測る。内部から庄内併行期の土器が出土した。遺構の性格については不明である。



第19図 A地区土坑S K123実測図

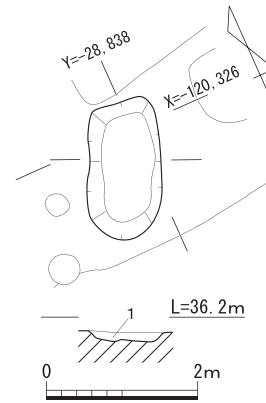
## (2) 古墳時代後期

この時期の遺構は、A地区の竪穴式住居跡S H156、土坑S K142、溝S D144、B地区の竪穴式住居跡S H26、土坑S K125、C地区の竪穴式住居跡S H127・350・351(一部M地区に及ぶ)、土坑S K394・128、E地区の竪穴式住居跡S H101~103とJ地区の竪穴式住居跡S H79~81がある。E地区のS H103とJ地区のS H79は同一の住居跡で、地区をまたがって検出した。

**竪穴式住居跡S H127(第5・21・23図)** C地区中央付近で検出した。今回の一連の調査の中で唯一竈をもつ竪穴式住居跡である。住居跡の平面形は方形で、規模は3.8×4.0m以上、深さ0.2m、を測り、主軸はN14°Eである。東辺は後世の攪乱で削平されていた。竪穴の壁に沿って、幅約0.2m、深さ約0.1mの周壁溝が巡る。床面で、径約0.4m、深さ0.2mの主柱穴を4か所で検出した。竪穴の北辺中央で竈を検出した。規模は1.0×1.0mを測る。馬蹄形状に張り出した両袖部間には、

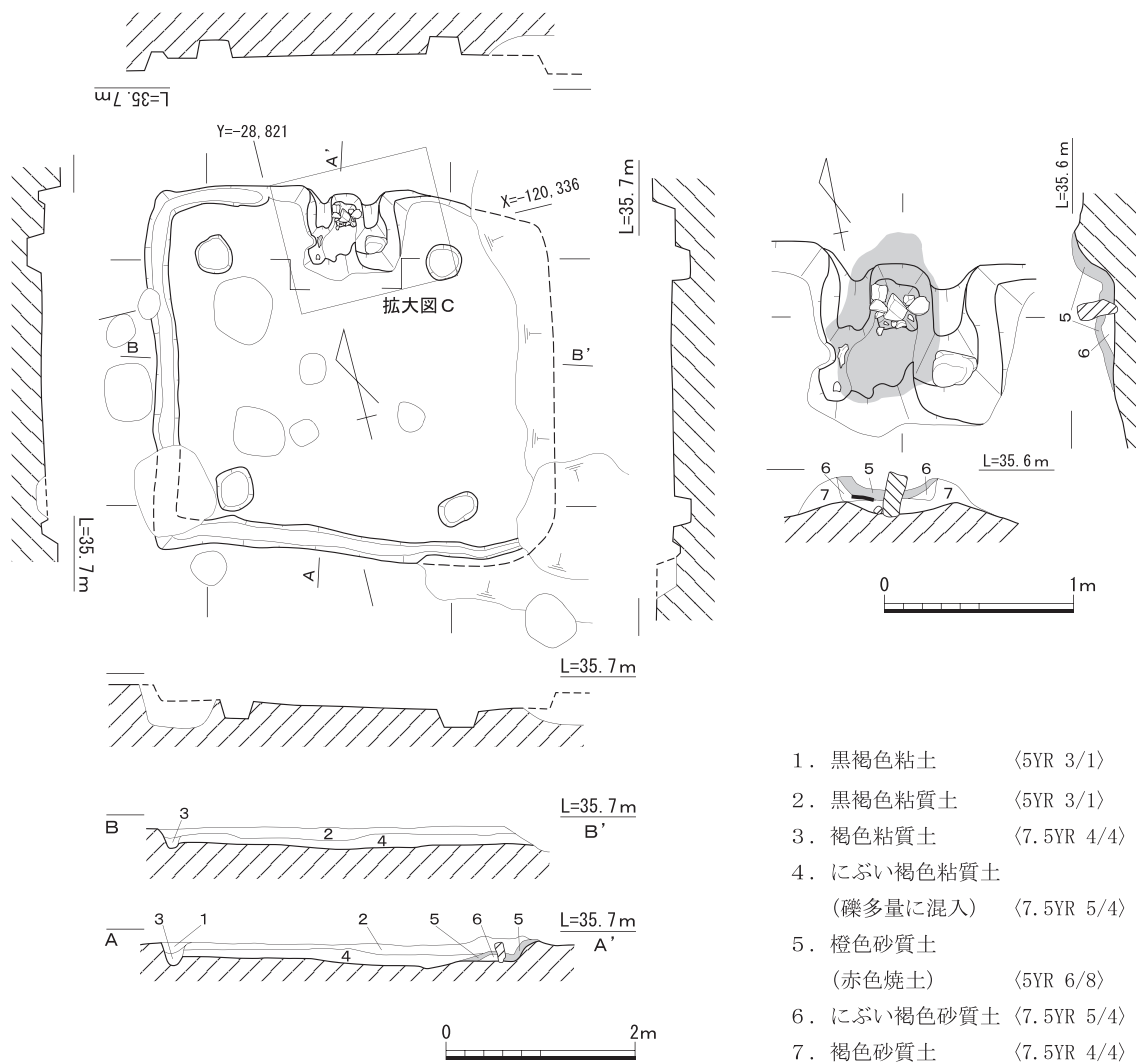
羽釜の底部を固定するための石製の支柱が存在した。この付近での両袖部間の内法は、約0.35mを測る。竈付近から出土した羽釜(第23図101)の体部径は内法とほぼ同じで、羽釜底部から鏝部分まで約25cmを測ることから、支柱先端部から25cm上方まで竈が立ち上がっていたと考えられる。竈付近から羽釜をはじめ須恵器杯身(第23図63)・土師器壺(第23図87)などが出土し、これらの時期から6世紀後半の住居跡と考える。

竪穴式住居跡 S H156 (第3・22・23図) A地区の東側中央で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居北西部は後世の攪乱で削平され、東部は平安時代末期の堀 S D111で消失している。平面の規模は、4.4×4.8mと南北方向にやや長い。深さ0.2~0.3mを測り、主軸はN39°Wである。周壁溝はなく、支柱穴を3か所で検出した。東コーナーの支柱穴は S D111によって削平されている。支柱穴は、



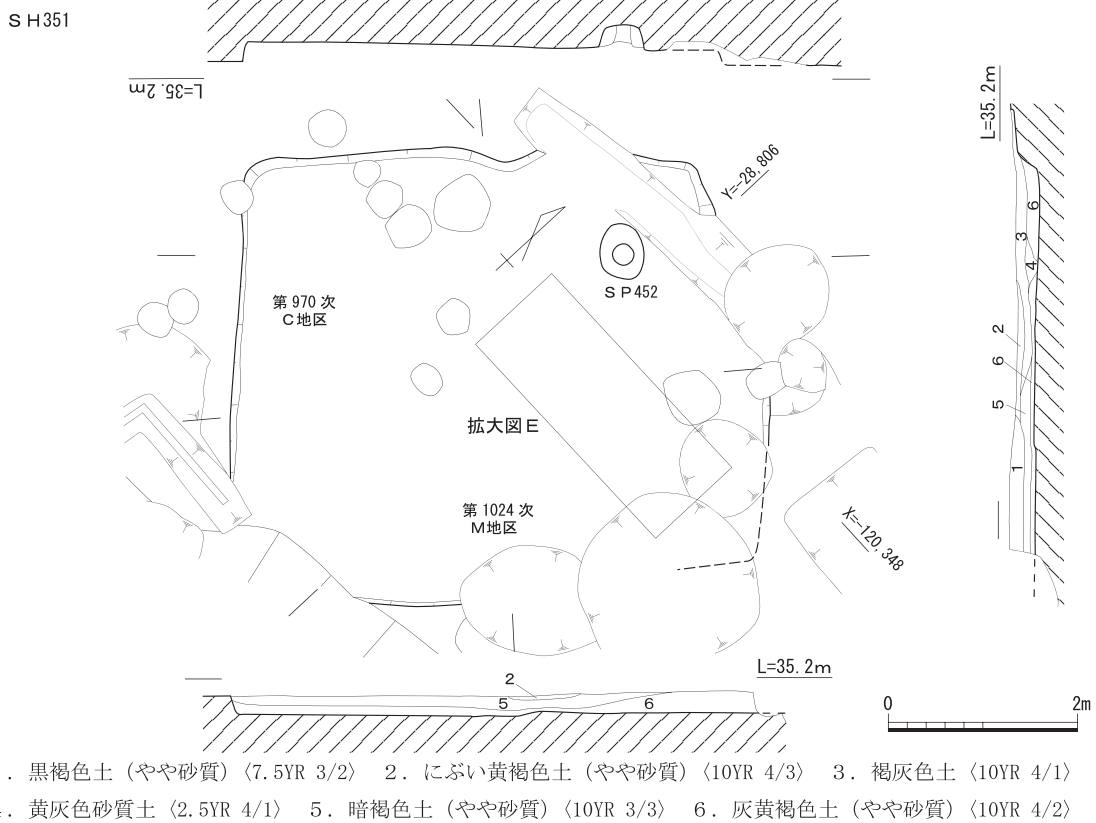
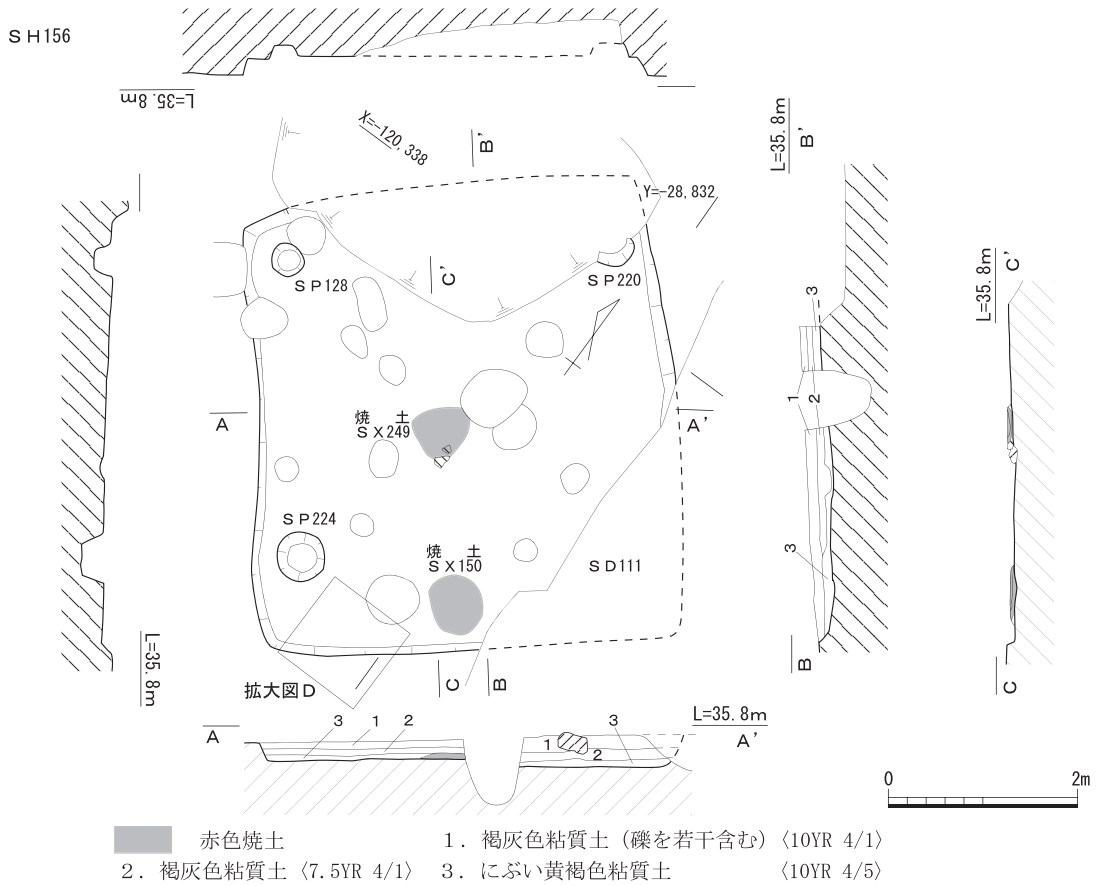
1. 暗褐色砂礫土 <10YR 3/2>

第20図 A地区土坑 S K149実測図



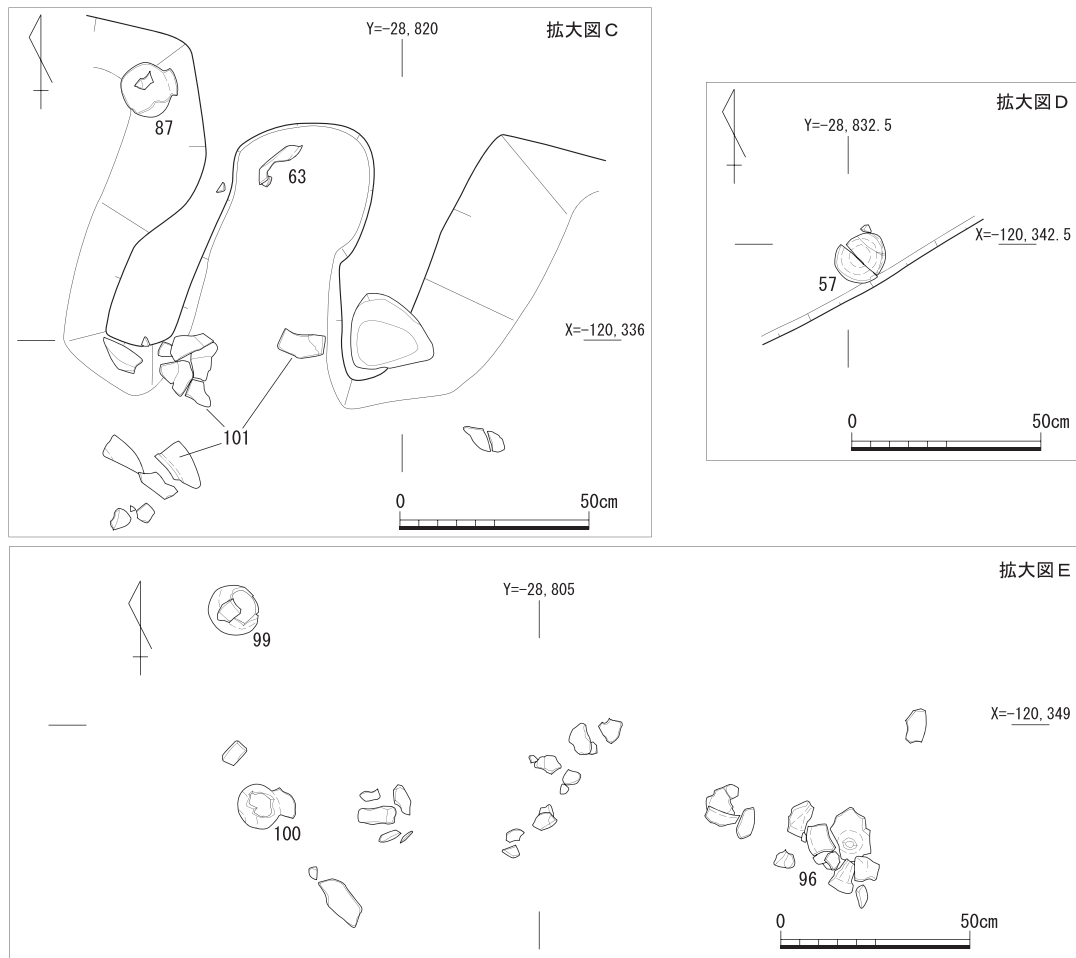
- 1. 黒褐色粘土 <5YR 3/1>
- 2. 黒褐色粘質土 <5YR 3/1>
- 3. 褐色粘質土 <7.5YR 4/4>
- 4. にぶい褐色粘質土 (礫多量に混入) <7.5YR 5/4>
- 5. 橙色砂質土 (赤色焼土) <5YR 6/8>
- 6. にぶい褐色砂質土 <7.5YR 5/4>
- 7. 褐色砂質土 <7.5YR 4/4>

第21図 C地区竪穴式住居跡 S H127実測図



第22図 A地区竪穴式住居跡SH156・C地区SH351実測図



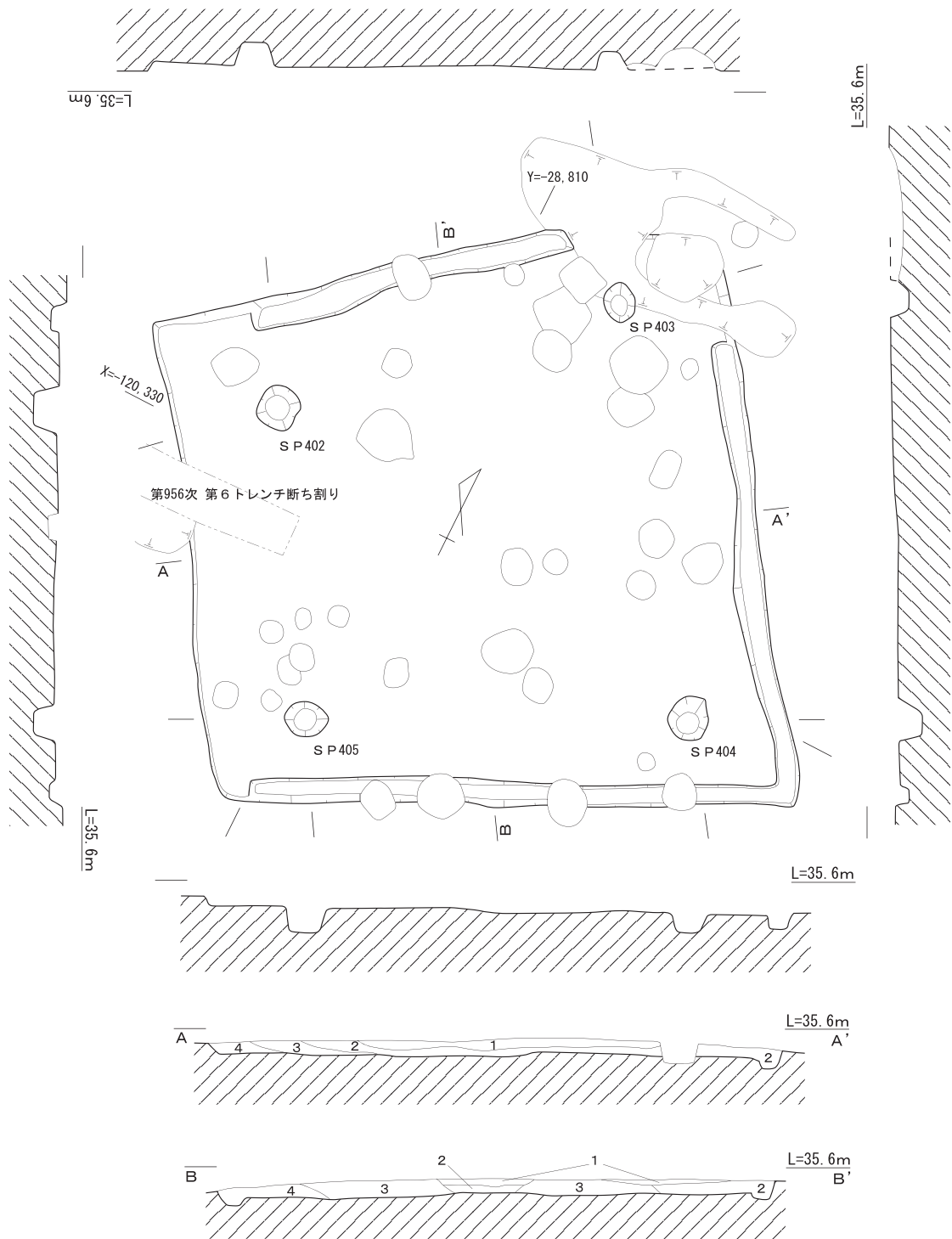


第23図 A地区竪穴式住居跡S H 127・156・351遺物出土状況図

径0.3~0.5m、深さ0.2~0.3mである。住居の床面中央と東辺中央付近の2か所から、赤色に発色した焼土(S X 249・150)を検出した。それぞれの範囲は、径約0.6mである。床面上では、南コーナー付近で須恵器杯蓋(第27図拡大図D57)が出土した。また埋土中からは、須恵器杯身・甕・甕や土師器高杯脚部などが出土した。6世紀後半の住居跡と考える。

**竪穴式住居跡S H 350**(第5・24図) C地区北東部で検出した方形の竪穴式住居跡である。今回検出した竪穴式住居跡の中で、比較的大きなものである。南西辺が他に比べて短く、平面形はやや台形を呈している。規模は、7.2×7.2m、南西辺のみ6.0mで、深さ約0.2mを測る。主軸はN 36° Wである。南西辺以外の3辺に沿って周壁溝を検出した。その規模は、幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。各コーナーの内側付近で、径約0.5m、深さ約0.3mの主柱穴を4か所検出した。住居内から焼土は見つからなかった。この住居は大阪層群直上に築かれており、床面のいたるところで拳大以上の石礫が認められた。住居として用いられていた段階では床面に貼り土がなされていたと考えられるが、土層断面の観察では確認することはできなかった。

**竪穴式住居跡S H 351**(第5・22・23図) C地区の南東隅から右京第1024次調査のM地区にかけて検出した。平面形は方形で、規模は5.6×4.8m、深さ約0.2mを測る。主軸はN 46° Wである。主柱穴は北コーナーの内側で1か所確認できた。径約0.6m、深さ0.3mを測る。住居内埋土中か



1. にぶい黄橙色土  
(5cm大の礫混入・部分的に炭混入) <10YR 6/4>
2. 明黄褐色礫土  
(3~10cm大の礫混入) <10YR 7/6>
3. 褐灰色礫土  
(10~20cm大の礫混入) <7.5YR 5/1>
4. 明黄褐色礫土  
(5~10cm大の礫混入) <10YR 7/6>



第24図 C地区竪穴式住居跡S H350実測図

ら土師器壺(96・99・100)などが出土した。6世紀後半の住居跡と考える。

**竪穴式住居跡 S H101** (第9・25図) E地区の南西隅で検出した。規模は6.6×6.4m、深さ約0.2mで、N47°Wを測る。幅約0.3m、深さ約0.1mの周壁溝が「コ」の字状に巡る。主柱穴は北西コーナー以外の3か所で検出した。径約0.4m、深さ約0.2mである。住居跡南西部の床面がわずかに赤色に変色していたが、竈に伴うものではなかった。住居跡の北コーナー付近の埋土中から、須恵器器台脚部破片(第25図拡大図D83)・須恵器杯身(第25図拡大図E65・71)が出土した。器台は、竪穴式住居跡 S H102からも出土していることから、この付近に古墳が存在した可能性を示唆する遺物と考える。

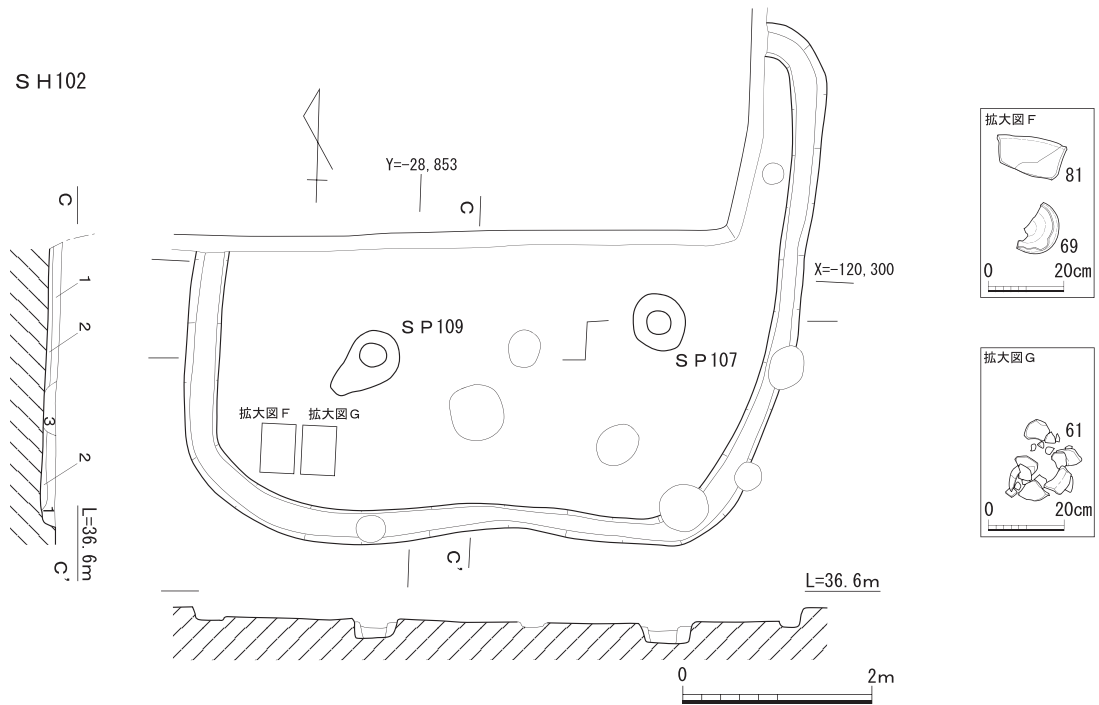
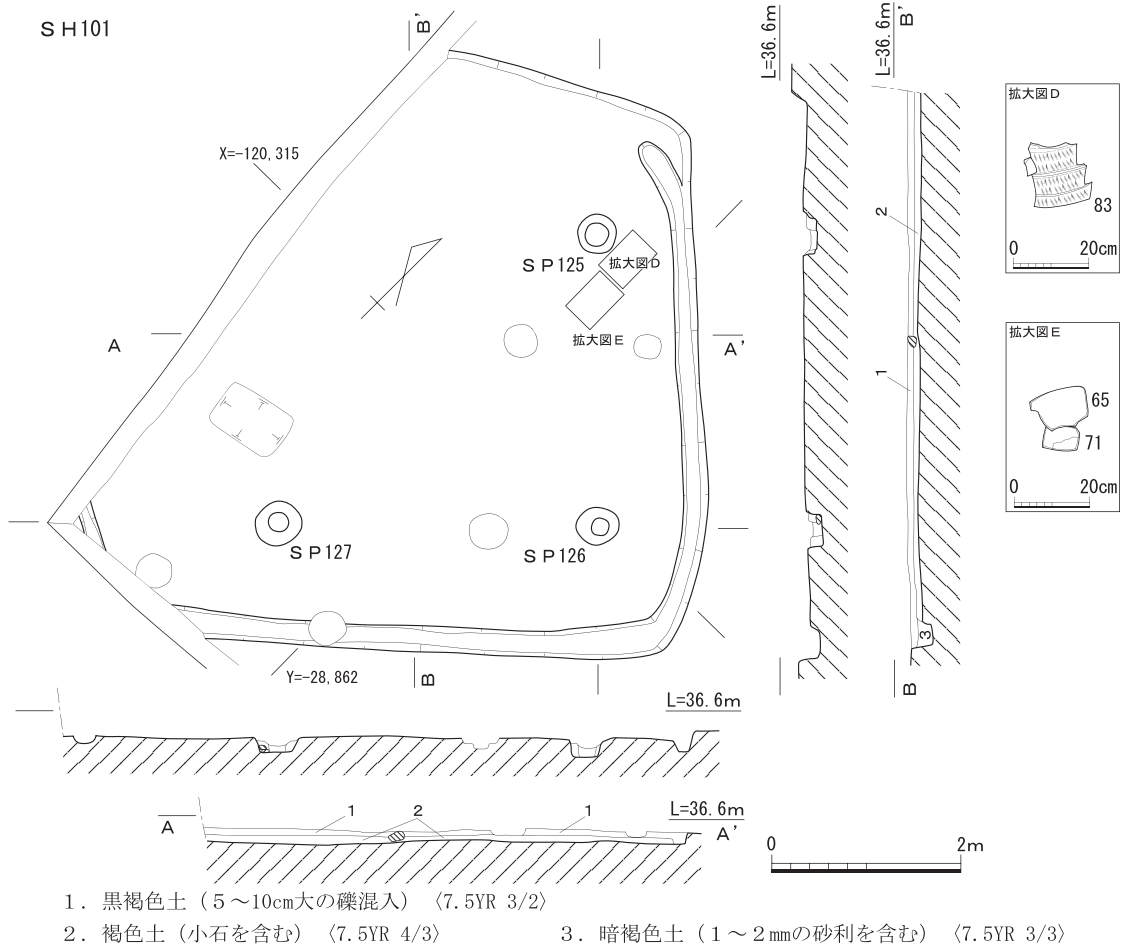
**竪穴式住居跡 S H102**(第9・25図) E地区の北辺で検出した。規模は6.4×5.8m、深さ約0.1m、N4°Eを測る。幅約0.3m、深さ約0.1mの周壁溝が巡る。主柱穴は2か所で検出した。径約0.5m、深さ約0.2mを測る。右京第957次調査で、落ち込み S X95710と赤色に焼けしまった所を確認している。このことから、この住居の北辺には竈が存在した可能性がある。住居跡の南西付近の埋土中から、須恵器杯身(第25図拡大図G61・拡大図F69)と須恵器器台片(第25図拡大図F81)が出土した。これは S H101出土の器台とともに、古墳の存在を示唆するものと考えられる。第957次調査地の北西付近で、古墳時代後期の土器片が出土する弧状に巡る浅い溝を検出しており、古墳の周溝であった可能性が高い。

**竪穴式住居跡 S H79・103**(第9・14・26図) E地区の北東隅とJ地区の北西隅で検出した、平面形逆台形の住居跡である。規模は、北辺約6.0m、南辺約5.4m、東・西辺約6.0m、深さ約0.2mである。主軸はN23°Eを測る。北西と南東コーナー付近で幅約0.3m、深さ約0.1mの周壁溝を検出した。また、南東コーナー付近では赤色に変色した所を確認した。各コーナー内側の4か所で、径約0.3m、深さ約0.1mの主柱穴を検出した。住居跡の北東部から土師器高杯片(95)が、南西部から須恵器杯身(第26図拡大図D64)・杯蓋(第26図拡大図D59)・器台(第26図拡大図L82)が出土した。

**竪穴式住居跡 S H80**(第14・27図) J地区の西辺近くで検出した。S H79の南側に位置し、切り合い関係から S H79に先行する住居跡である。規模は、6.0×6.0m、深さ約0.2mで、主軸はN6°Wを測る。住居跡の南辺から東辺にかけて幅約0.4m、深さ約0.2mの周壁溝が巡る。S H79と切り合っていたため、主柱穴は3か所で検出しただけである。径約0.4m、深さ約0.4mである。

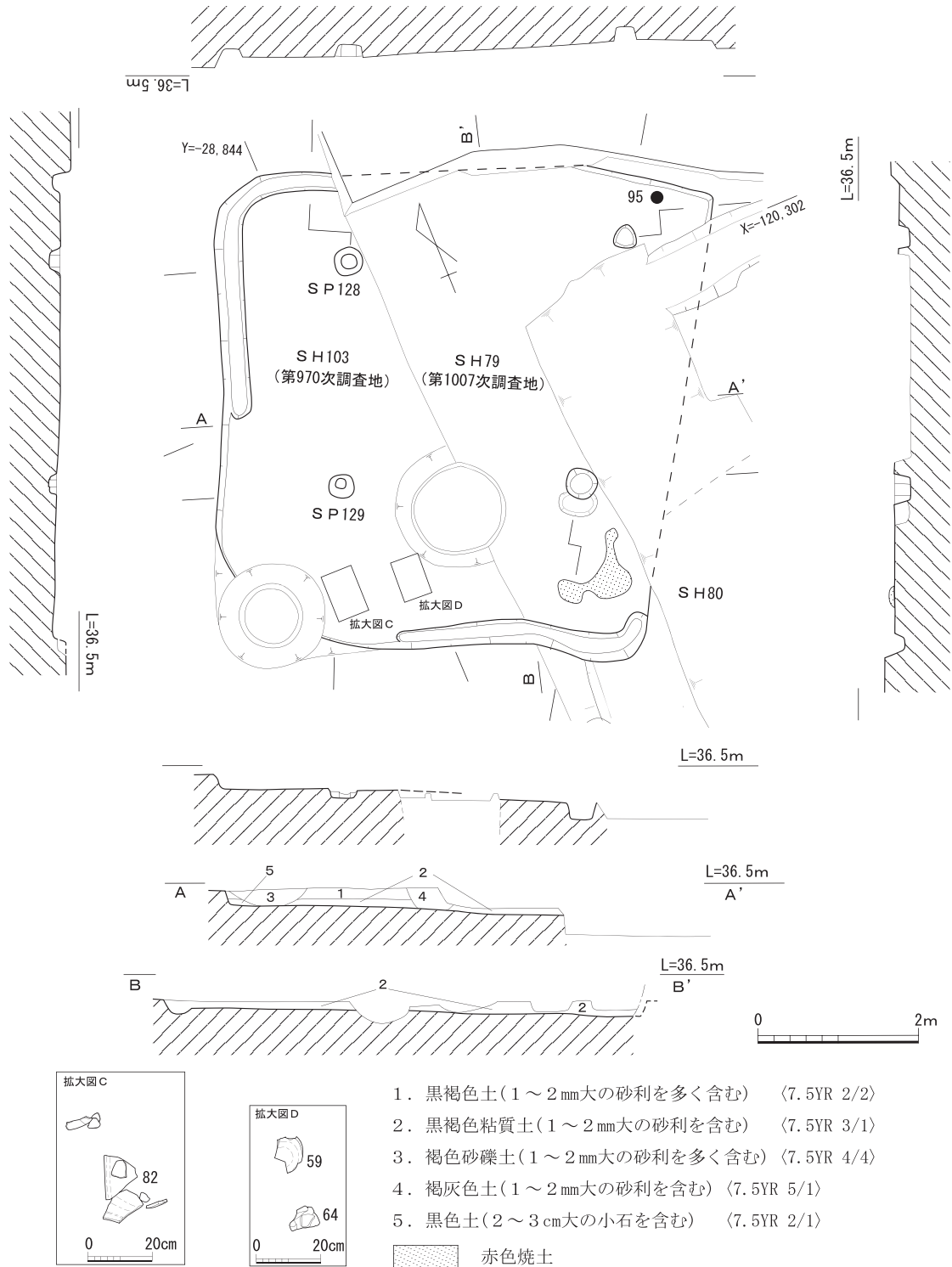
**竪穴式住居跡 S H81**(第14・28図) J地区北西部で検出した。S H80の東隣に位置する。住居跡の東半は後世の攪乱で削平されていた。規模は、4.8×3.6m以上、深さ約0.1mで、主軸はN4°Wの主軸である。主柱穴は西半の2か所で検出した。径約0.5m、深さ約0.1mである。

**竪穴式住居跡 S H26**(第8・29図) B地区北東部で検出した。住居跡の東半分は、長岡京期の溝 S D112で削平されていた。住居跡は非常に残りが悪く、周壁溝や柱穴が5cm前後の深さで認められただけである。周壁溝は幅約0.2m、深さ約5cmである。住居跡の規模は、4.2×2.7m以上で、主軸はN19°Eである。主柱穴は、西側の2か所で検出した。径約0.4m、深さ約0.3mである。



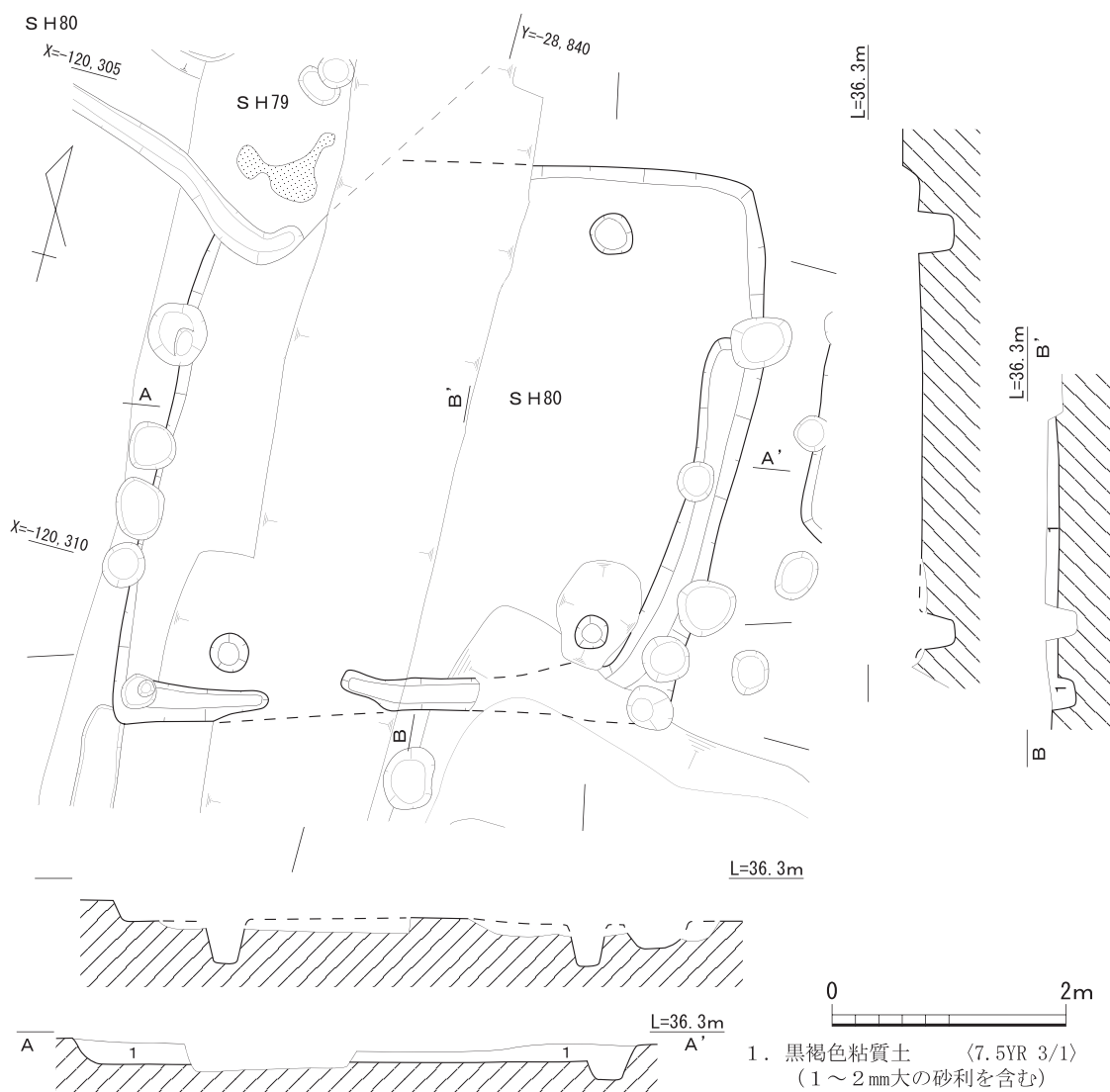
第25図 E地区竪穴式住居跡S H101・102実測図





第26図 E地区竪穴式住居跡S H103・J地区竪穴式住居跡S H79実測図

土坑S K142(第3図) A地区の北西隅で検出した不定形な土坑である。1.2×0.7m、深さ0.15mを測る。底面は平坦でない。埋土中から、土師器の細片が出土した。この土坑は西側に向けて下る斜面を埋める土層の上から掘り込まれている。右京第957次調査で庄内併行期の高杯が斜面を埋める土層中から出土したことから、この斜面は古墳時代初頭以後に徐々に埋まり、古墳時代後期には現小泉川付近まで平坦な地形が作り出されていたものと考えられる。

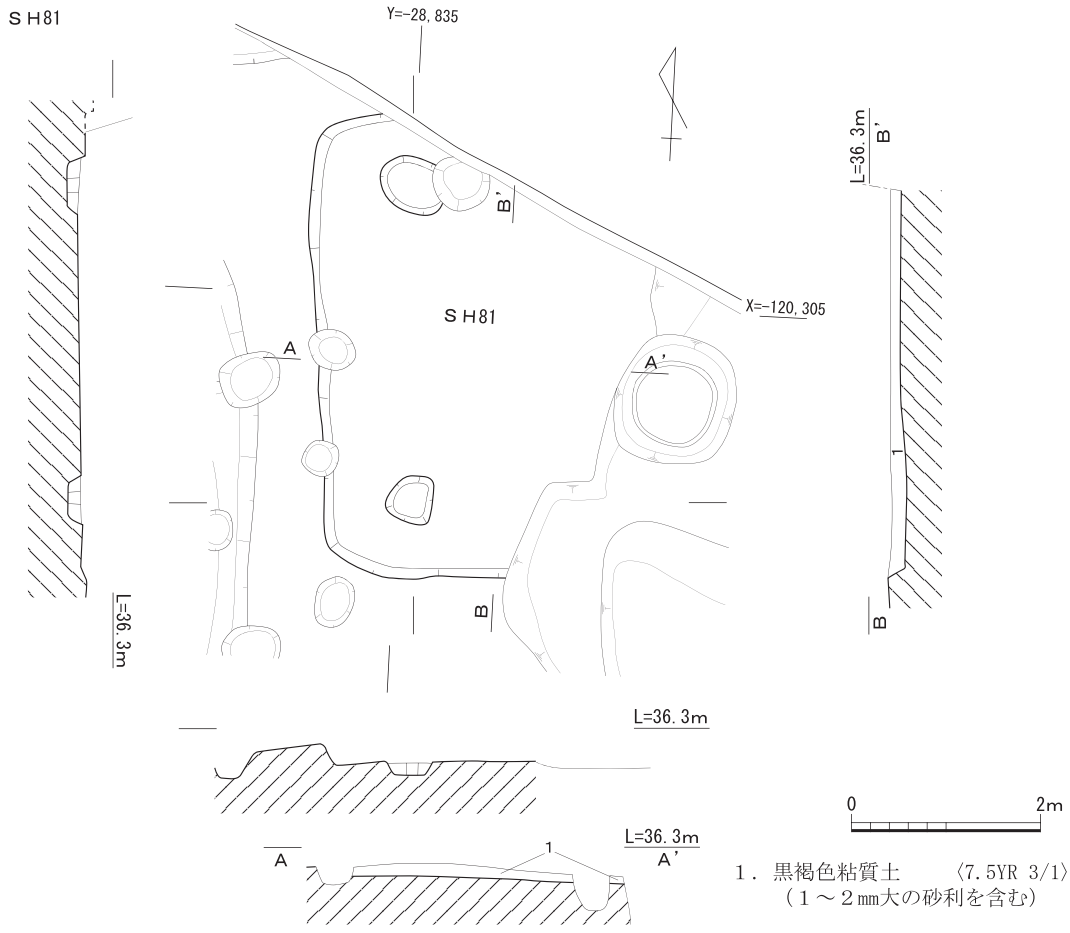


第27図 J地区竪穴式住居跡S H80実測図

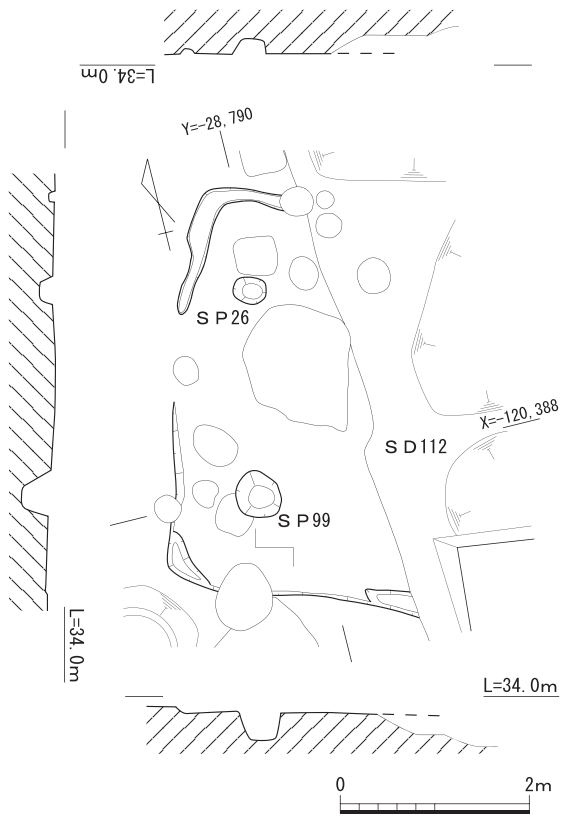
土坑S K 394 (第5・30図) C地区北東部で検出した平面形が長方形の土坑である。後世の柱穴S P 188や攪乱によって一部消失していた。確認した規模は、長辺1.2(以上)×短辺0.7m、深さ0.05mである。主軸方向はN85° Eを測る。土坑の中央からほぼ完形の須恵器壺(74)が出土した。土坑の平面形から墓の可能性があると考えたが、土層断面では棺痕跡は認められなかった。

土坑S K 128 (第5・31図) C地区の西部で検出した土坑である。西半分が平安時代末期の堀S D 111により削平され、消失していた。規模は、4.4×2.2m以上、深さ0.1~0.5m、N7° Eを測る。検出した当初は、東に隣接して竪穴式住居跡S H 127があること、平面形が方形であることから、竪穴式住居跡ではないかと考えたが、土坑の底面が平坦でなく、周壁溝や柱穴も認められないことから、土坑と判断した。埋土中から土師器片が出土した。

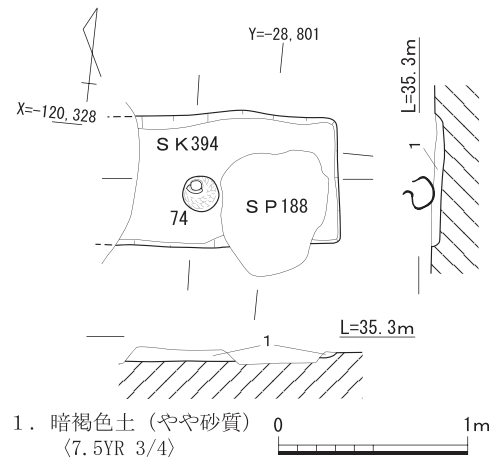
溝S D 144 (第3・31図) A地区の北東部で検出した東西方向の溝で、ほぼ真東西に主軸をもつ。遺構の東部は平安時代末期の溝S D 111により削平されていた。幅0.6~1.0m、検出長9.6m、深さ0.1mである。遺構の遺存状況は極めて悪い。埋土中から須恵器杯蓋(54)が出土した。



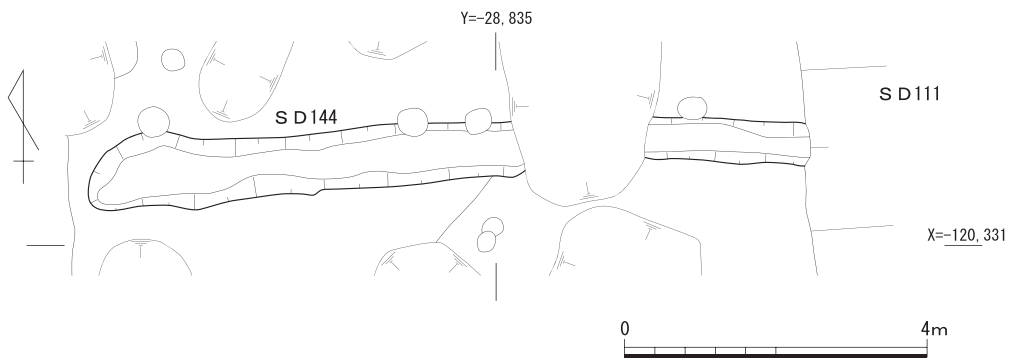
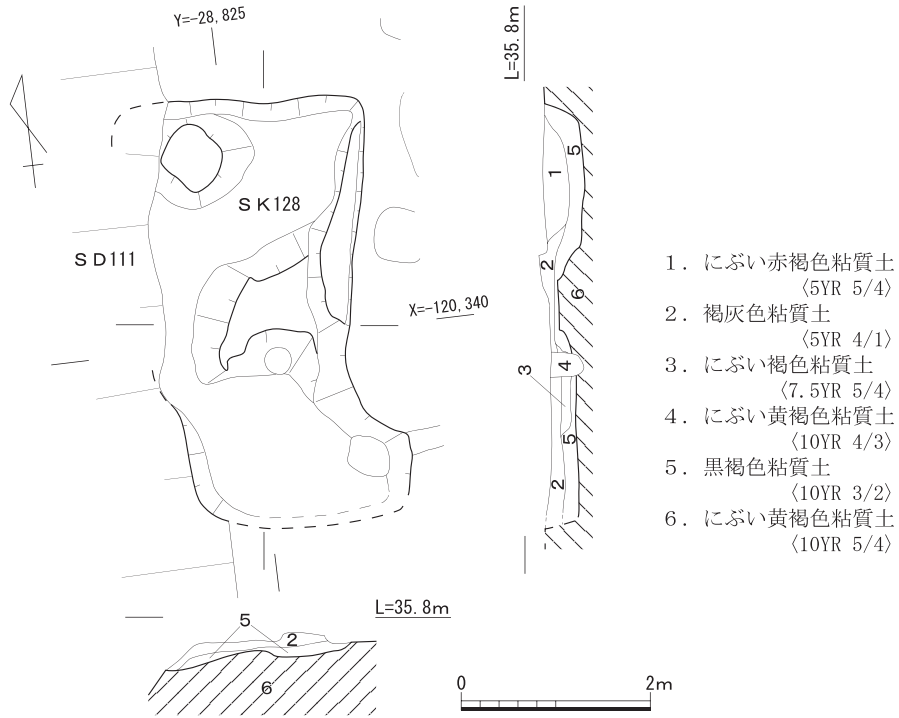
第28図 J地区竪穴式住居跡S H81実測図



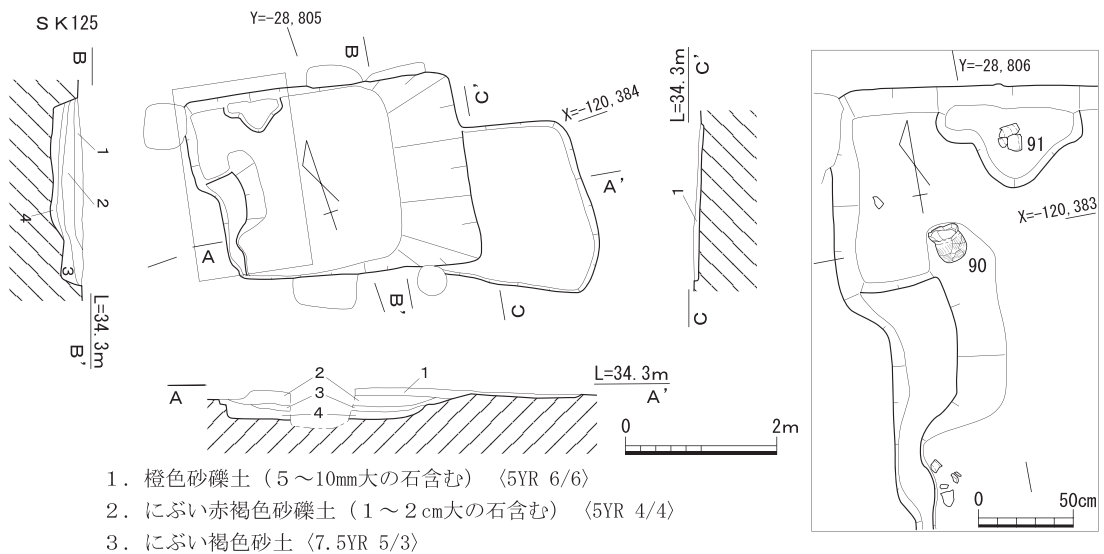
第29図 B地区竪穴式住居跡S H26実測図



第30図 C地区土坑S K394実測図



第31図 C地区土坑S K 128・A地区溝S D 144実測図



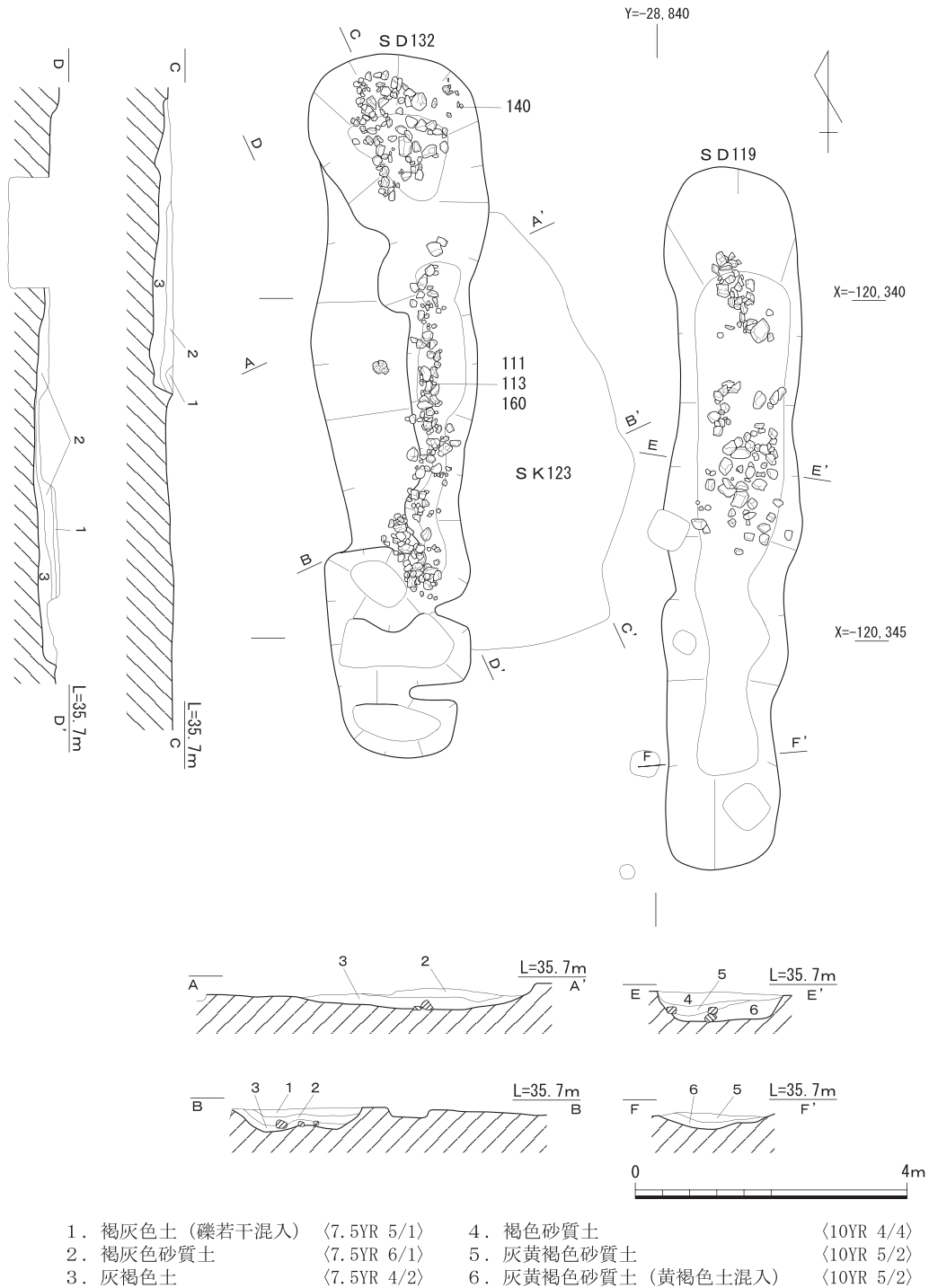
第32図 B地区土坑S K 125実測図



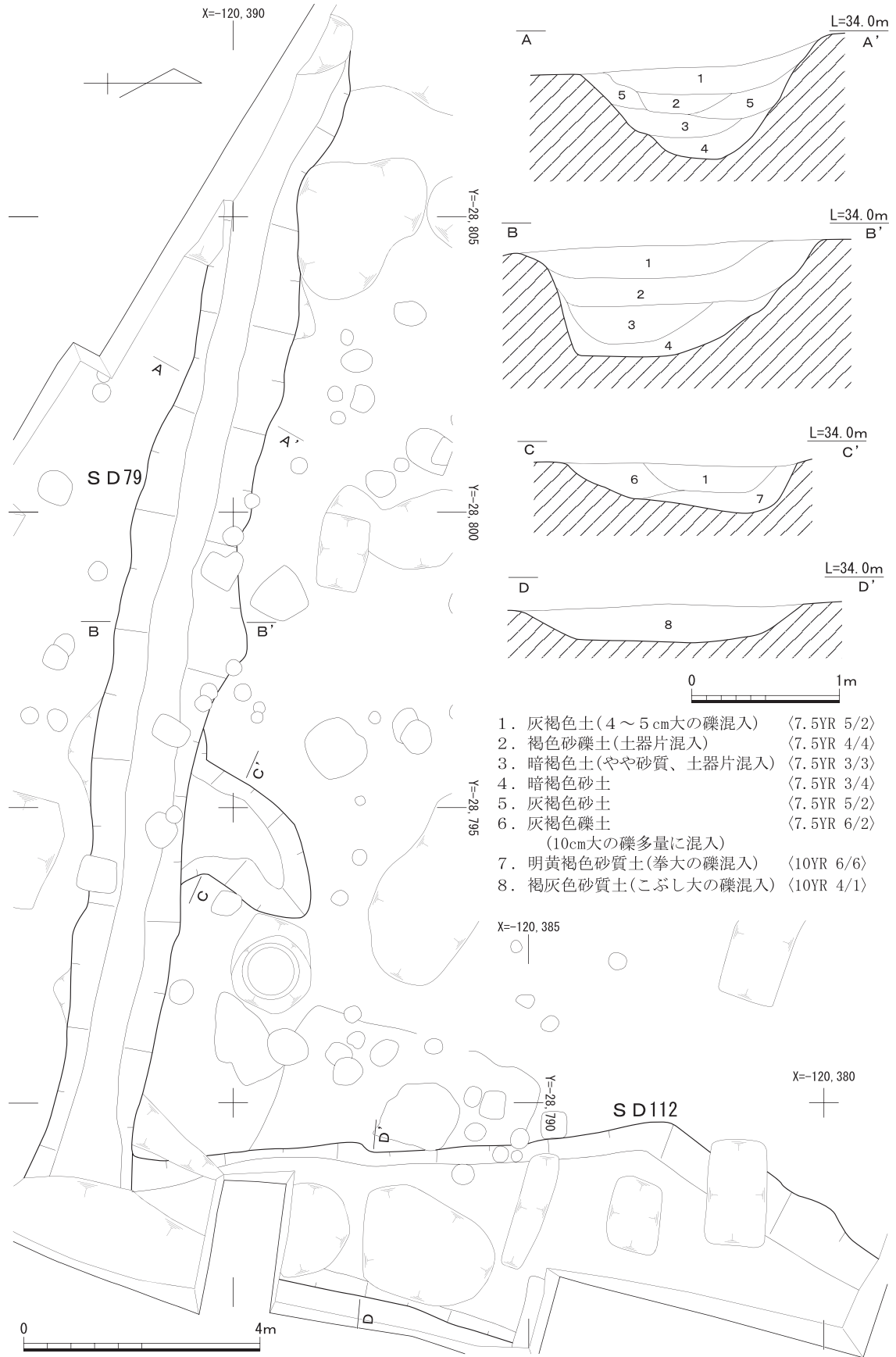
土坑S K 125(第7・32図) B地区中央付近で検出した。方形に深く掘り込まれた土坑とその東側で浅く掘り込まれた方形の土坑からなる。深く掘り込まれた土坑の規模は、3.6×2.5m、深さ0.5mを測る。この土坑の東側は緩やかに立ち上がる。浅い土坑は、2.1×2.2m深さ0.05mである。土坑の底面に接して土師器甕(90・91)が出土した。

(3)長岡京期

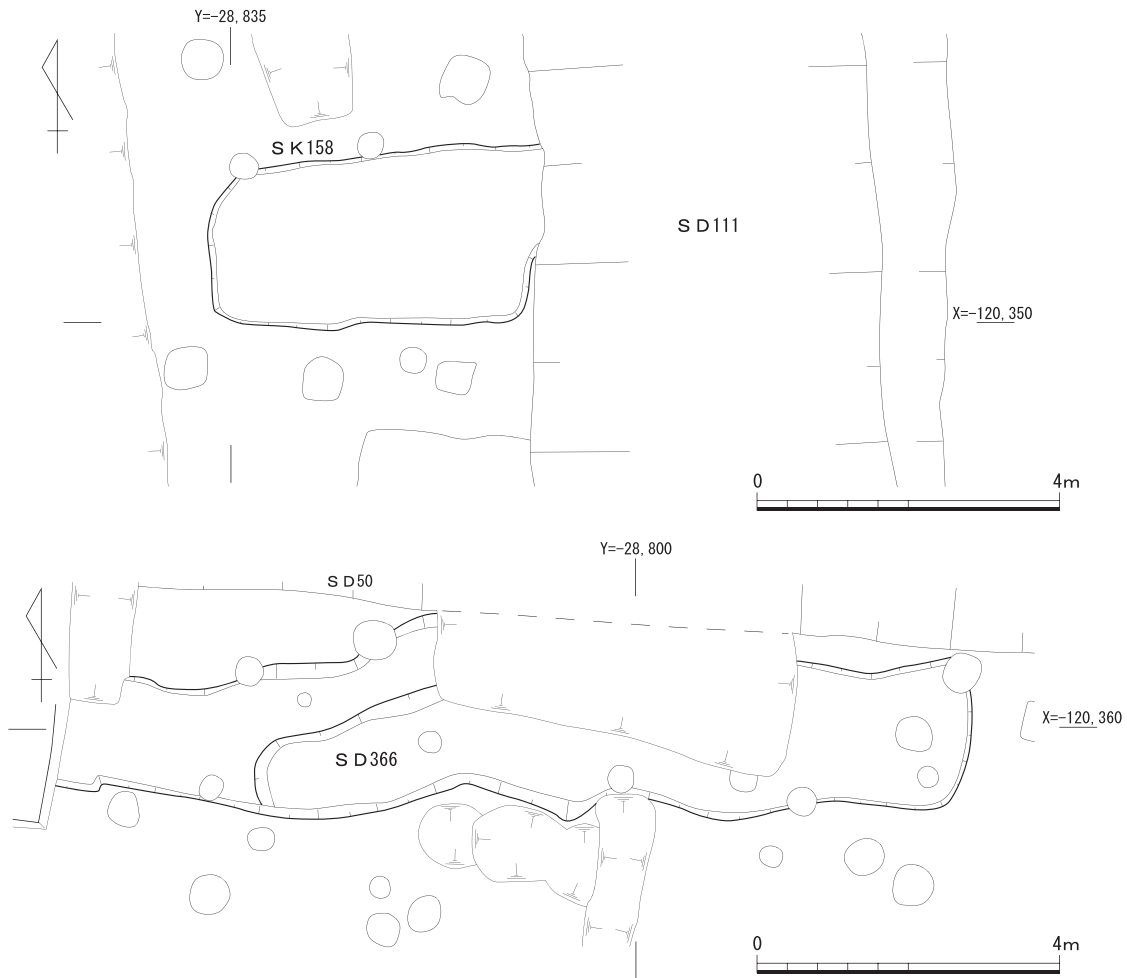
長岡京期の遺構としては、溝S D119・132・366・79・112と土坑S K158がある。長岡京の条



第33図 A地区溝S D119・132実測図



第34図 B地区溝SD79・112実測図



第35図 A地区土坑S K 158・D地区溝S D 366実測図

坊に直接関係する遺構は確認できなかった。

溝S D 119・132(第3・33図) A地区中央付近で検出した南北方向の溝で、真南北に掘られている。S D 132は古墳時代初頭の遺物が出土したS K 123を切る形で検出した。東側のS D 119と西側のS D 132の間は、溝心々で5.0mを測る。須恵器壺(111・113)、ミニチュア甌(126)、土馬(140・143)、土師器壺E(160)、平瓦(296)が出土した。S D 119は幅1.5~2.0m、長さ10.3m、深さ0.3~0.5m、S D 132は幅2.0~2.3m、長さ10.3m、深さ0.3mである。両溝の埋土の第3層中には、拳大の石が多く混じっており、その中から土馬(146)が出土した。

溝S D 79(第7・34図) B地区南辺近くで検出した東西方向の溝である。S D 79は、幅約2.0m、検出長19.5m、深さ0.6~0.8mで、溝の主軸はN79°Wを測る。溝底は西から東に傾斜する。埋土中から長岡京期の土器群とミニチュア甌や甎、土馬などが出土した。溝底に接して出土するものもあった。祭祀関連の遺物が集中的に出土していることから、この溝で祭祀が行われたものと考えられる。小泉川を挟んだ対岸には西山田遺跡があり、長岡第四中学校建設に伴う右京第104次調査で、多量の祭祀遺物が出土している。この遺構とは約150m離れているだけであり、何らかの関連が窺える。ミニチュア甌(125・127~136)、ミニチュア甎(137・138)、土馬(144・145)、土師器杯(147・148)・皿(149~153)・鉢(155~157)・壺E(159・161)・皿B(163)と蓋(162)・甕

(164・167)、須恵器杯B蓋(103～105)・杯(106～110)・壺(112・115・116)・鉢(119)・壺蓋(120・121)・壺(122・124)・萬年通寶(102)が出土した。

**溝 S D 112**(第7・34図) B地区の東辺に沿って検出した南北方向の溝で、S D 79と重複関係を有し、切り合い関係からS D 79に先行するものである。規模は、幅2.2～3.3m、検出長12.6m、深さ0.6mで、N10° Eを測る。土師器の細片が出土したが、時期は不明である。

**土坑 S K 158**(第3・35図) A地区南東部で検出した。2.2×4.3m以上、深さ0.05mを測る。土坑の東端は、平安時代末期の堀 S D 111によって消失している。図化できないが、奈良時代末から平安時代前期の土器の小片が出土している。

**溝 S D 366**(第7・35図) D地区の北部で検出した東西方向の溝である。規模は、幅1.4～2.0m、検出長12m、深さ0.05mを測る。非常に残りの悪い遺構である。図化できないが、奈良時代末から平安時代前期に該当する土器小片が出土した。

#### (4)平安時代中期

この時期に該当する遺構は確認していない。しかし、平安時代末期の遺構、特にS D 111から平安時代中期の無釉陶器や緑釉陶器などが出土している。これは、この周辺に当時の遺構が存在したことを示すもので、平安時代末期以降の土地利用により削平されてしまったため、当該期の遺構を検出するには至らなかったものと推測される。過去の下海印寺遺跡の調査では、平安時代の柱穴や土器埋納土坑といった遺構以外に、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などの遺物の出土が確認されている。緑釉陶器・灰釉陶器が出土することから、下海印寺遺跡に存在した集落は、一般的な農村集落ではないことが指摘されている<sup>(注6)</sup>。今回の調査地から無釉陶器や緑釉陶器が出土したことは、その集落が西条地区にまで及んでいたと考えられる。

#### (5)平安時代末期(第36図)

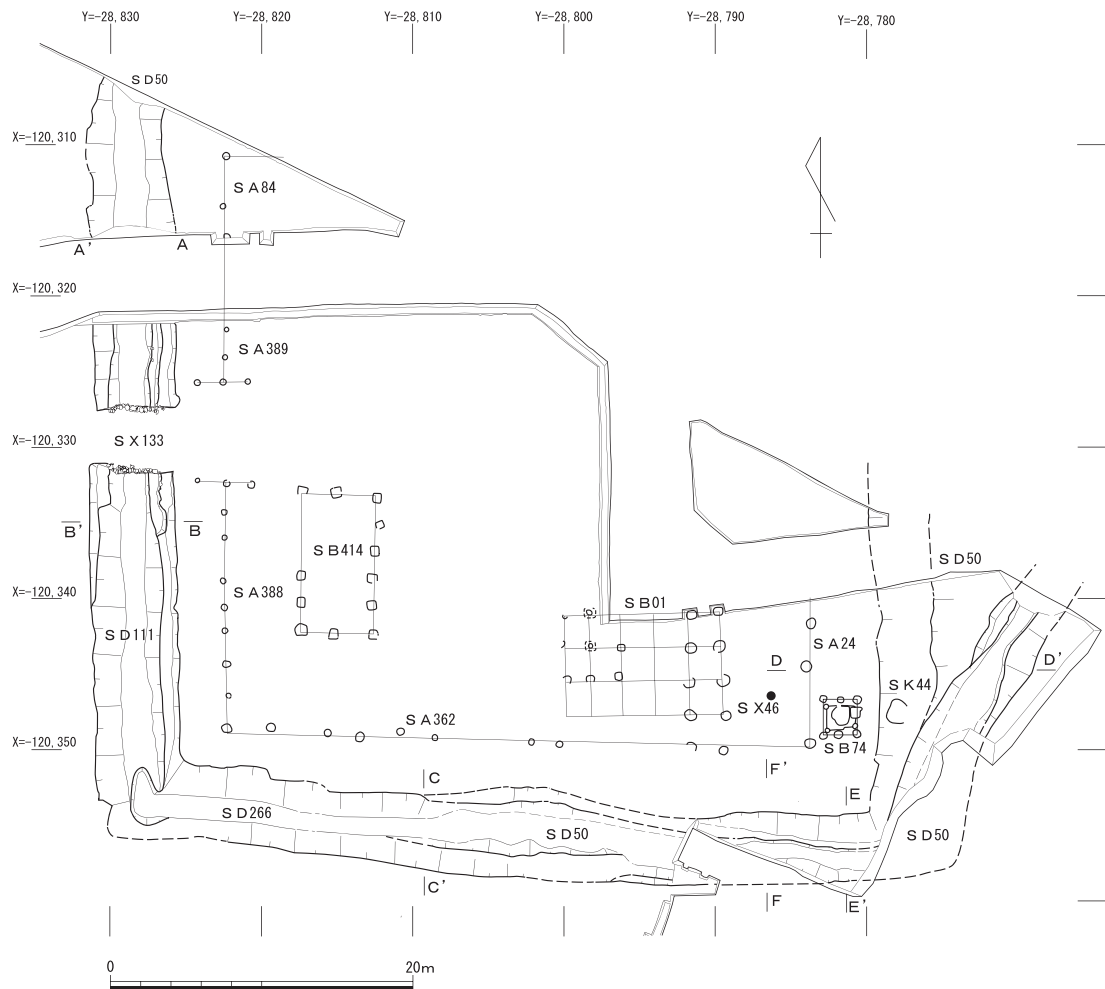
この時期の遺構には、C・G・H・J地区で検出した、堀と塀で区画された一辺50m四方の屋敷跡がある。屋敷地内では、方形区画に平行あるいは直行する形で掘立柱建物跡3棟を検出した。以下、関連する遺構について説明したい。堀については西・南・東辺に分けて記す。

**西辺北側・堀 S D 50**(第14・15・37図) J地区中央付近で検出した真南北方向の堀である。調査区の北端では、堀が東側に曲がる様相が認められたことから、地区外のすぐ北側で東に屈曲するものと考えた。遺構の規模は、屈曲付近で幅5.0m、深さ1.6m、J地区の南端では幅4.8m、深さ1.2mを測り、堀の底は南側に下る傾斜を有する。堀の底には幅0.5m、深さ0.3mの断面「U」字状の溝がさらに掘られており(第37図23層)、溝内には拳大から人頭大の石が埋められていた。これは南方の土橋まで続く。後述のように、暗渠排水として利用されていたものと推測される。

**西辺南側・堀 S D 111**(第5・6・37図) C地区で検出した真南北方向の堀である。C地区の北辺近くで土橋 S X 133が設けられている。S X 133の南側での堀の規模は、幅6.2m、深さ1.4mを測る。堀の断面形は、緩やかな「U」字形をなす。堀の東側立ち上がりの中位付近に、幅0.6mの平坦面(テラス状遺構)が認められた。このテラス部直上や、最下層の埋土である暗褐色礫土(第37層)や黒褐色砂質土(第41層)から、瓦器碗や土師器皿や瓦片などが多量に出土した。堀の底

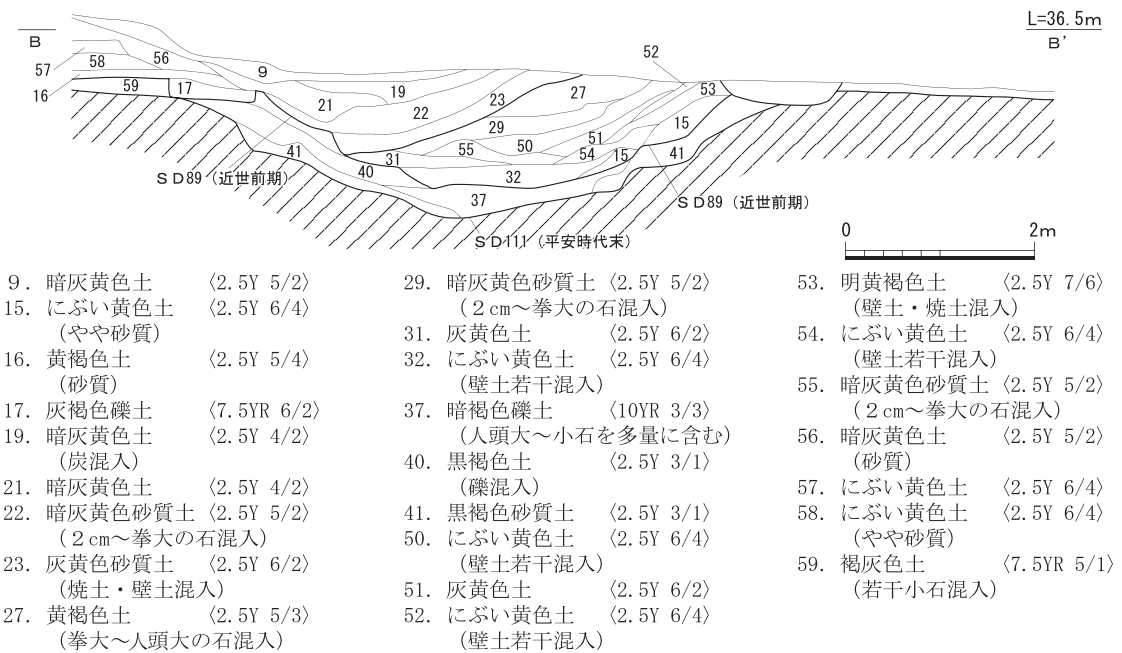
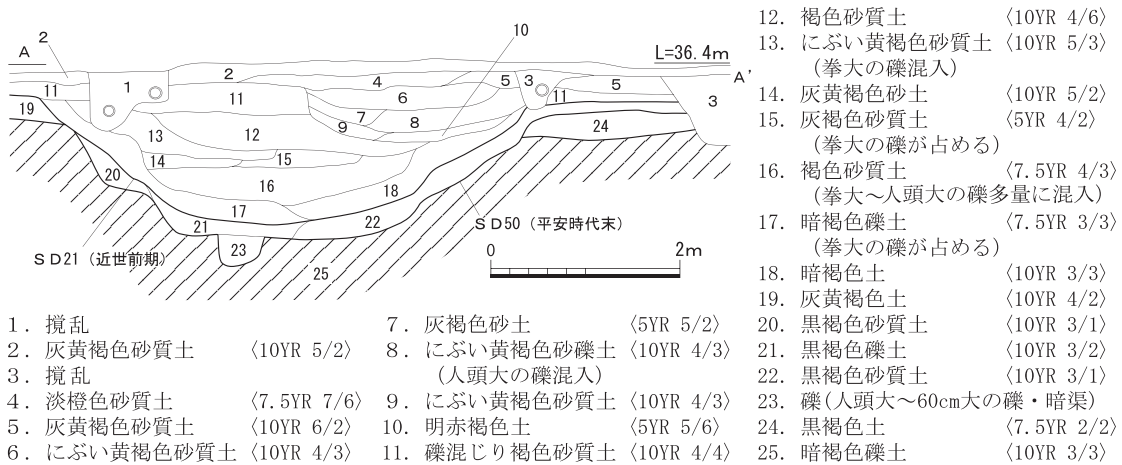
は、南へ傾斜する。また、S X133南側の石組みから南へ約2m付近まで、幅0.5m、深さ0.2mの暗渠排水が認められた。暗渠排水の断面形は「U」字形で、中に拳大～人頭大の石が多量に埋められていた。この暗渠排水は、C地区の北側のJ地区北端から続いている。土橋を造った造成土を除去すると同じ規模の暗渠排水が土橋下にも構築されているのが認められ、土橋を築く際に付随して設けられた施設と判断される。S D111は、土層の観察では滞水していた状況を示しておらず、空堀であったと推測される。土橋から南方約25m付近で大きく屈曲して東方に続く。この東西方向の堀については、S D266として調査を行った。

南辺堀S D266・50(第5・38・39図) C地区南端で検出した、S D111南端からほぼ直角に屈曲して東西に延びるS D266とG・H地区の南端で検出した東西方向のS D50は同一の堀で、方形の屋敷地の南限を画している。堀の規模は、幅4.0～5.0m、深さ1.9mを測る。南北方向のS D111南端部と接合する地点から、東方に長さ50mにわたって検出し、東端では東辺を画する堀S D50となる。南限を画する堀の底は西から東方に下り、方形区画の北側から南東コーナーに向けて排水されていたと推測される。H地区南端で検出したS D50の土層断面(方形区画の南東隅付近)の観察において、灰色砂質土(第19層)や黒褐色粘砂土(第20層)が見られたことから、南東



第36図 平安時代末期屋敷跡全体図



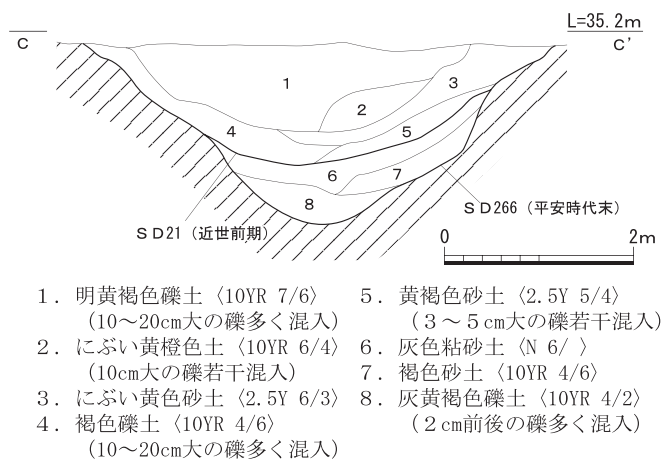


第37図 J 地区堀 S D50・C 地区 S D111断面図(断面図の位置は第36図参照)

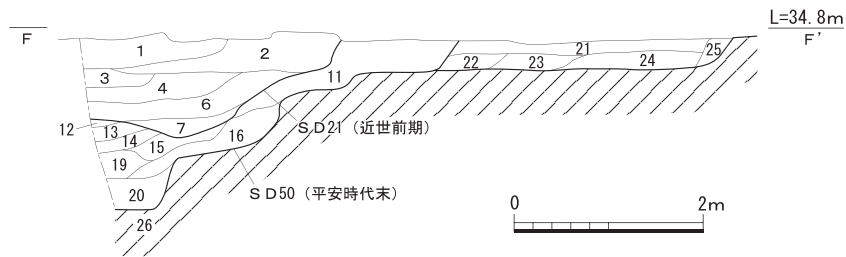
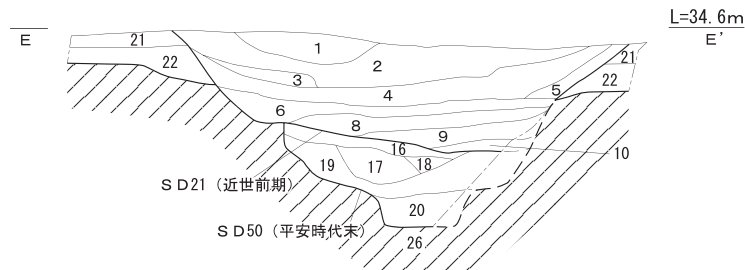
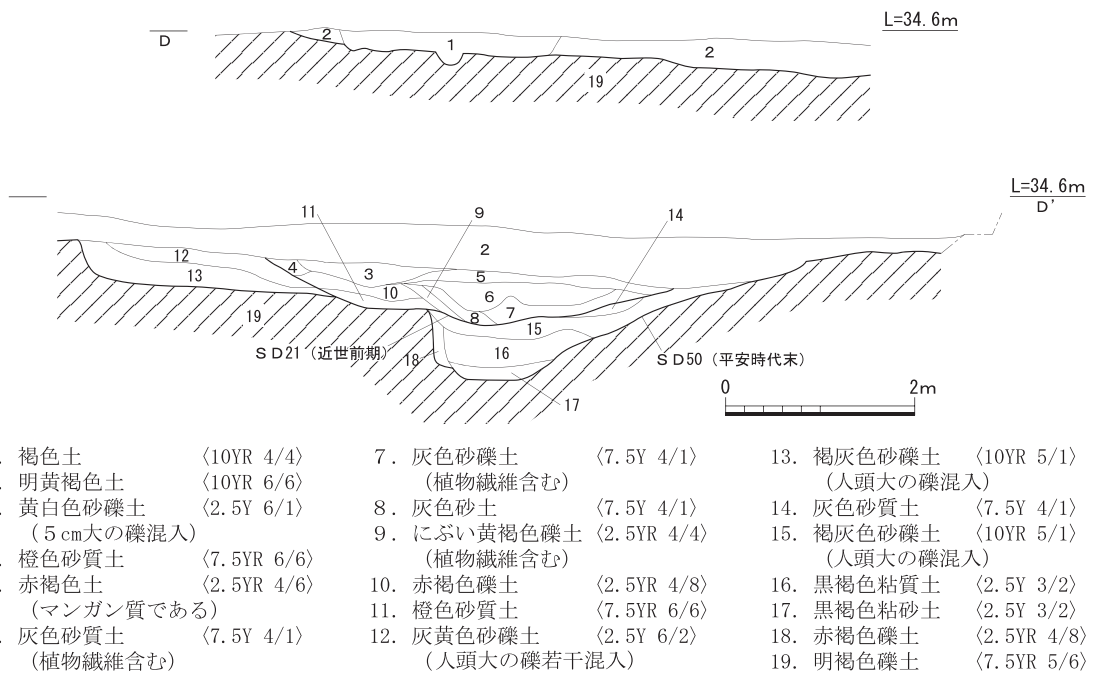
隅付近だけが滞水していたものと推定される。方形に区画された堀の南東コーナー部には、調査前には「田苗池」が存在した。地元の方の話では、田苗池は水が枯れることがないと言われていたそうであるが、これは地下に「水の流れ道」としての堀が掘削されていたことに因るものと考えられる。

東辺堀 S D50 (第12・13・39図)

H 地区東部で検出した。堀の底は、

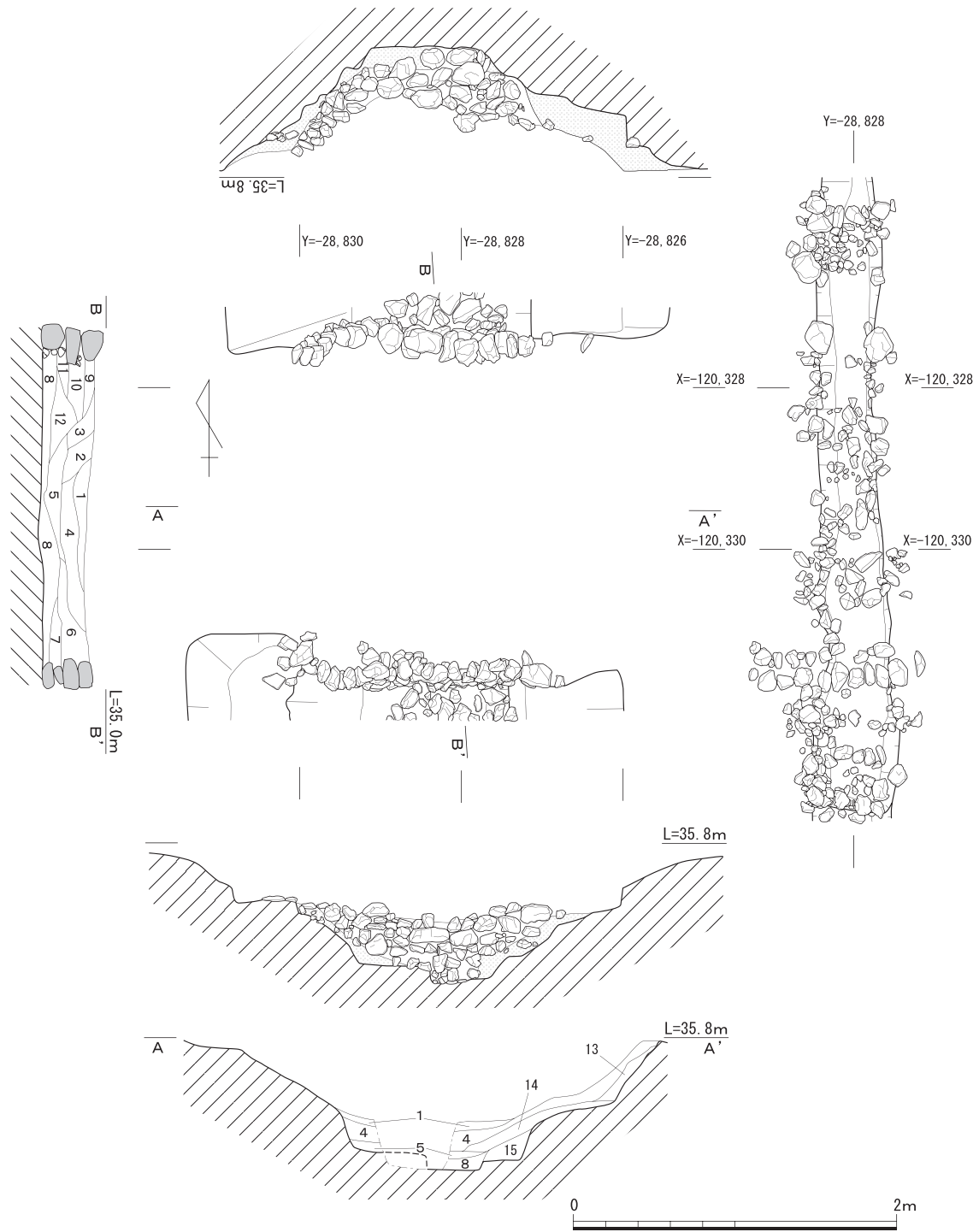


第38図 C 地区堀 S D266断面図(断面図の位置は第36図参照)



- |                                   |                                  |                        |
|-----------------------------------|----------------------------------|------------------------|
| 1. 明黄褐色土 (10YR 6/6)               | 7. 灰黄褐色土 (10YR 5/2) (10cm以下の礫混入) | 16. 灰色砂質土 (10Y 5/1)    |
| 2. 褐色土 (10YR 4/6) (礫若干混入)         | 8. 灰色砂土 (7.5Y 6/1)               | 17. 黄褐色砂礫 (10YR 5/6)   |
| 3. 暗赤褐色土 (5YR 3/6)                | 9. 灰色砂土 (10Y 5/1)                | 18. 灰色砂土 (10Y 4/1)     |
| 4. にぶい赤褐色土 (5YR 4/4) (5 cm以下の礫混入) | 10. 淡灰色砂土 (10Y 5/1)              | 19. 灰色砂質土 (10Y 4/1)    |
| 5. 褐色土 (10YR 6/6) (礫若干混入)         | 11. 暗褐色土 (10YR 3/4)              | 20. 黒褐色粘砂土 (2.5Y 3/2)  |
| 6. 灰褐色土 (7.5YR 4/2) (5 cm以下の礫混入)  | 12. にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)           | 21. にぶい黄褐色土 (10YR 5/3) |
|                                   | 13. 褐色砂質土 (7.5YR 4/6)            | 22. 褐色土 (10YR 4/6)     |
|                                   | 14. 灰色砂質土 (7.5Y 5/1) (拳大の礫混入)    | 23. 褐灰色土 (7.5YR 4/1)   |
|                                   | 15. 褐色砂質土 (7.5YR 4/6)            | 24. 褐色土 (10YR 4/6)     |
|                                   |                                  | 25. 褐灰色土 (7.5YR 4/1)   |
|                                   |                                  | 26. 明褐色礫土 (7.5YR 5/6)  |

第39図 H地区堀 S D 50断面図



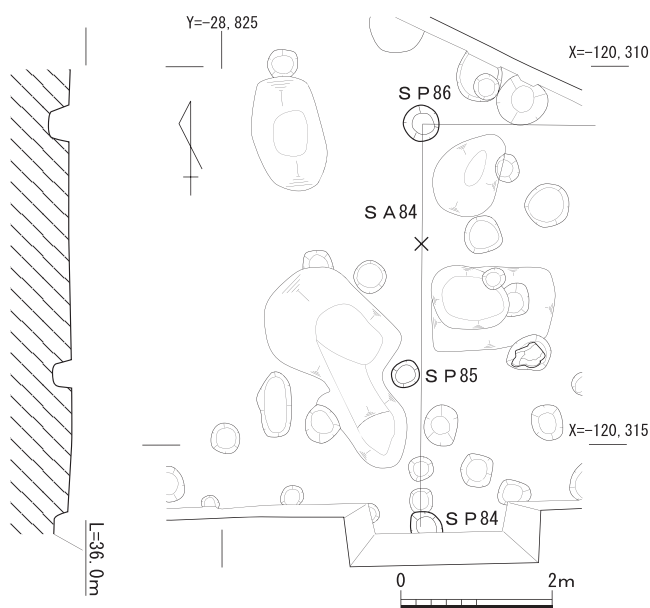
- |   |  |   |
|---|--|---|
| 1. 褐色砂礫土<br>(5~10cm大の礫混入)               | 7. 黒褐色礫土<br>(10cm大の礫若干混入)                  | 11. 褐色砂土<br>(10YR 4/4)                      |
| 2. 褐灰色砂礫土<br>(10~20cm大の礫混入)             | 8. 黒褐色礫土<br>(7.5YR 3/1)<br>(5~20cm大の礫多く混入) | 12. 暗褐色砂礫土<br>(10~20cm大の礫混入)<br>(7.5YR 3/3) |
| 3. 黒褐色砂礫土<br>(2~5cm大の礫混入)<br>(10YR 3/2) | 9. にぶい黄褐色土<br>(若干砂質)<br>(10YR 4/3)         | 13. 灰黄褐色砂質土<br>(10YR 4/2)                   |
| 4. 黄灰色砂土<br>(2.5Y 4/1)                  | 10. 褐色土<br>(若干砂質)<br>(10YR 4/4)            | 14. にぶい黄褐色砂礫土<br>(2~5mm大の礫混入)<br>(10YR 5/4) |
| 5. オリーブ褐色砂土<br>(2.5Y 4/4)               |  | 15. にぶい黄褐色砂土<br>(10YR 5/4)                  |
| 6. 暗褐色砂礫土<br>(5cm前後の礫混入)<br>(10YR 3/4)  |  |   |

第40図 C地区土橋S X133実測図

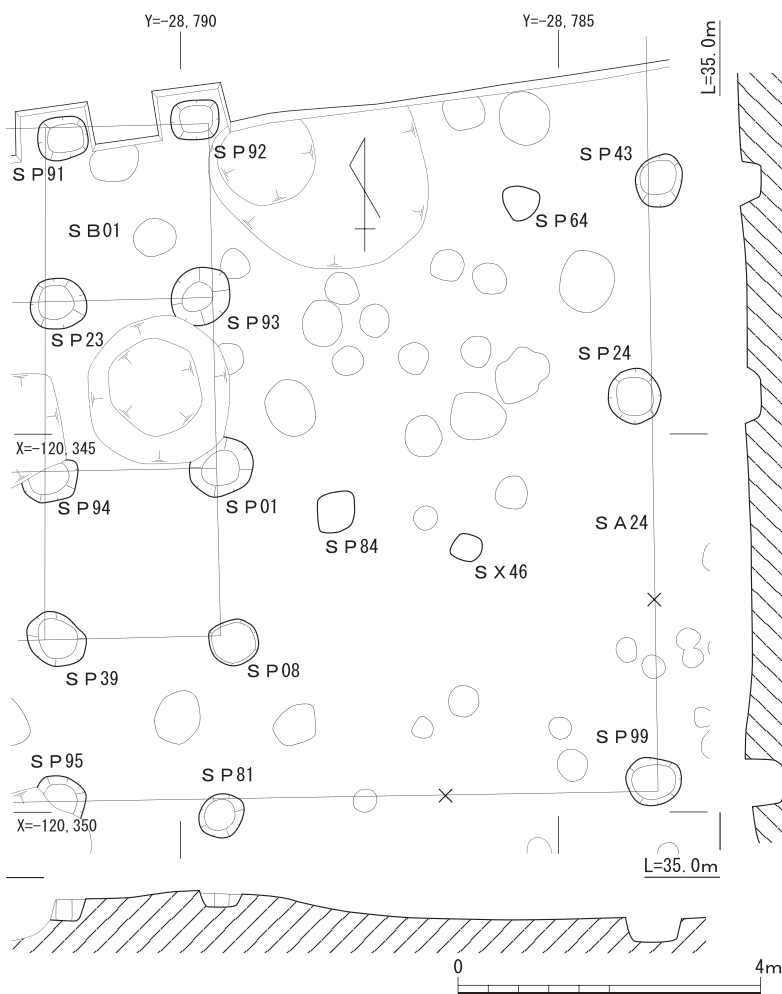
北から大きく東に振れて検出したが、堀の西側肩部はほぼ真北に掘られている。堀自体は北東－南西に掘削されているが、掘形の位置を重視すると方形区画を意識したものと思われる。堀の底が北東に振れることについては、時期は異なるが、隣接する上内田地区において検出した古墳時代中期後半から後期の溝も大きく北へ蛇行して東流しており、この溝は微地形に沿って流れていると考えられる。堀 S D50 もまた立地する微地形に応じて設けられたものと思われる。東辺半ば付近では、浅く掘りこんだ堀の中央付近をさらに深く掘り込んでいた。堀の上半部で幅8.4m、深さ0.6mを測る。さらに深く断面「U」字形の彫り込みは、幅2.4m、深さ0.6mを測る。最下層に堆積していた黒褐色粘質土(第39図第16層)・黒褐色粘砂土(第39図第17層)から瓦器碗や土師器皿などが出土した。

**土橋 S X133・暗渠排水(第5・40図)** 土橋は、西辺堀の中央部で検出した。土橋北側と南側に拳大から径0.6m大の自然石を積み上げ、土止めとしていた。堀は大阪層群の礫層を掘り込んでいることから、土橋の土止め石は堀構築時に掘り出した石を用いたものと思われる。石組みはさほど精緻に積まれていないが、土橋北側の石組みよりも土圧がかかる南側の石組みが密に積まれていた。規模は幅3.8～4.0mである。土橋の上半部は、江戸時代の溝(S D89)で大きく「U」字状に削平されていた。また、土橋内の埋土中から平安時代中期の土器片が混入した状況で出土した。今回の調査対象地内で検出した土橋はこの1か所だけで、南辺には存在しないことが調査で明らかとなっている。東辺については西辺と同じく、辺中央に土橋が存在すると仮定すると、対象地外となる。しかし、東辺堀の底部から土器類とともに人頭大の自然石が数石出土したことから、東辺にも同様の土橋が存在した可能性が高いと考える。西辺中央に土橋を設ける際に、まず土橋の南北に暗渠を構築している。幅0.6m、深さ0.1mの断面「U」字形の溝を掘り、中に拳大から人頭大の石を敷き詰めていた。暗渠施設は、土橋南辺の石組みの南方2.5m付近から北側に向けて、北西コーナー付近までの長さ27mにわたって敷設されていた。このような暗渠を設けることにより、湧水・雨水などが土橋によってせき止められて滞水しないようにしたものと考えられる。

**西辺柵列 S A84・388・389(第5・14・41・43図)** S A84はJ地区で検出した柱穴列で、西辺堀の東側肩部から約3m東側に位置する南北方向の柵列である。堀の内側を囲む柵列の北西部分にあたる。検出長は5.4mで、3間分である。後述するように、屋敷の建物配置に規則性が高いことを考慮すると、S P84は想定北辺堀から南へ3m付近にあたることから、この柱穴位置で東に屈曲すると考えた。S P84に続く東側の柱穴は検出できていない。柱穴の規模は径0.4m、深さ0.3mを測り、柱間は1.5～2.0mである。S A389は、S A84から南に続く柱穴列で、土橋までの柵列である。C地区で検出した柱穴は、径0.3～0.4m、深さ0.3mを測る。柱間は1.5～2.0mである。検出長は3.6mで2間分を確認した。S A388は、土橋の南側から屋敷地の南西コーナーまでの柵列である。柱穴は、径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る。検出長は16.3mで、8間分を確認した。S A388・389はともに土橋の手前で終わり、そこから東西に柱穴を1基ずつ平面T字状に検出した。北と南のT字の間隔は6.6mと、土橋の幅よりも広い。間隔が6.6mとやや広いが、



第41図 J地区柵列S A84実測図



第42図 H地区柵列S A24実測図

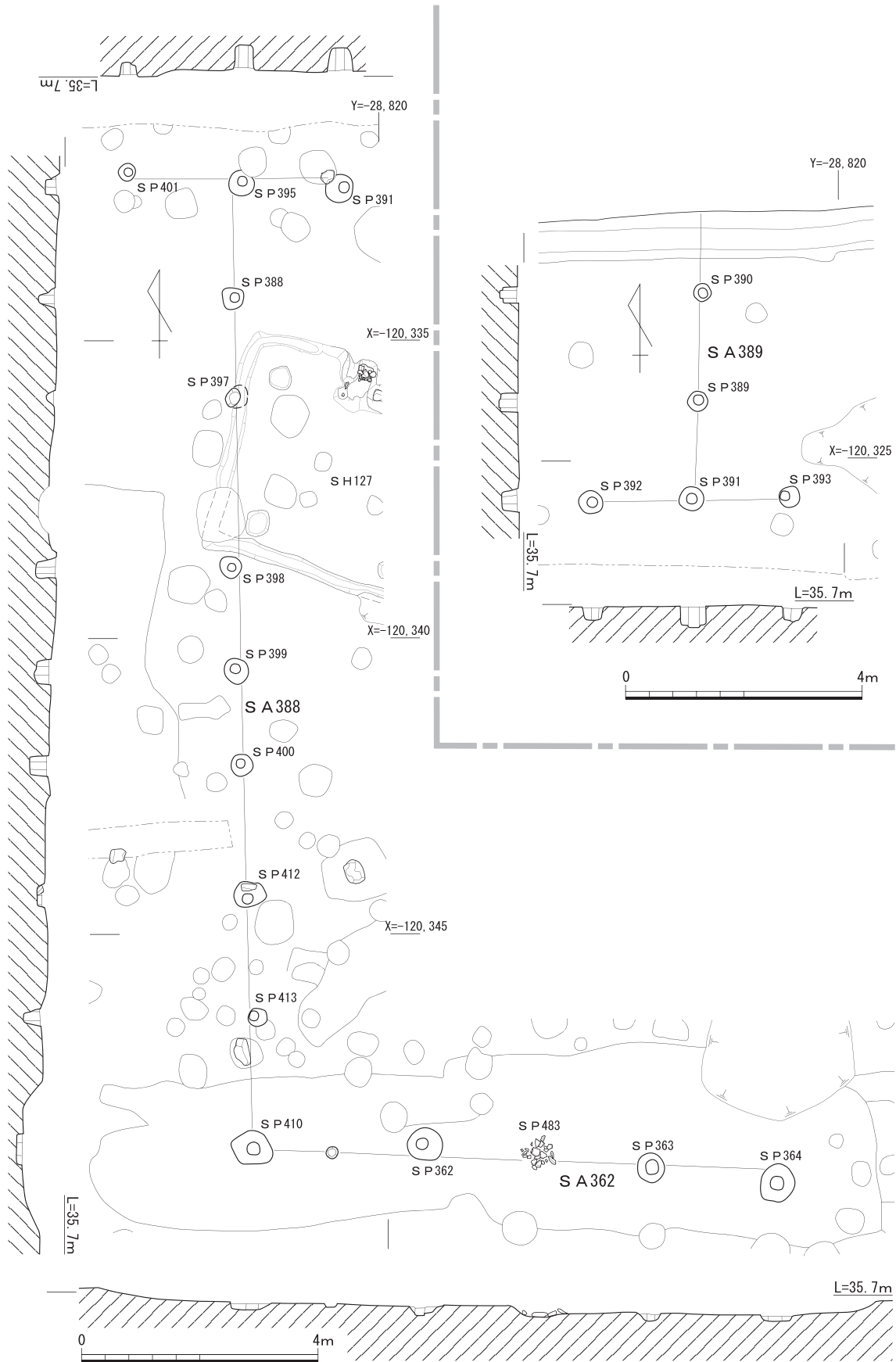
土橋の東に位置することから、門のような施設が存在した可能性を想定したい。

南辺柵列S A362・24(第5・12・36・42・43図) C地区からH地区にかけて検出した東西方向の柵列である。後世の攪乱によって、かなりの部分が検出できなかったが、推定18間分にはわたって検出した。南辺堀の北側掘形から北に3～4mの付近を堀に沿って築かれており、柵列の方位は、N87°Wを測る。S A362は南辺柵列の西側部分の柵列で、径0.5～0.7m、深さ0.2mを測る。柱間は1.5～2.0mである。S P483は柱

穴の検出には至らなかったが拳大の石を平坦に敷き詰めていたことから、柱穴の根石であったと考えた。S A24は南辺柵列の東側部分の柵列で、径0.6m、深さ0.2～0.4mを測る。柱間は2～3mである。

東辺柵列S A24(第12・42図) H地区で検出した。I地区では、後世の攪乱のため検出できなかった。東辺の堀が緩やかに傾斜する地点より、西方4m付近で検出した。径0.6～0.8m、深さ0.2～0.5mを測る。柱間は、2.5mである。これら、堀の内側に設けられた柵列は、柵列付近や堀内埋土に土壁の堆積が認められないことから、板塀であったと考え



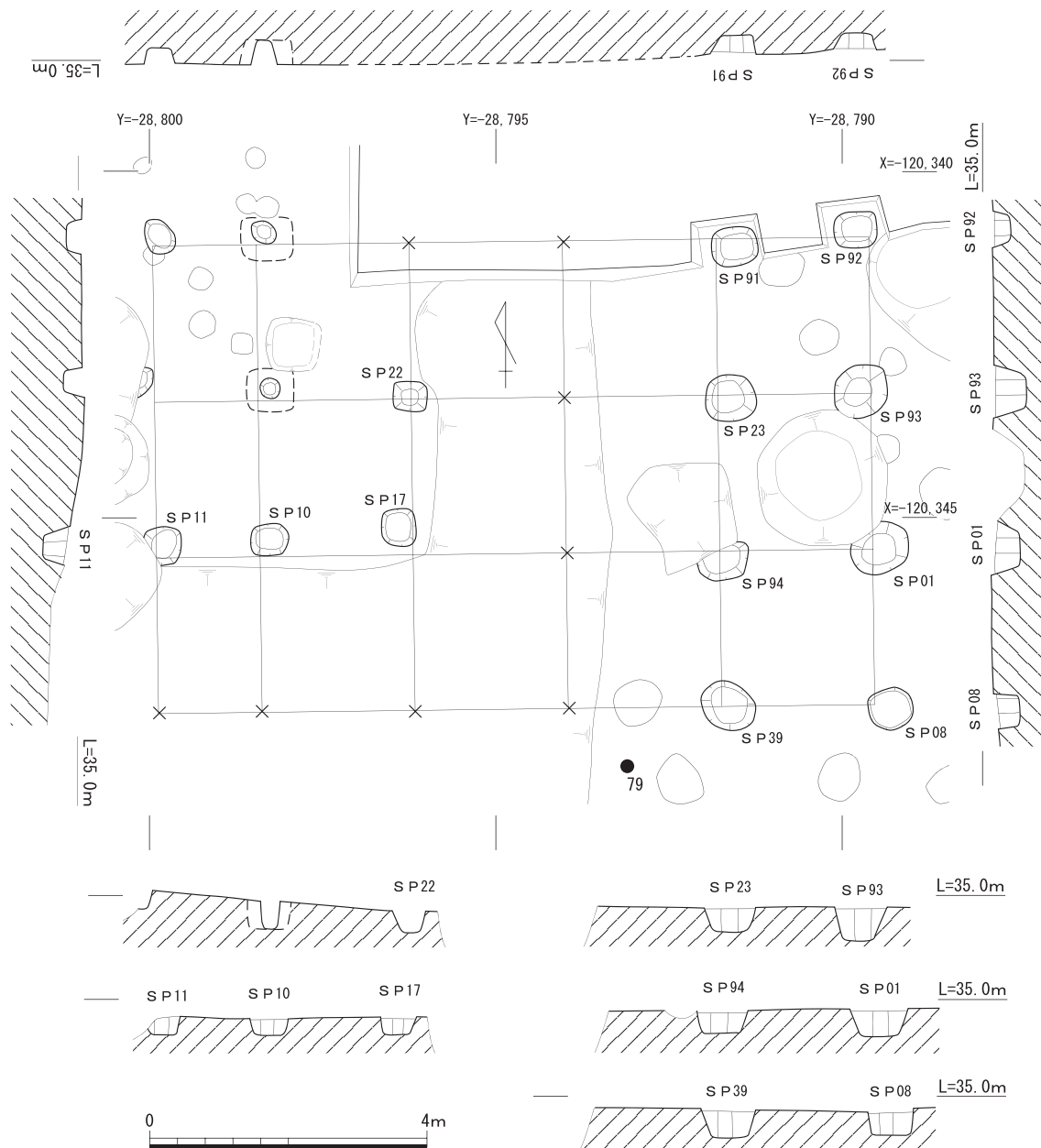


第43図 C地区柵列S A 362・388・389実測図

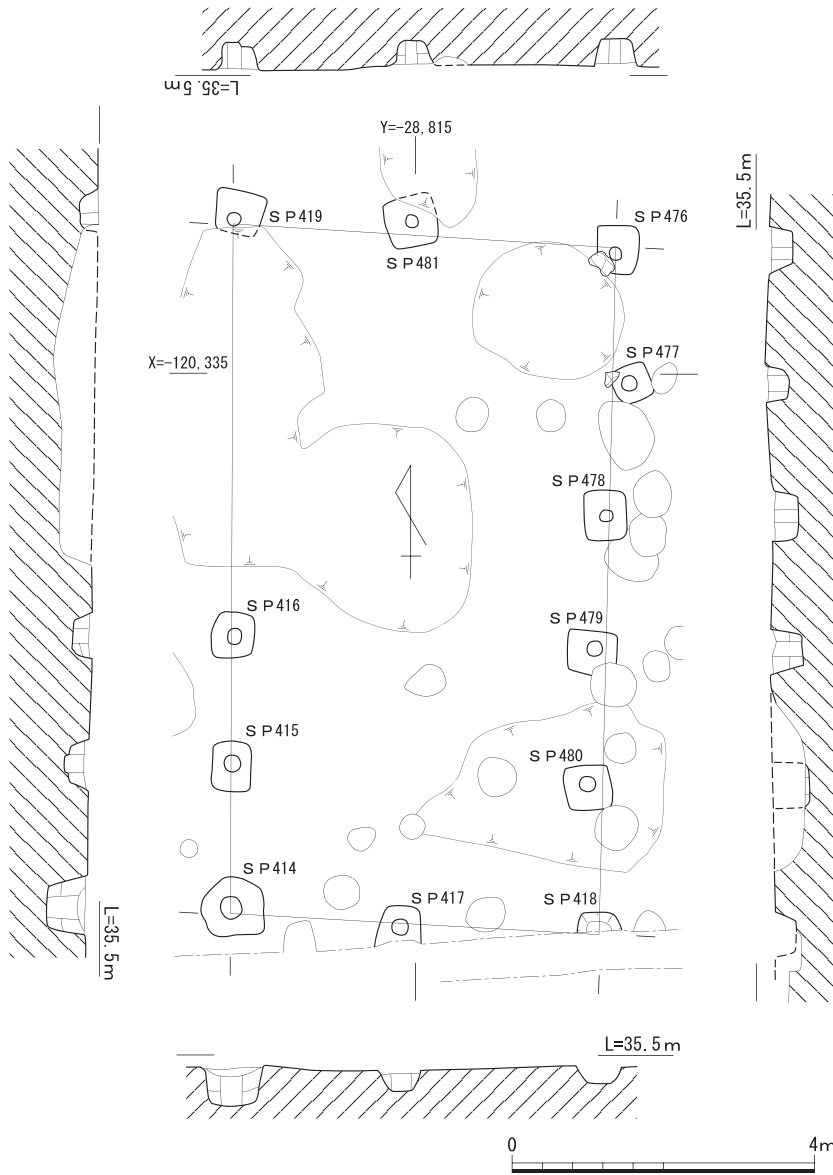
る。

掘立柱建物跡 S B 01 (第44図) C・H地区で検出した、3間(6.8m)×4間(8.9m)の東西棟の総柱建物跡である。柱間は2.2mである。西辺に柱間1.5mの庇が付く。建物の中央部・南西部の柱穴は後世の攪乱によって消失していた。また、北西部の柱穴の掘形は検出できなかった。柱穴の平面形は、円形、隅丸方形を呈す。その規模は0.5~0.8m、深さ0.3~0.5mを測る。柱痕跡は、径0.3mである。建物の方位は、真東西を向く。今回検出した建物の中で最も大きな規模で、屋敷の主殿もしくはそれに準じるものと推測される。

掘立柱建物跡 S B 414 (第45図) 土橋の南東部で検出した建物跡である。建物の北辺が土橋南辺にほぼ揃う位置にある。一部攪乱で消失していたが、2間(4.8m)×5間(9.1m)の南北棟の建物に復元できる。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺0.5~0.8m、深さ0.3~0.5mを測る。柱痕跡は



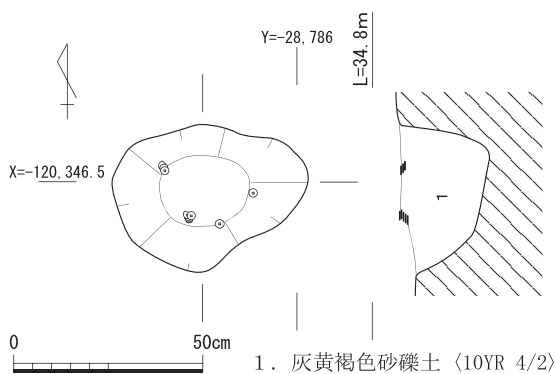
第44図 H地区掘立柱建物跡SB01実測図



第45図 C地区掘立柱建物跡S B414実測図

径0.2~0.3mである。柱間は1.6~1.8mである。建物の方位は、真北を向く。

埋納土坑S X46(第12・42・46図)掘立柱建物跡S B01の東辺より東方約3mの地点で検出した。規模は、0.4×0.5m、深さ0.23mを測る。埋土中から皇朝十二銭17点が出土した。これらは、遺構検出時に、4か所で3~5点が重なる形で出土した。内訳は、饒益神寶1点、貞観永寶15点、寛平大寶1点の計17点(第72図)である。また、掘立柱建物跡S B01のS P93付近から長年大寶1点、寛平大寶1点が出土しており、同様の遺構がこの付近にも



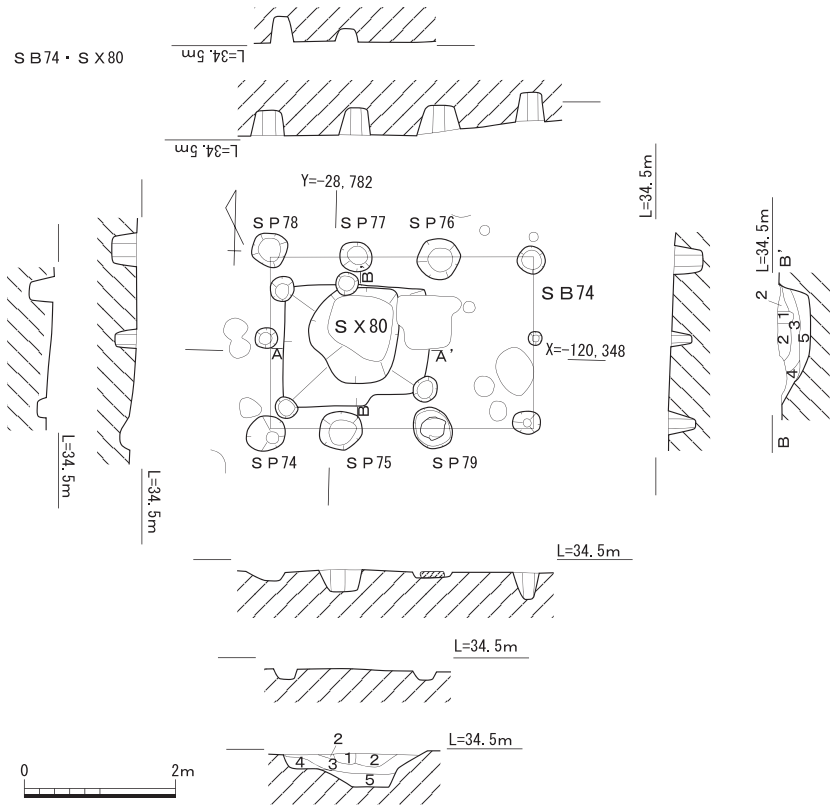
第46図 H地区埋納土坑S X46実測図

存在した可能性がある。いずれも9世紀中頃から後半にかけて初鑄されたものである。今回検出した平安時代末期期の屋敷とはかなりの時期差があるものの、その屋敷建設に伴う祭祀的な遺構、もしくはその前身の屋敷に伴う祭祀遺構であった可能性がある。

掘立柱建物跡S B74(第12・47図)屋敷跡の南東コーナー付近、柵列と堀の間で検出した。柵列や堀に主軸を揃えており、建物規模は2間

(2.3m)×3間(3.5m)を測る。建物の規模やその検出した位置から、櫓的な建物と考える。柱穴は径0.2~0.5m、深さ0.4mを測る。また建物内側に平行して、方形の土坑S X80と土坑肩部で径

0.3m、深さ0.2mの柱穴4か所を検出した。土坑S X80の上面での規模は1.9×1.6mで、その中央部を径約1.2mの範囲にわたって掘り込んでいる。深さは0.5mを測る。埋土中から土器片が出土したが、時期の判明するものはなかった。



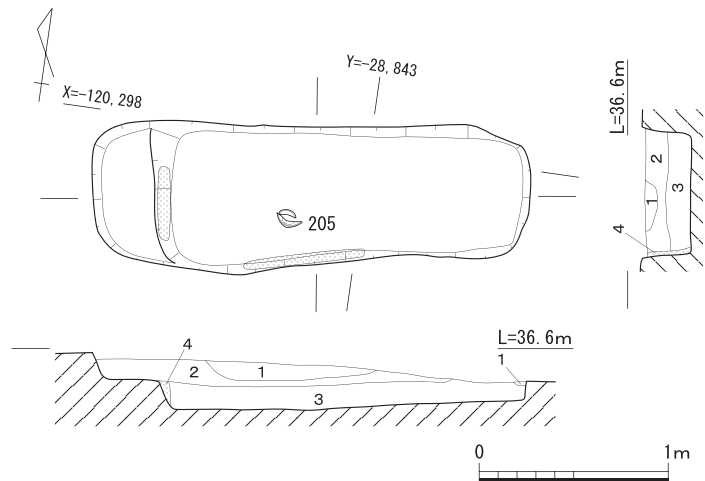
- |                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. 灰黄褐色砂質土 <10YR 4/2>   | 4. 褐色砂礫 <10YR 4/6>    |
| 2. にぶい黄褐色砂質土 <10YR 4/3> | 5. 黒褐色砂質土 <7.5YR 3/2> |
| 3. 暗褐色砂質土 <7.5YR 3/3>   |                       |

第47図 H地区掘立柱建物跡S B74・土坑S X80実測図

土墳墓S K34(第9・48図) E地区の北東部で検出した。規模は2.3×0.8m、深さ0.3m、主軸はN82°Eを測る。東部は、大きく削平を受けている。棺痕跡を部分的に確認した。棺内から白磁椀(205)が出土した。

(6) 鎌倉時代(第49~59図)

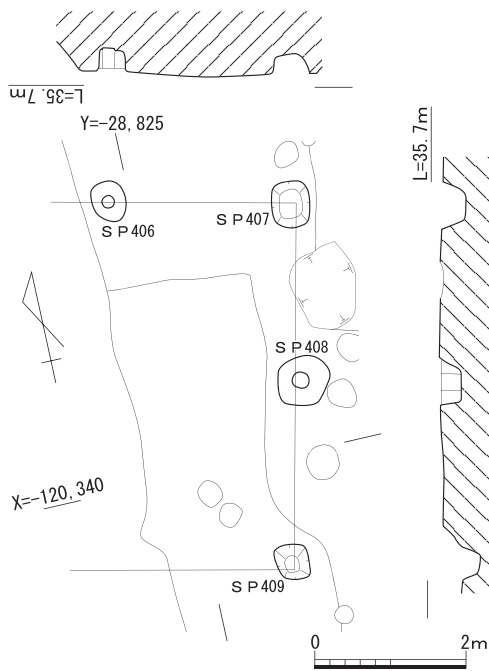
この時期の遺構には、主軸が平安時代末期の真北・真東西を向く遺構群とは異なり、大きく西に振れる掘立柱建物跡群がある。建物跡は、C地区からE地区で検出した。特にE地区では、建物跡に伴う柱穴ならびに同一面で検出した柱穴から出土した遺物などから、鎌倉時代には方形に区画された屋敷地は消滅し、大きく西に振る建物群が、この地に形成されたと考える。



- |                                      |                                     |
|--------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. コンクリート・攪乱                         | 3. 極暗赤褐色土 <5YR 2/4><br>(1cm前後の小石含む) |
| 2. 暗赤褐色砂質土 <5YR 3/6><br>(2~3cm大の礫含む) | 4. 赤褐色土 <5YR 4/6><br>(棺痕跡か)         |

第48図 E地区土墳墓S K34実測図

掘立柱建物跡S B406(第5・49図) C地区で検出した。建物跡の西半部は江戸時代の溝によって削平されている。規模は2間(4.9m)×1間(2.5m)以上で、主軸はN13°Eを測る。柱穴は径0.4~0.6m、深さ0.3~0.5mである。



第49図 C地区掘立柱建物跡 S B 406実測図

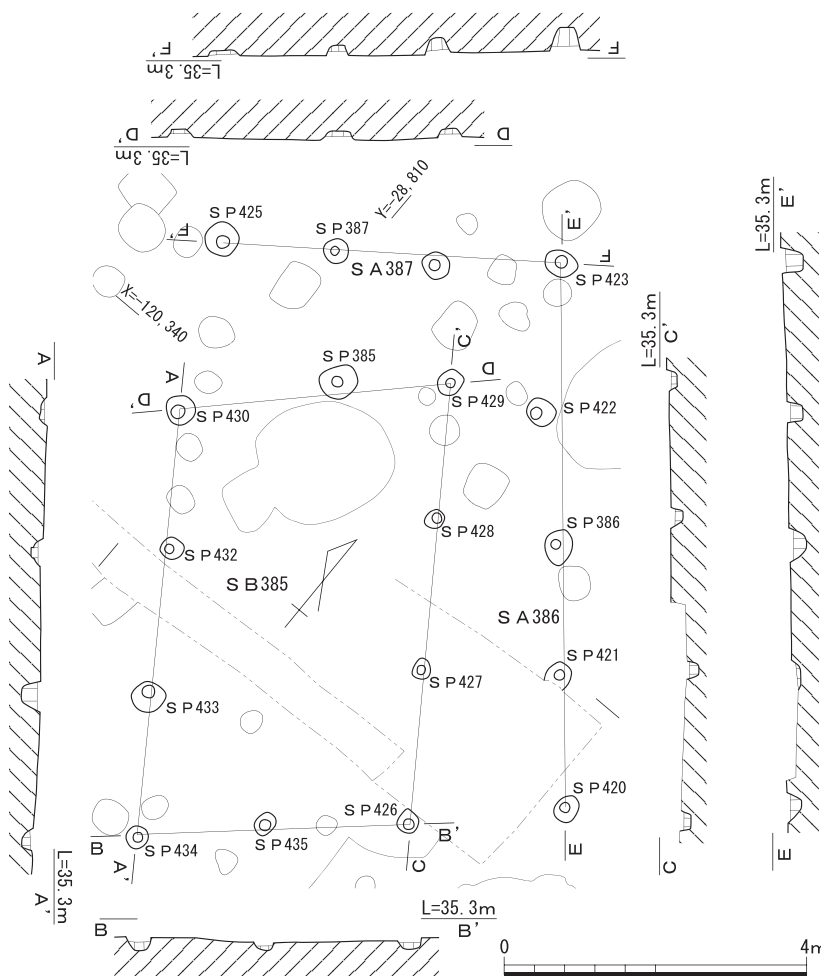
掘立柱建物跡 S B 385 (第5・50図) C地区で検出した。東・北側を柵列で囲まれた建物である。建物の規模は、2間(3.5m)×3間(5.9m)、主軸はN34°Wである。柱穴は0.3~0.5m、深さ0.2mと小規模なものである。柱穴からは、わずかな土器片が出土したが、時期を決定できるものはなかった。E地区で検出した建物群と同じく、その軸を大きく西に振ることから、鎌倉期の建物跡と考えた。

柵列 S A 386・387 (第5・50図) S A 386は、S B 385の東方1.5~1.8mで検出した南北方向の柵列で、4間(7.2m)分を確認した。柱穴は径約0.3m、深さ約0.2mで、柵列の方位はN41°Wである。S A 387は、S B 385の北方1.7~2.1mで検出した東西方向の柵列で、主軸はN54°Eである。3間(4.4m)分を検出し、柱穴は径0.3~0.4m、深さ0.1~0.3m

を測る。

掘立柱建物跡 S B 12 (第9・51図) E地区の南東部で検出した南北棟の建物跡である。規模は、1間(2.1m)×2間(5.5m)で、主軸はN6°Wを測る。柱穴は円形で、径0.2~0.4m、深さ0.1~0.3mを測る。東辺中央の柱穴 S P 40から土師器皿が出土した。

掘立柱建物跡 S B 15 (第9・51図) E地区の南西部で検出した南北棟の建物跡である。規模は1間(2.0m)×2間(4.7m)で、主軸はN30°Wを測る。柱穴は円形で、径0.3~0.5m、深さ0.2~0.4m



第50図 C地区掘立柱建物跡 S B 385、柵列 S A 386・387実測図



を測る。

掘立柱建物跡 S B 30 (第9・52図) E地区の北東部で検出した、主軸方向が大きく東に振れる建物跡である。規模は3間(4.6m)×4間(7.0m)で、主軸はN40°Eを測る。柱穴は円形で、径0.2~0.5m、深さ0.1~0.4mを測る。柱穴 S P 33から土師器皿(265・266・283)が出土した。

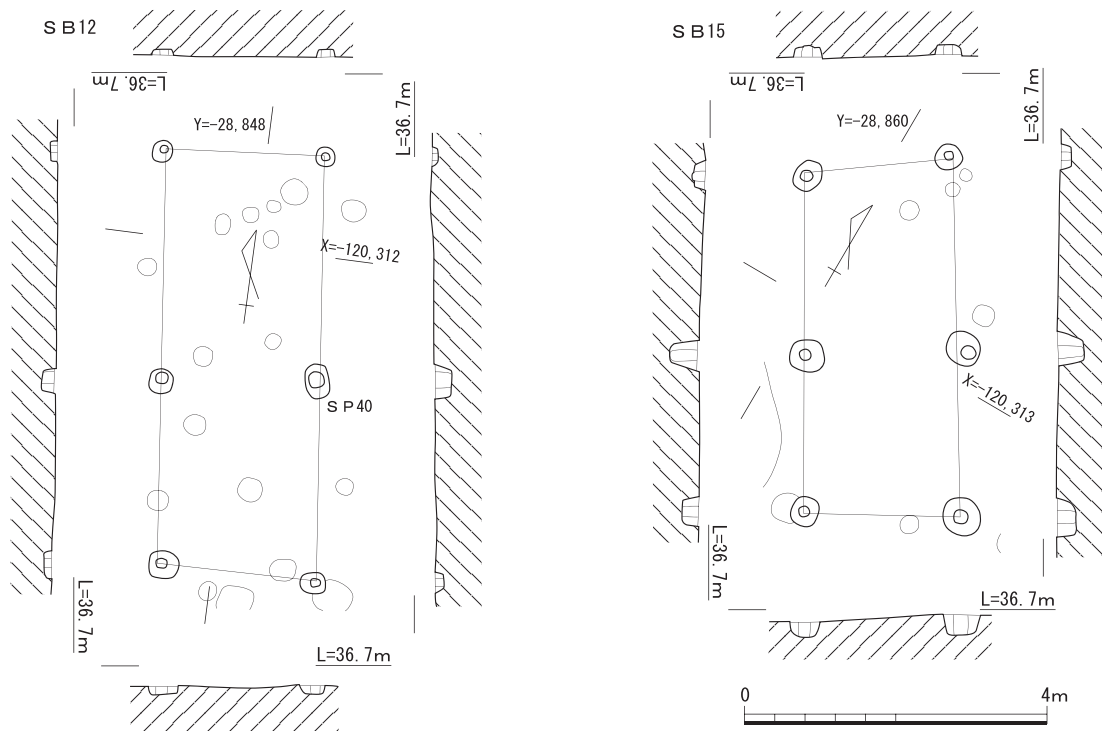
掘立柱建物跡 S B 46 (第9・52図) E地区の中央部で検出した、主軸方向が大きく東に振れる建物跡である。規模は2間(4.5~5.5m)×3間(9.6m)で、主軸はN53°Eを測る。柱穴は円形で、径0.3~0.5m、深さ0.1~0.2mを測る。柱穴 S P 52から土師器皿(269)が出土した。

掘立柱建物跡 S B 58 (第14・53図) J地区の東部で検出した南北方向の建物跡である。規模は2間(3.6m)×2間(4.2m)以上で、主軸はN25°Wを測る。柱穴は円形で、径0.4~0.5m、深さ0.3mを測る。

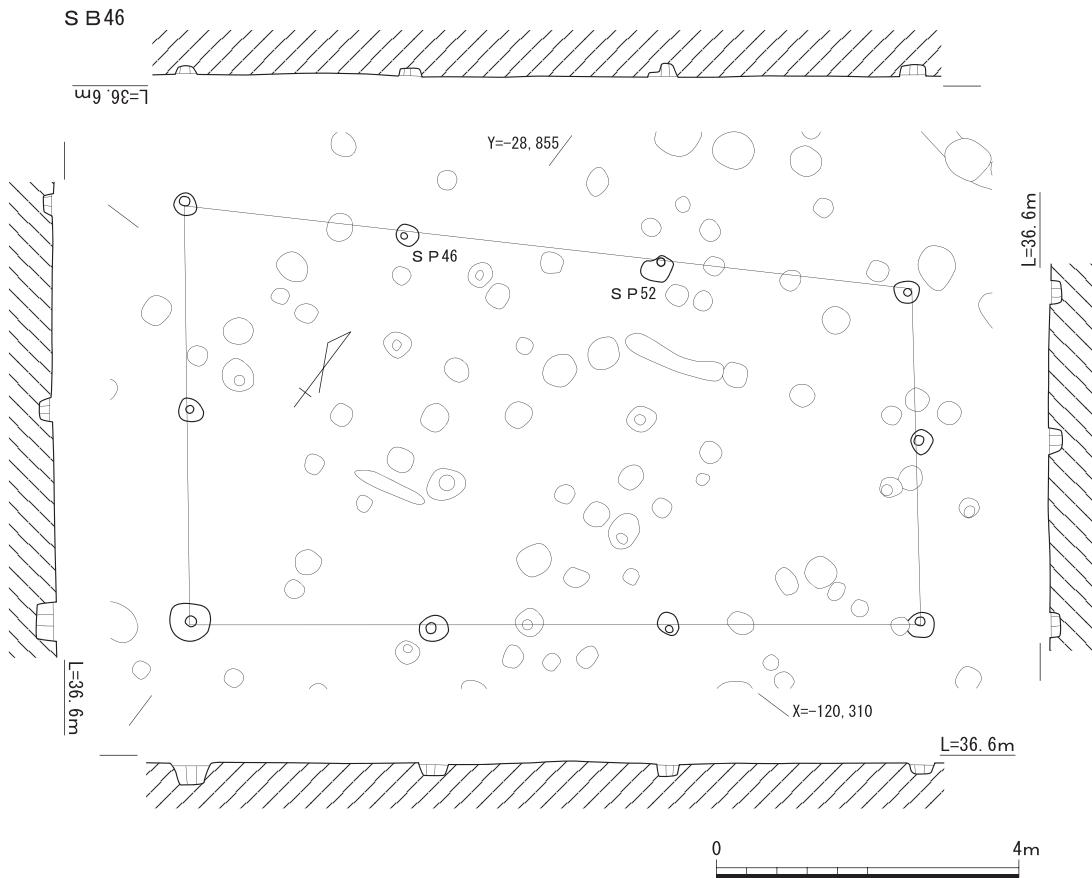
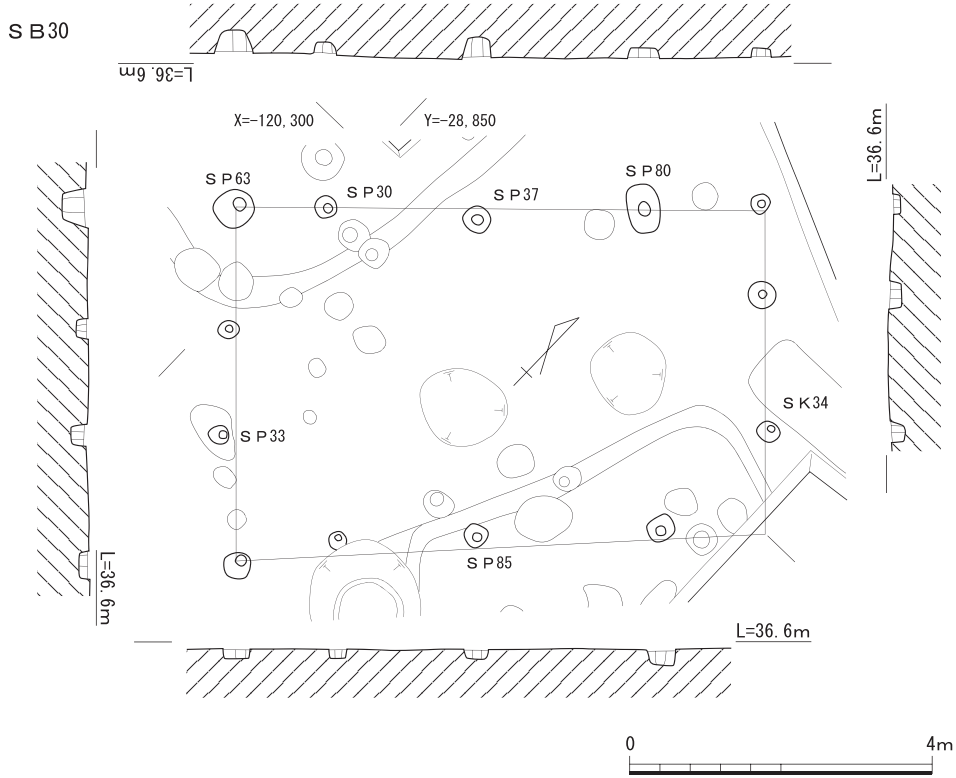
掘立柱建物跡 S B 30 (第14・54図) J地区の南西部から検出した南北棟の建物跡である。建物南東部は後世の攪乱によって消失していた。規模は2間(5.7m)×3間(8.2m)で、主軸はN14°Wを測る。柱穴は、径0.3~0.5m、深さ0.3~0.4mである。

掘立柱建物跡 S B 49 (第14・55図) J地区の中央部で検出した建物跡である。建物東側は、方形に巡る平安時代後期の堀 S D 50によって削平されていた。建物の規模は2間(4.1m)×1間(2.3m)以上で、主軸はN65°Wを測る。柱穴の規模は、径0.4~0.6m、深さ0.2~0.3mである。

掘立柱建物跡 S B 08 (第8・56図) B地区の南東部で検出した。建物跡の規模は、2間(5.5m)×1間(3.4m)以上で、主軸はN21°Eを測る。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺0.5~0.7m、深さ0.3mである。切り合い関係から、長岡京期の溝 S D 79埋没後に築かれた建物である。柱穴内か



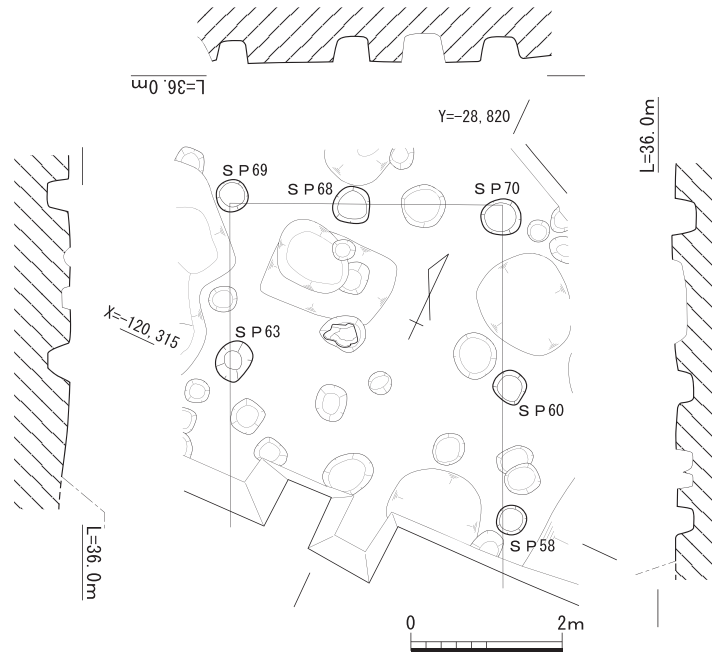
第51図 E地区掘立柱建物跡 S B 12・15実測図



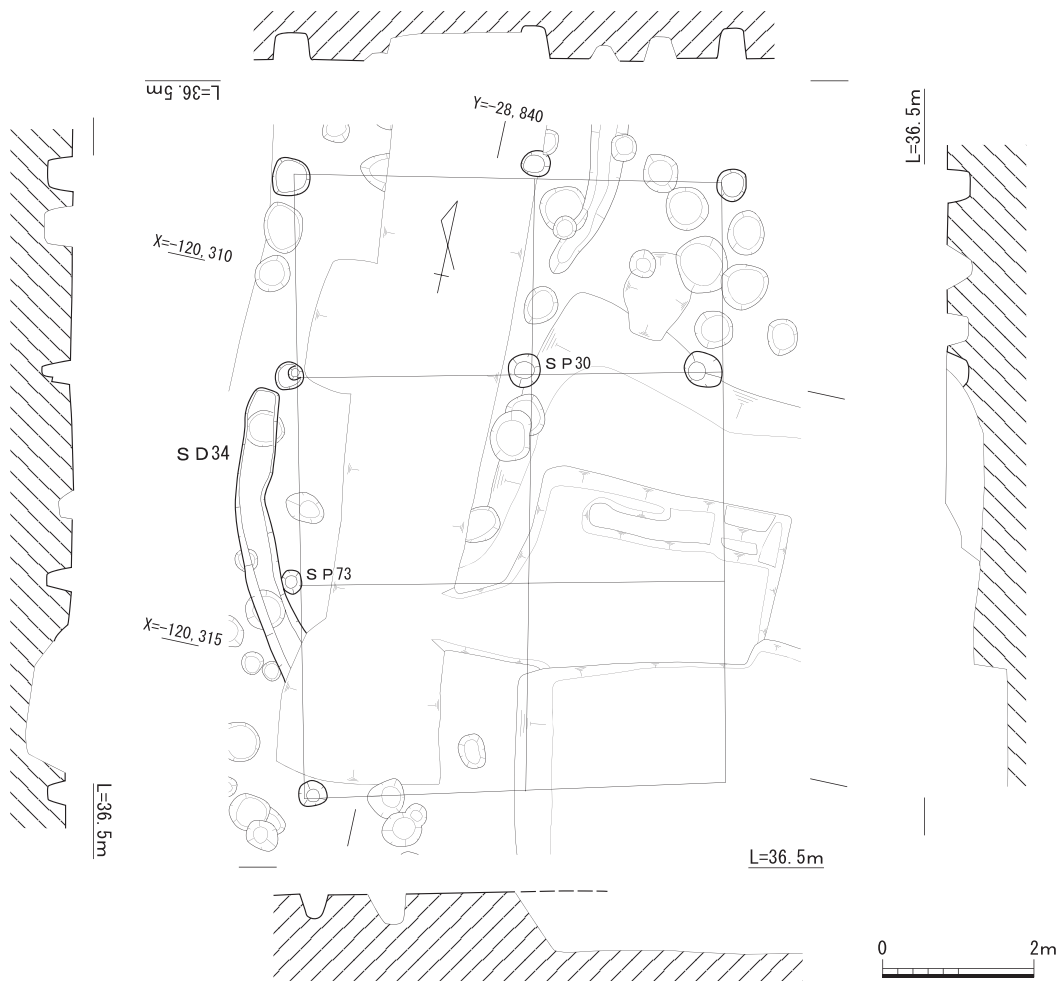
第52図 E地区掘立柱建物跡S B30・46実測図

らの出土遺物はなかったが、建物跡の軸方向が大きく斜傾することから、この時期のものと考えた。

掘立柱建物跡柱穴とその他の柱穴(第57図) 図示した柱穴はE地区で検出したもので、この地区で検出した柱穴は、土器が出土するものが多い。柱穴は褐色礫土(第10図第5層)から掘り込まれる。この褐色礫土は、小礫を多く含み、山砂利を混ぜ合わせて固く叩きしめられており、整地土と判断される。S P 40は掘立柱建物跡S B 12に、S P 33は掘立柱建物跡S B 30



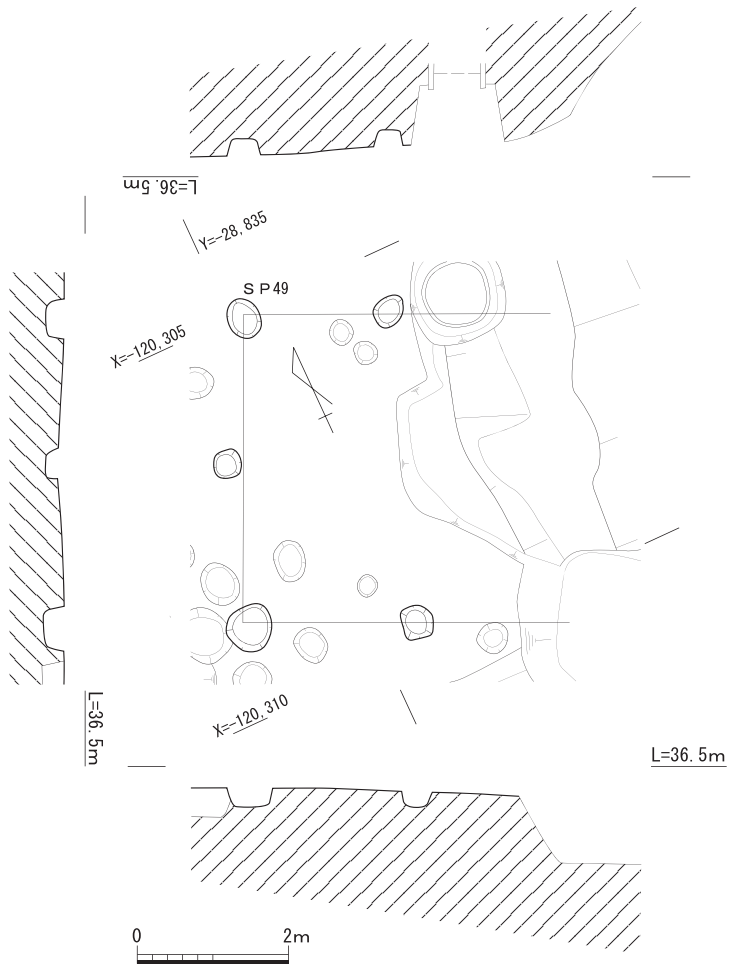
第53図 J地区掘立柱建物跡S B 58実測図



第54図 J地区掘立柱建物跡S B 30実測図

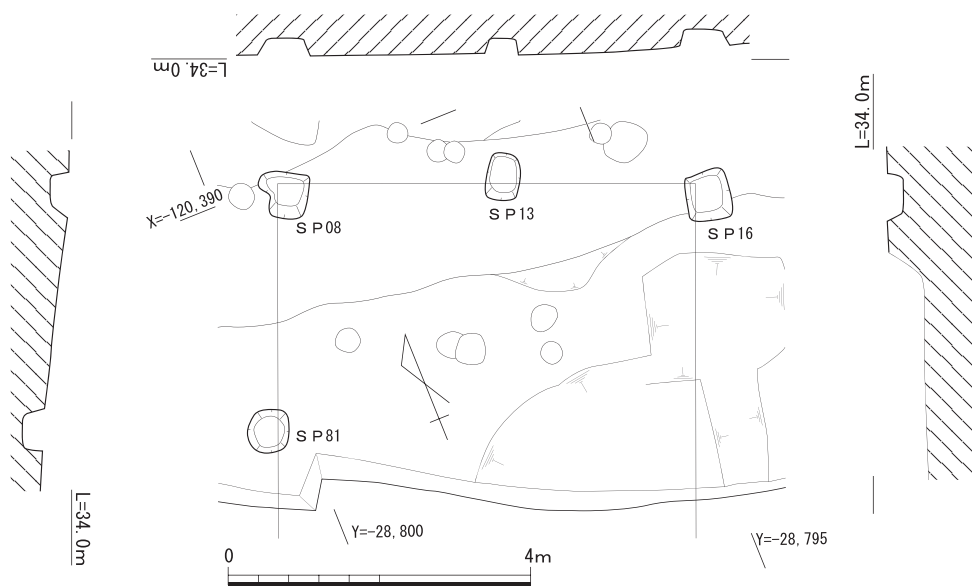
に、S P 52は掘立柱建物跡S B 46に伴う柱穴である。その他、時期の判明する土器片が出土した柱穴を掲載した。同じく、褐色礫土を掘り込むものである。これらの柱穴から出土した遺物の年代観を、E地区で検出した主軸方向が大きく斜傾する建物群の時期とした。またE地区以外で検出した同様の方位の建物群についても、明確に時期を判断できる遺物の出土はなく、E地区のような整地土を確認できなかったが、同時期の遺構であると考えた。

溝 S D 19・22・36・54(第14・58図) これら溝群は、J地区の北西隅で検出した。灰黄褐色土(第15図第34層)から掘り込まれる。灰黄褐色土は、整地土と判断したE地区の褐色礫土と同時期のものとする土層である。溝内から土師器片や瓦器片が出土した。S D 19は幅0.9m、深さ0.2mを測り、埋土は暗赤褐色土(第15図第28層)である。S



第55図 J地区掘立柱建物跡S B 49実測図

溝 S D 19は幅0.9m、深さ0.2mを測り、埋土は暗赤褐色土(第15図第28層)である。S



第56図 B地区掘立柱建物跡S B 08実測図





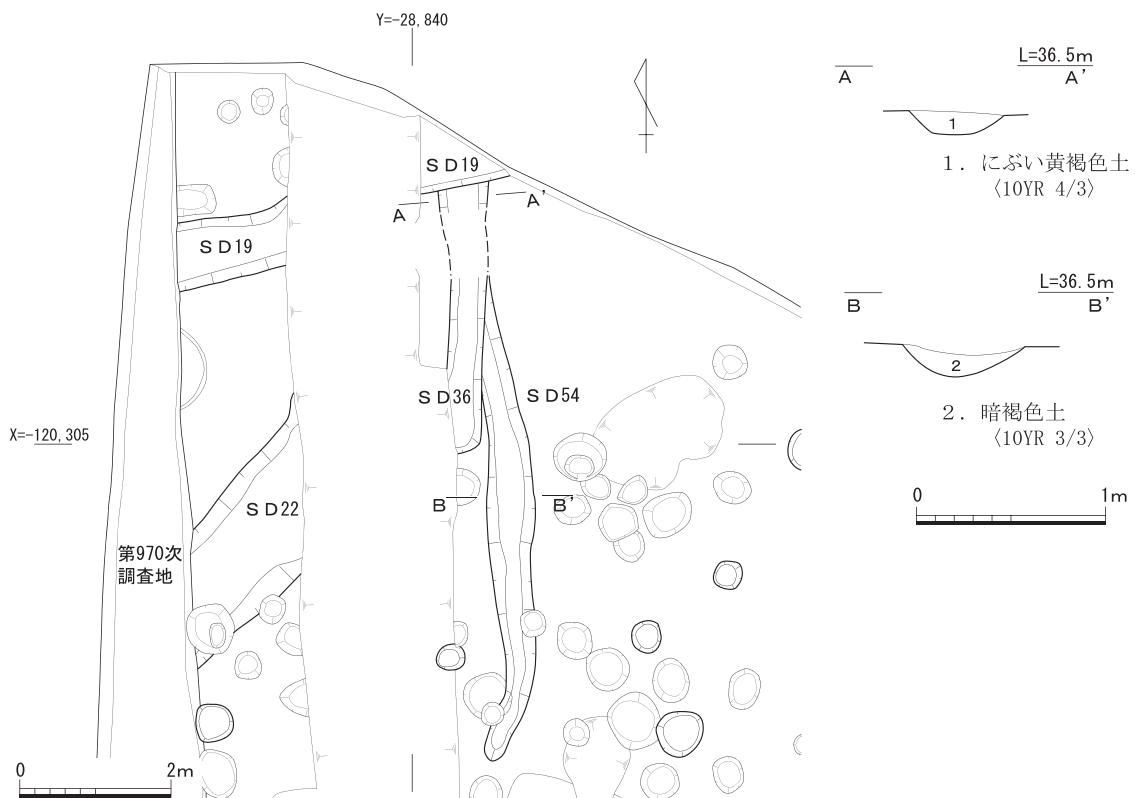
く過程の中で築かれたものと考えられた。土坑東側は後世の削平によって消失していた。規模は、南北1.5m、東西1.1m、深さ0.2mを測る。土坑内から、中国製陶磁器(212)、瓦器椀(233)、土師器皿(274~280)などが出土した。また、土坑の掘形に沿って0.2~0.3m大の石を確認したが、土坑の性格については不明である。出土した遺物群は、方形に区画された屋敷跡の存続時期を示す良好な資料と考えられる。そのほか、土馬(141)も出土した。

土坑 S K 86 (第12・59図) H地区中央付近で検出した方形の土坑である。一辺0.7m、深さ0.1mを測る。出土遺物はなく時期については不明であるが、褐色土(第39図24層)の上面で検出し、検出した層位から鎌倉時代の遺構と考える。土坑壁の一部から床面に掛けて炭や赤色焼土が認められた。硬質に焼けた壁などは認められない。

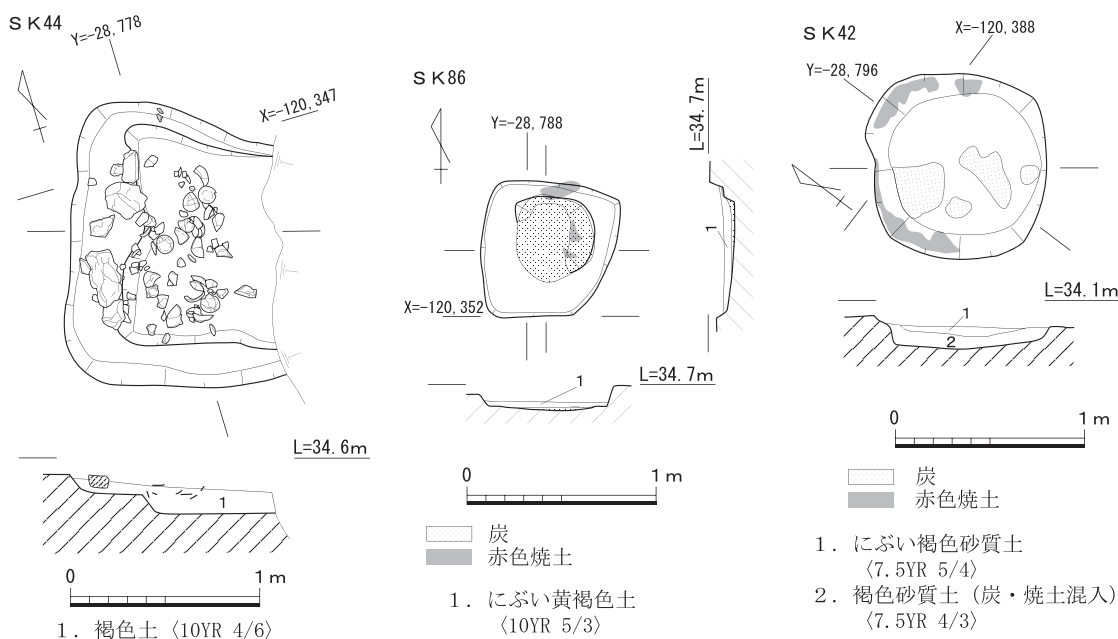
土坑 S K 42 (第7・59図) B地区の中央部で検出した隅丸方形の土坑である。一辺1.0m、深さ0.15mを測る。土坑床面付近には炭や焼土片が混入する褐色砂質土が堆積していた。出土遺物はないが、床面にはまとまって炭が広がっており、壁面は部分的に赤色に変色していた。土坑の性格については不明である。

(7)江戸時代

今回の一連の調査地は、江戸時代以降の攪乱より消失している部分が多く、遺構は部分的にし確認することができなかった。江戸時代のこの地は、下海印寺村として伏見宮家の領地であった。この一画に阿弥陀寺が存在していたが、今回の道路建設に伴って、寺は移転している。長岡京市教育委員会は下海印寺地区を対象に古文書・建築・民俗資料などから調査を行っている。<sup>(注7)</sup>



第58図 J地区溝S D 19・22・36・54実測図



第59図 H地区土坑S K 44・86、B地区土坑S K 42実測図

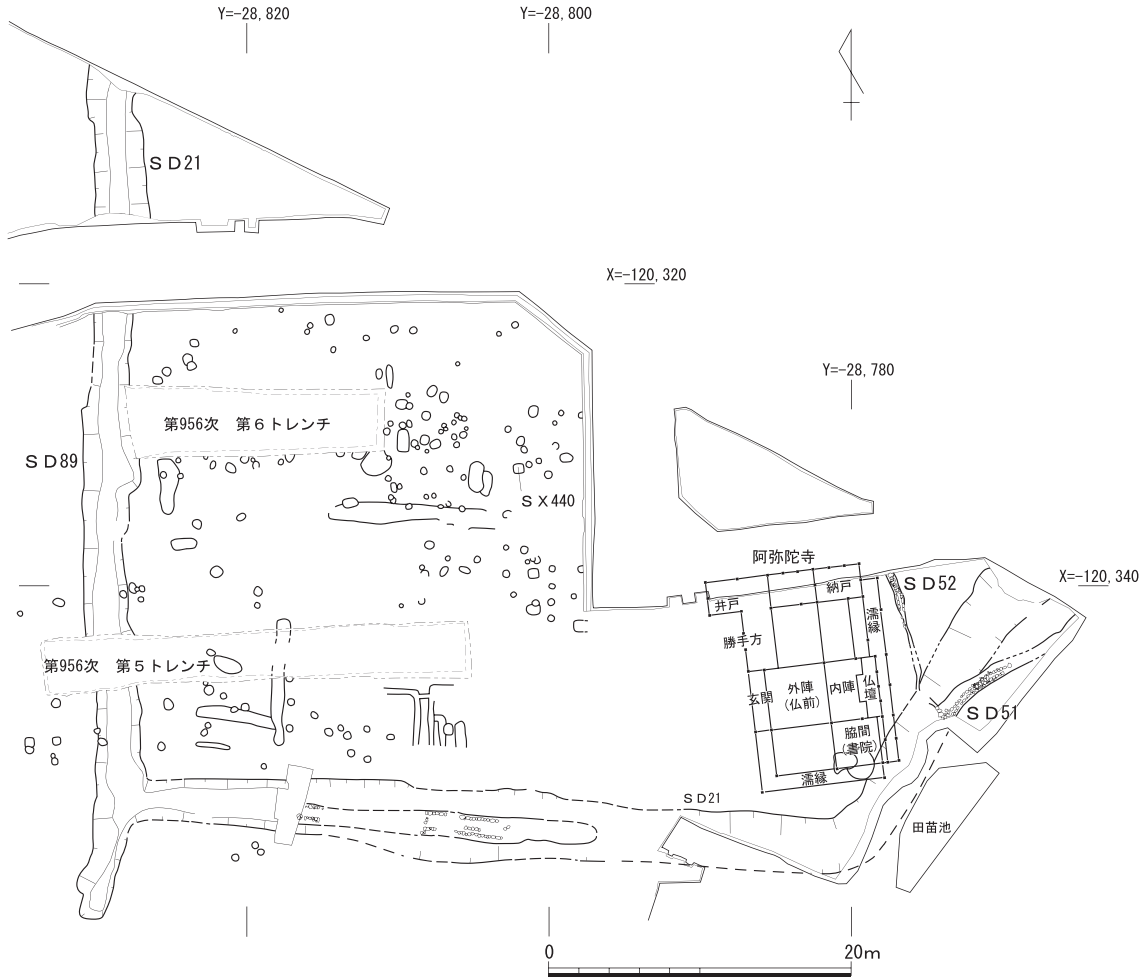
れによると阿弥陀寺は、正覚山を山号とし、光明寺下に属す西山浄土宗派の寺院である。創建時期は不明であるが、慶長10(1605)年「京都所司代上竹赦免状」には松の坊(慈光院)とともに寺名が記載されており、「町村沿革調」では延宝元(1673)年の開創とする。本尊阿弥陀如来座像には元禄15(1702)年の朱書がある。境内の古い墓石には元禄期のもものことから、元禄年間には現地に寺として建立されていたとする。

発掘調査の結果、C地区を中心に、北はJ地区、東はG・H地区にかけて江戸時代の遺構が認められた。これらの遺構は、直接ではないが江戸時代の阿弥陀寺に関連すると判断される。

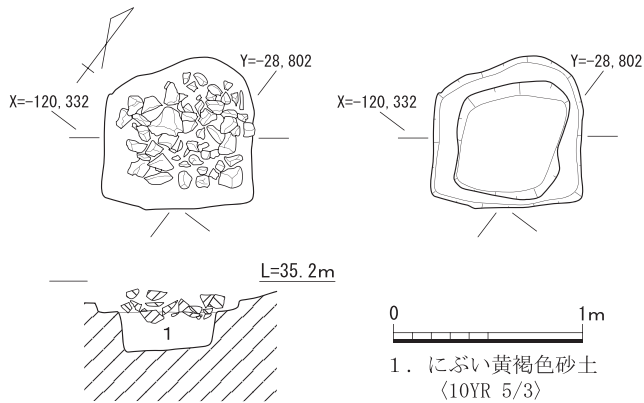
溝S D 21・89(第60図) J・G・H地区でS D 21を、C地区でS D 89を検出した。これらの溝は同一のもので、平安時代末期の屋敷地の堀と同じ位置で検出した。およそ500年を経た後に同じ位置に溝を巡らせた理由はよくわからないが、一つには、周辺の地盤が大阪層群の礫層直上にあたり、堀の埋め土は容易に掘削できたためと考える。

S D 89の規模は、J地区においては幅5.0~5.8m、深さ1.1~1.2mを測る(第60図)。溝底には褐色砂質土(第15図第16層)、暗褐色礫土(第37図第17層)や暗褐色土(第37図第18層)が堆積していた。これらの層からは多量の陶磁器類が出土した。C地区では幅5.0~5.9m、深さ1.3mを測る(第6・37図)。溝底にはにぶい黄色土(第6図第26・23層、第37図第32層)が堆積していた。C地区においては掘り直しが認められた。その規模は、幅3.4m、深さ0.9mを測る。溝底には灰黄色砂質土(第6・37図第23層)や黄褐色土(第6図第25層)が堆積していた。これらの層からも多量の陶磁器類が出土した。特に香炉をはじめ仏飯器や花瓶などが出土しており、阿弥陀寺との関連を示唆するものである。南北方向の溝の南端部はS D 21との接合点よりさらに南に向けて掘られ、ここから小泉川に排水していたと思われる。

S D 21の規模は、C地区で幅5.0m、深さ1.2mを測る(第38図)。溝底には黄褐色砂土(第38図第



第60図 C・G・H・J地区江戸時代遺構配置図



第61図 C地区不明遺構S X 440実測図

これらの溝は、江戸時代の下海印寺村内に設けられた排水のための溝と考えられる。神戸市立博物館や高槻市教育委員会蔵の17世紀中頃の「洛外図屏風」に下海印寺村が描かれているが、その絵図にはこのような溝は描かれていない。絵図によると、慈光院裏手の竹藪までが下海印寺村であったことがうかがえ、現在の位置関係からその付近までこの溝は続いていると推測される。

溝S D 51・52(第60図) H地区の北東部で検出した溝である。人頭大の自然石を積み上げて

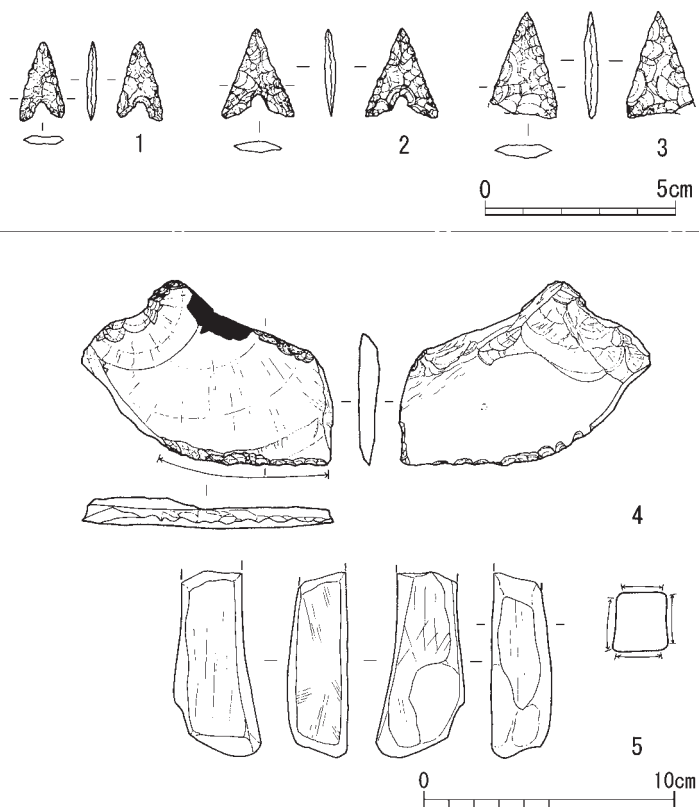
5層)が堆積しており、この層から近世陶磁器類が多量に出土した。G地区においても幅4.7m、深さ0.7mを測る。H地区では北東方向に大きく弓状に屈曲する。その規模は幅4.2m、深さ0.5mと浅いものであった。水は東から西へ流れ、S D 89と合流して南下し、小泉川へと排水していたと推定される。

いる。両溝も阿弥陀寺に伴う溝と考えられる。江戸時代の溝 S D 21 の埋没後に築かれていた。

不明遺構 S X 440 (第60・61図)

C 地区東部で検出した土坑である。平面は方形を呈し、二段に掘り込む。土坑内はにぶい黄褐色砂土で埋まっていた。その上面を拳大の石で覆っていた。石は0.6m四方の範囲に集石する。土坑の規模は、上段が一辺0.8m、下段が一辺0.6m、深さ0.25mを測る。墓であった可能性がある。

(岡崎研一)



第62図 出土遺物実測図(1)

6. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦器・白磁・青磁・近世陶磁器・瓦・石製品・銭貨など整理箱127箱である。その内訳は、第970次が75箱、第1007次が52箱である。

(1) 縄文時代・古墳時代初頭(石製品、第62図)

1はE地区 S P 37から、2はC地区 S P 431から、3はA地区 S K 142の西側の小泉川への斜面地内埋土中から出土した。4はE地区の精査中に、5は古墳時代初頭のA地区 S K 123から出土した。1・2は平面二等辺三角形を呈し、側縁は直線的である。基部に深い三角形の抉りをもつ、凹基式の石鏃である。3は側縁が直線的な二等辺三角形を呈す。基部には、浅い三角形の抉りを施す。4は削器である。5は砥石である。

(岡崎研一)

(2) 古墳時代初頭(第63～65図)

A・C・J地区の竪穴式住居跡、土坑、柱穴等から、整理箱約10箱分の古墳時代初頭の土器が出土している。D・J地区の後世の土坑内や包含層からも良好な資料を得ることができたので、関連遺構の存在を考え掲載した。以下、遺構ごとにその詳細を述べる。

6～33は、A地区竪穴式住居跡 S H 121から出土した。残存率は高く、図化した28点のうち、約半数の土器がほぼ完形に復元できる。器種は、壺、甕、高杯、器台、鉢からなり、バラエティに富む。まず壺の形式には、緩やかに外反する口縁をなす広口壺(6・7)、頸部が外反する二重口縁壺(8)、内湾する口縁を特徴とする細頸壺(9)や、短頸壺(10)がある。これらのうち、6の広口壺は垂下口縁をなすものである、口縁部は一部剥離している。胎土には、赤色斑粒が多量に

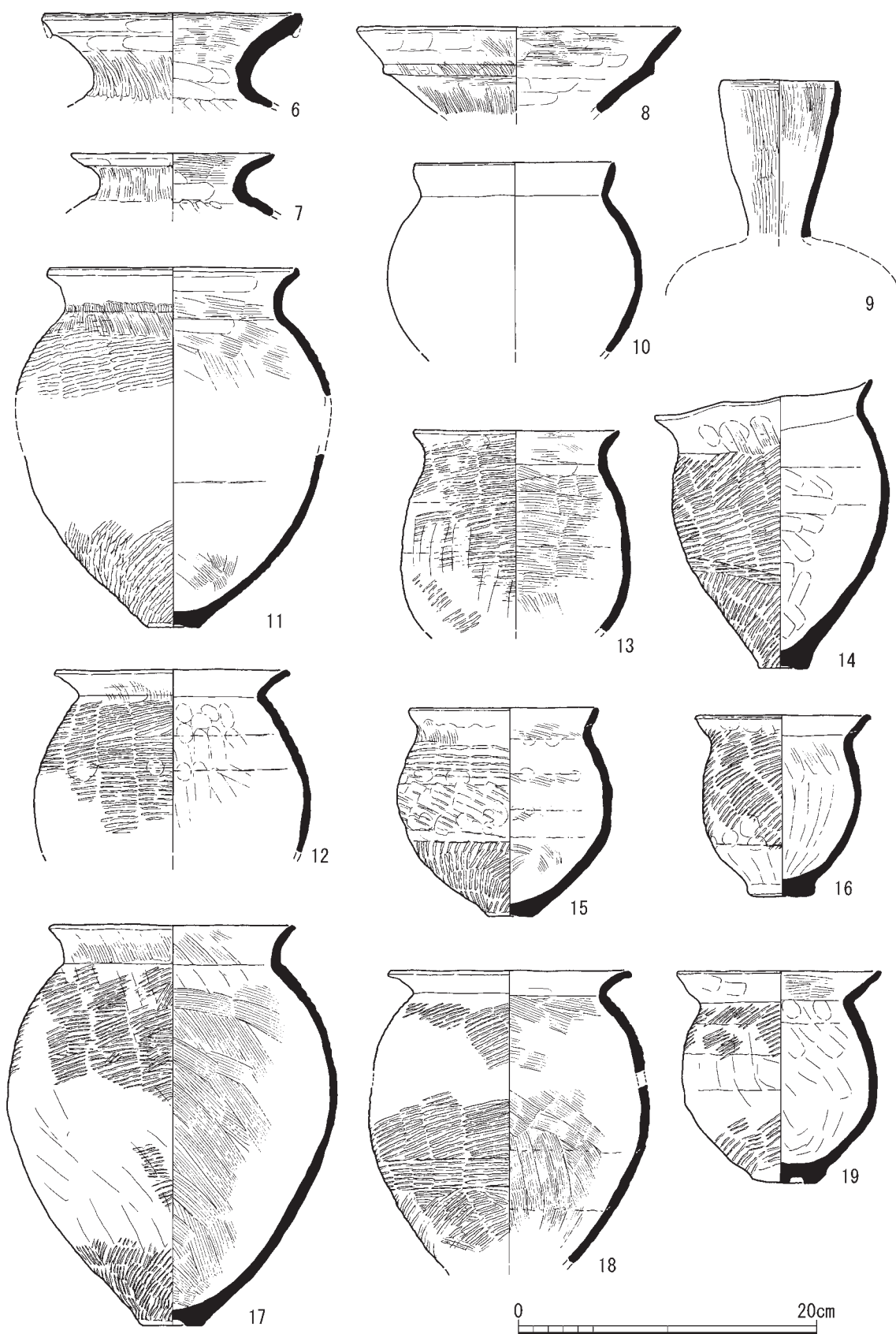
含まれ、色調は浅い黄橙色(7.5YR 8/4)を呈する。甕は、弥生系タタキ甕から構成され、器高によって、25cm前後(11・17・18・20・21)、20cm前後(12~14・22)、14cm前後(15・16・19)のものに大きく分けられる。口縁部の形態は、いずれも「く」字状口縁をなし、口縁端部は丸くおさめるものが主体をなすが、11のみは口縁部を跳ね上げるタイプである。口縁部の特色として、口縁端面に1条の沈線をもつもの(16・20・21)がある。また、口縁部外面は、通常、横ハケあるいは横ナデ調整によって処理されるが、縦方向のハケ調整によって仕上げるものがあり(17・21)、特徴的な手法として注目される。体部は、右上がりのタタキを基調とし、底面から約3分の1の高さを前後する位置で、明瞭にタタキ方向が変化し、分割成形がなされたことが窺える(14・18・21・22)。分割成形による粘土接合痕は、板状のナデを多用することによって完全に消しているものがある(17)。底部は輪台状を呈するものが主体をなす。14は、口縁部の約半分が残存するが、口縁の成形がなされておらず歪な形状を呈する。甕の胎土は、混和材として、主に石英・長石のほか、堆積岩類を含み、乙訓地域に特徴的な赤色斑粒を含む。色調は、にぶい黄橙色(10YR 7/2)を呈するもの(11)があるが、全体ににぶい橙色~赤褐色系の色調を呈するものを基調とする。15は、一部左上がりタタキ痕を認める小形甕である。24は、突出した底部をなすことから、タタキ成形による壺の底部とみられる。29・30は高杯である。杯部が長く拡張し、スカート状に開く脚をもつ東海系の系譜上に派生したとみられる庄内併行期に通有の高杯(29)と、脚部が明瞭に屈曲して開くいわゆる畿内系高杯の古式のタイプがある(30)。ともに1~3mm大の赤色斑粒を含み、色調は他の土器群と比較し強い赤褐色系の色調を呈する(29は5YR 5/6、30は10R 5/6)。32の器台は、近江・東海系高杯に特徴的な形式で、脚部から受部へ大きく屈曲して開く形式で、口縁部外面に一条の沈線を施す。33の鉢は、「く」字状口縁をもち、口径が大きく開くタイプで、外面にナデ、内面はハケ調整による粗製品である。S H121出土資料は、内面ハケ調整を主体とする弥生系タタキ甕を組成の中心とする一括資料であるが、近江・東海系器台(32)の形態に加え、高杯の形式のなかには、杯部に稜をもち、脚が大きく開くタイプ(29)を含むことから、庄内併行期中段階に帰属する土器群である。

34・35は、A地区土坑S K149から出土した。34は、内外面にミガキを施す精製品の鉢である。35の高杯は、口縁部が欠損するが、長く拡張する口縁をもつ形式とみられる。

36は、J地区竪穴式住居跡S H82から出土した弥生系タタキ甕である。口縁部は受口状を呈する近江系との折衷的な特色をもつ。体部下部に接合痕が確認され、2段階の分割成形によるものである。底部がいわゆる輪台技法によらず、小形化した平底であることから、庄内併行期前半の資料とみられる。

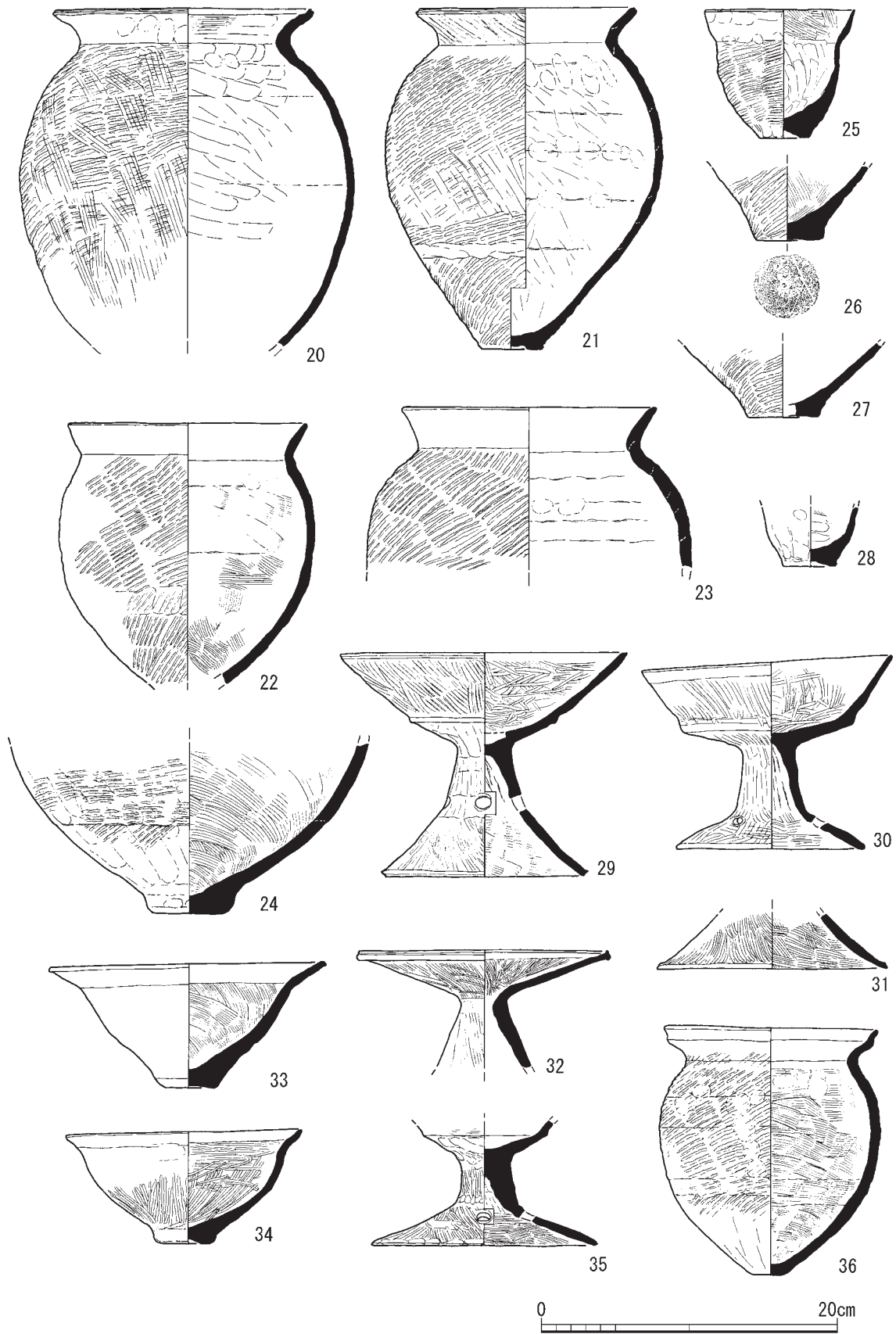
37~50は、A地区土坑S K123から出土した。37は短頸壺である。外面ナデ調整、内面にハケ調整を施す。38・39は、小さく突出した底部の形状から、タタキ成形を施す壺底部とみられる。40は手づくねによる壺の一部と推定される。42~45は弥生系タタキ甕である。いずれも「く」字状口縁をなす。42が端部を丸く納めるのに対し、43~45は端部に面をなす。残存状況の比較的良好的な43は、端部をわずかに摘み上げ、内面をハケ調整後にナデを施す。43の上半は板状工具を用



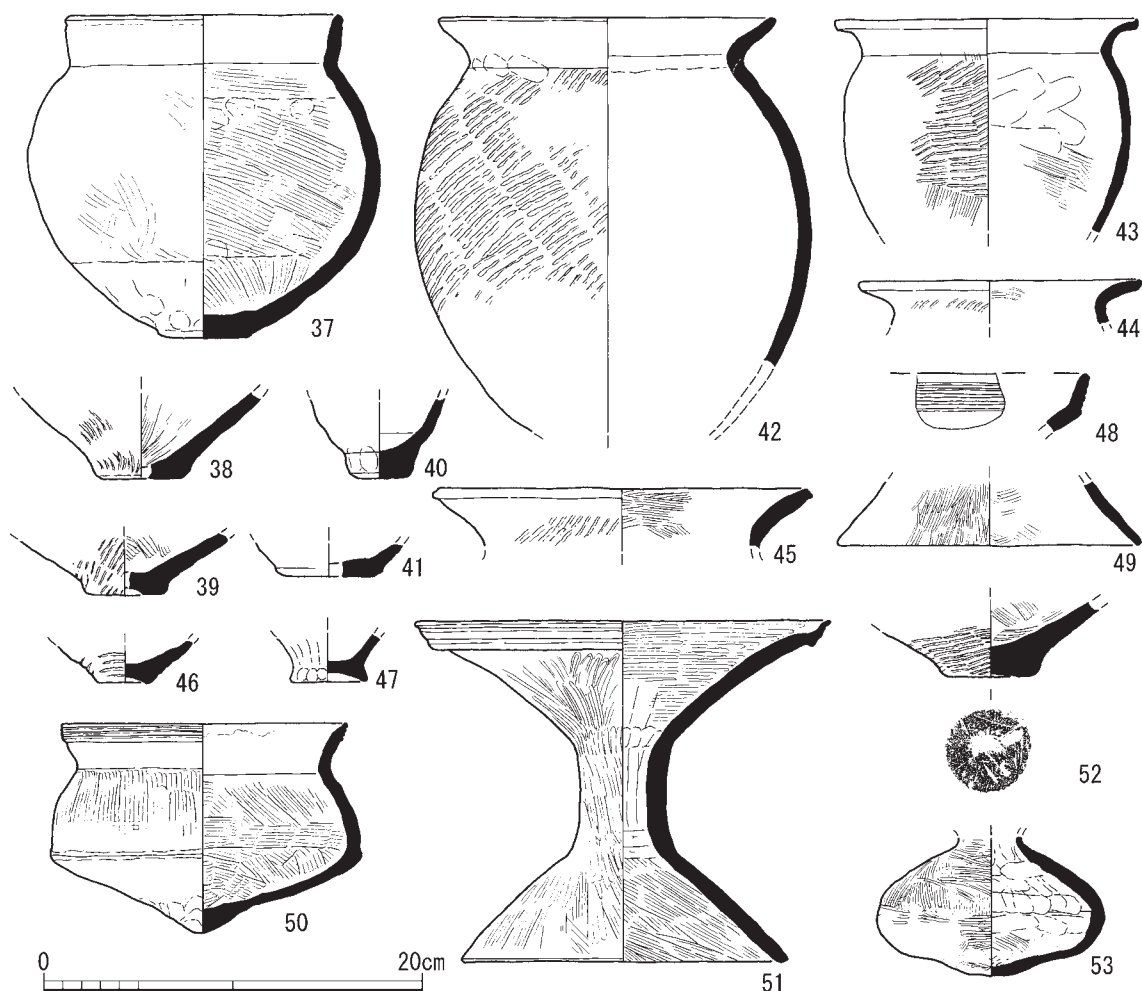


第63図 出土遺物実測図(2)





第64図 出土遺物実測図(3)



第65図 出土遺物実測図(4)

いたナデである。48は擬凹線文をもつ、有段口縁甕の口縁部である。口縁部外面に4条からなる多条沈線状の明瞭な擬凹線文を施す。断面の形状から、口縁部が均一な厚みを持ち、口縁部受部外面に、強いナデによる屈曲を認めないことから、細片資料ではあるが、北陸系甕の一部と推定する。46は窪み底を呈する弥生系タタキ甕の底部で、47は鉢あるいは甕の底部である。49はスカート状に広がる高杯脚部の一部である。50は口縁部に擬凹線文を施す鉢である。外面にハケ後一部ナデ、内面にハケ調整を施す。体部の下半で明瞭に屈曲し、底部はケズリ調整によって尖底に仕上げられている。ほぼ完形で出土したものだが、底部が尖底であり、単体で自立しない。同一遺構から器台は出土していないが、底部の形状から、本来、器台と組み合わせで用いられた鉢であることは明らかである。鉢体部の屈曲から、対応する器台の形状は、近江・東海系の脚と受部に明瞭な屈曲をもつタイプの器台と推定される。鉢は、明瞭な有段口縁をなすものではないが、内面が薄く仕上げられていることから、擬凹線文系土器の系譜にあるものとみられ、搬入土器と推定されるものである。対応する器台との関係から、擬凹線文系土器分布圏との接点となる湖西および湖北地域周縁に由来するものである可能性が高い。51はJ地区SH82を切る形で検出した土坑SK35から出土した。口縁部の擬凹線文を特徴とする北近畿系の器台である。擬凹線文が退

化し、細い胴部を呈することから、庄内併行期中段階に併行する資料とみられる。S K35は、J地区のS H82を切る形で検出していることから、この遺物は住居跡に伴う可能性が高い。52は、C地区柱穴S P153から出土した弥生系タキを施す壺の底部とみられる。底部外面に木葉痕が認められる。53は、D地区包含層から出土した。口縁部を欠損するが玉葱状の形状から細頸壺の体部とみられる。体部外面に細かなミガキを施す精製品である。

以上、詳述したA・C・D・J地区から出土した土器群には、帰属時期に大きな時期幅は認められず、いずれも古墳時代初頭の庄内併行期前半に帰属する資料と考えられる。

(高野陽子)

### (3)古墳時代後期(第66～68図)

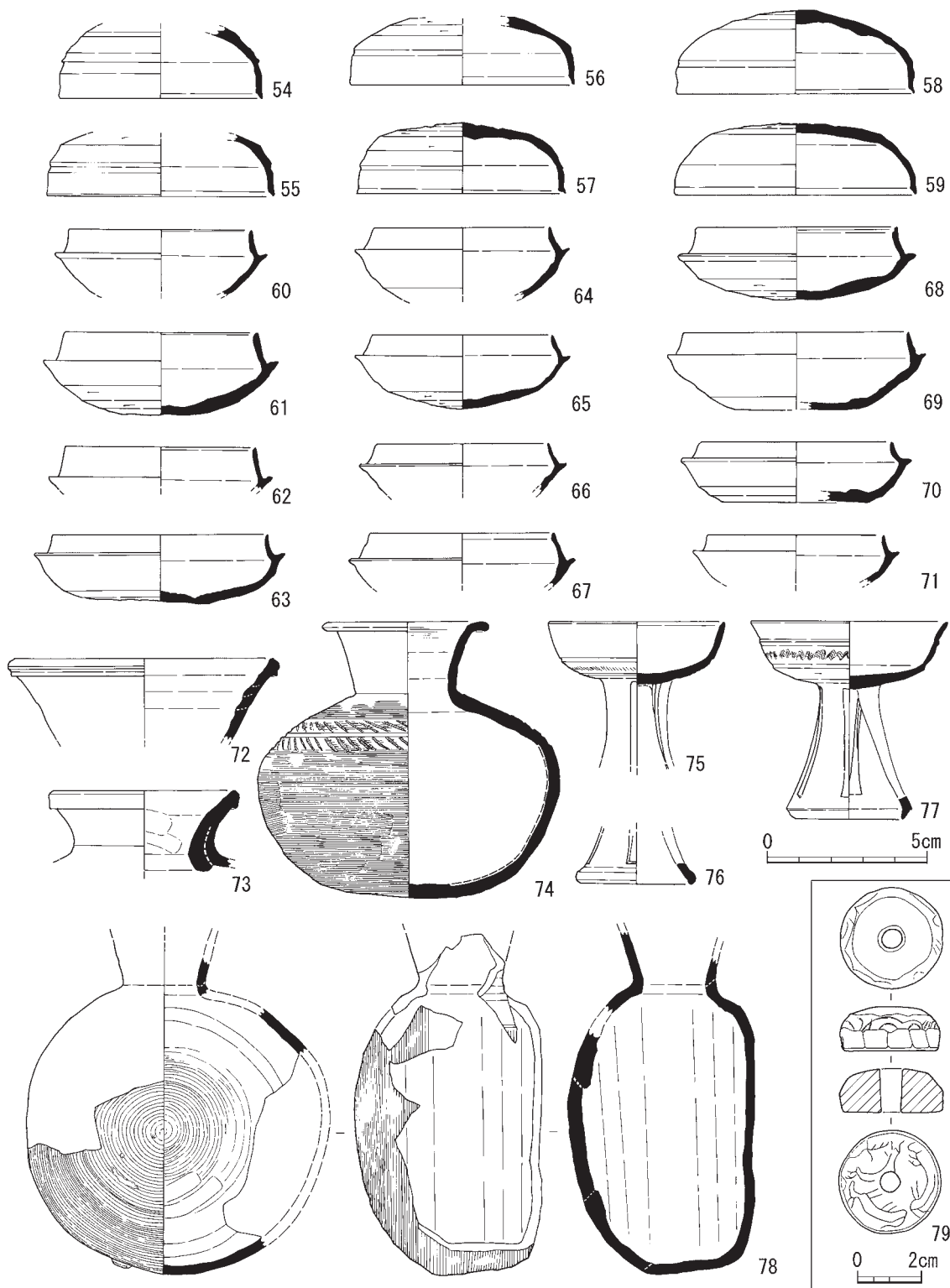
第66～68図に掲載したものは、主に古墳時代後期の遺構から出土した須恵器と石製品である。

57・62・67はA地区S H156から、56・63・72・86・87・101はC地区S H127から、73・75・77・78はC地区S H350から出土した。70・96・99・100はC地区S H351から、58・60・65・71・76・83・88・97・98はE地区S H101から、61・69・81・84・85・89はE地区S H102から、59・64・82・95はE・J地区S H103・79から出土した。90・91はB地区S K125から、92～94はC地区S K128から、74はC地区S K394から、54はA地区S D144から出土した。68はC地区S P185から、80はC地区S P457から、55はD地区S P482から、66はE地区S P18から、79はH地区包含層から出土した。

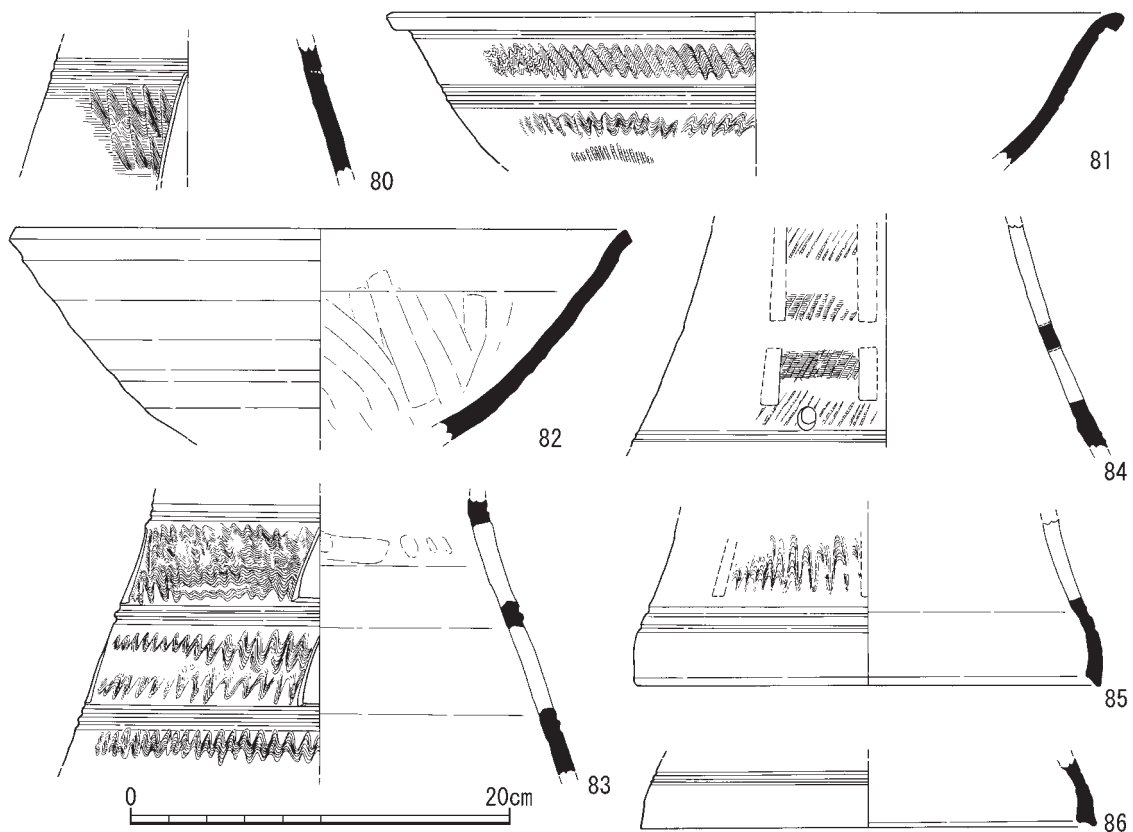
54～59は須恵器杯蓋である。54は天井部と口縁部との間の稜線が鋭く表現されている。陶邑編年TK47併行期のものである。55・56・58は外面の稜線が不明瞭ながらも表現され、口縁端部内面に段が認められる。TK10併行期のものとする。57は天井部と口縁部との境界の稜線が不明瞭ながらも表現され、口縁端部内面の段は明瞭である。MT15併行期のものとする。59は外面の天井部から口縁部にかけて丸く成形されており、口縁端部内面の段が認められる。TK10～43併行期のものとする。60～71は杯身である。61・62・68はたちあがりが高く直立気味に立ち上がり、口縁端部内面に段が認められる。MT15併行期のものとする。60・63～67・69～71は立ち上がりがやや短く内傾しており、口縁端部内面の段は不明瞭である。TK10併行期のものとする。72は甕の口縁で、逆「ハ」の字状を呈している。73・74は須恵器壺である。73は短く外反する口縁部で、74は底部がわずかに丸みを帯び、肩部が張る。体部下半は、カキ目を施す。75～77が須恵器高杯で、長脚一段スカシのものと推測される。75は杯部底面外面に列点文と沈線があり、口縁部へと移る。77は杯部の口縁と底部の間に段が付き外反する口縁を有している。78は須恵器提瓶で、体部の耳は欠損している。79は紡錘車で、側面下半は幅1cm程度で面取りがなされる。底面には、鹿の線刻が浅く施されていた。80～86は須恵器器台である。E地区の竪穴式住居跡内やC地区の竪穴式住居埋土中から出土した。これらの遺物から、付近に古墳が存在した可能性を示唆すると考えた。

87～94は土師器甕である。87・88は小型で、短い口縁部が直立気味に立ち上がる。89～93は小

型で、丸い体部に「く」の字状の頸部から口縁が外方に伸びるものである。94は長胴の体部に逆「ハ」字形の口縁がつく。95は土師器高杯で、杯部は半円状の体部で外方の横方向に引き出された口縁端部を有する。96~100は土師器壺で、96は丸い体部に短く直立気味の口縁がつく。97~100は球形の体部に、逆「ハ」の字状に外方に大きく開く口縁を有する。101は羽釜で、長胴の体



第66図 出土遺物実測図(5)



第67図 出土遺物実測図(6)

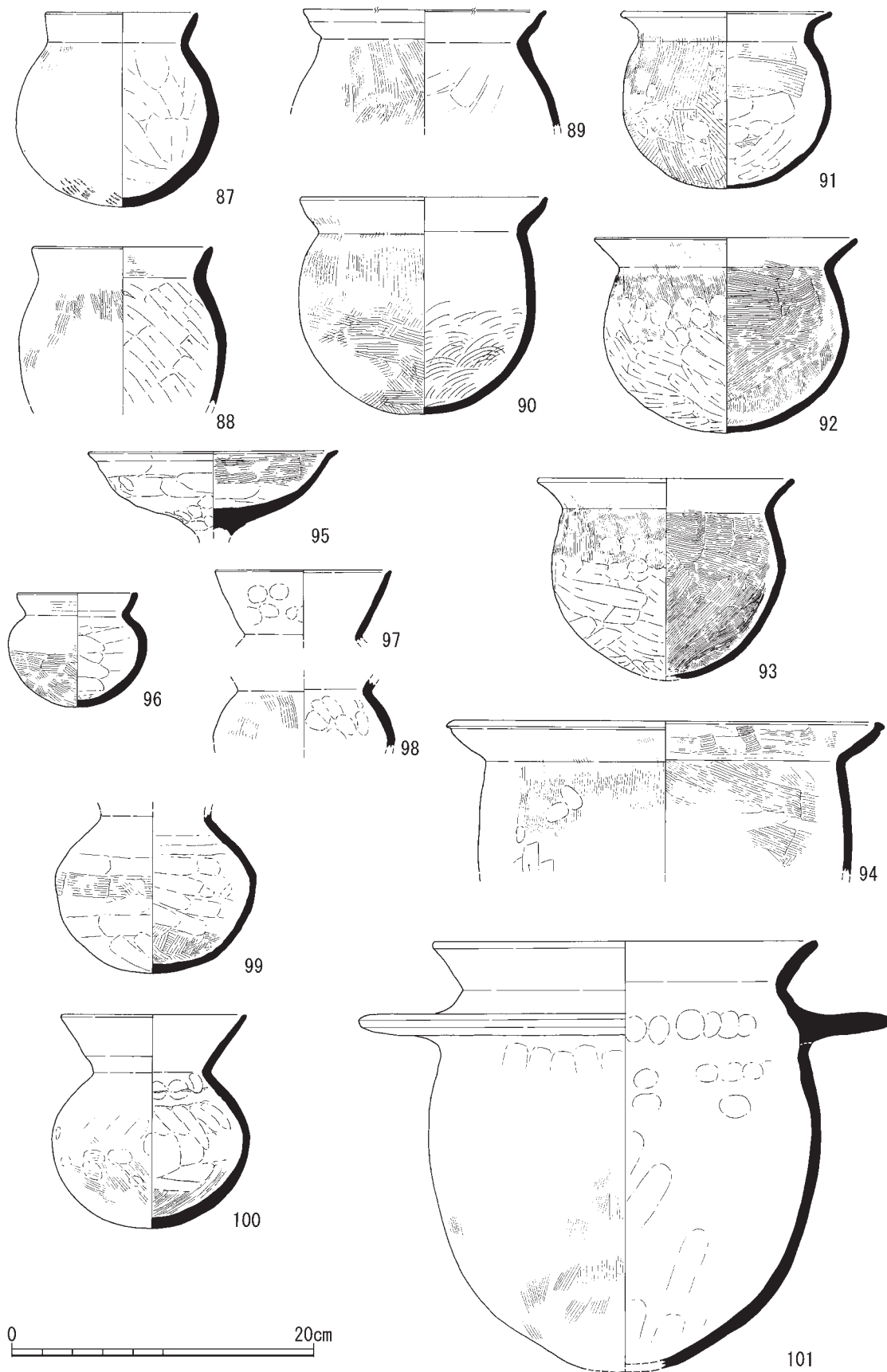
部に「く」の字状の口縁を有し、頸部下に鏝が巡る。C地区S H127の竈周辺および埋土から出土した。

(4) 奈良時代末～平安時代前期(第69～71図)

第69図には、須恵器と銭貨を掲載した。102～110・112・115～122・124はB地区S D79から、111・113はA地区S D132から、114はH地区包含層から、123はA地区S K143から出土した。第70・71図にはミニチュア土器や土馬、土師器を掲載した。125・127～138・144・145・147～159・161～164・167はB地区S D79から、146はA地区S D119から、126・139・140・143・160はA地区S D132から出土した。165はH地区S P84から、166はC地区S K336から出土した。141は鎌倉時代の遺構であるH地区S K44に混入していた。142は江戸時代の遺構であるC地区S D89に混入した遺物である。102は、皇朝十二銭の一種である萬年通寶(760年初鑄)である。

103～105は須恵器杯B蓋で、器高が低く、つまみが付けられた中央部分が下方にくぼむものである。106は皿、107・108・110は杯B、109は杯Aである。110の高台は杯底部に「ハ」の字形に貼り付けられている。111～113・115・116は壺Lで、球形を呈した体部に直立した頸部からやや外方に開く口縁がつくものである。奈良時代末から平安時代前期のものである。114は倒卵形の体部を呈し、回転糸切りの底部を有する。9世紀中葉頃のものである。117・118は壺Gである。119は須恵器壺Hで、肩部が張り、口縁部が外反しつつ上方に伸びる。底面糸切りである。120・121は須恵器壺A蓋である。122は須恵器壺Aで、球形の体部に短い口縁がつく。123は須恵器鉢で、



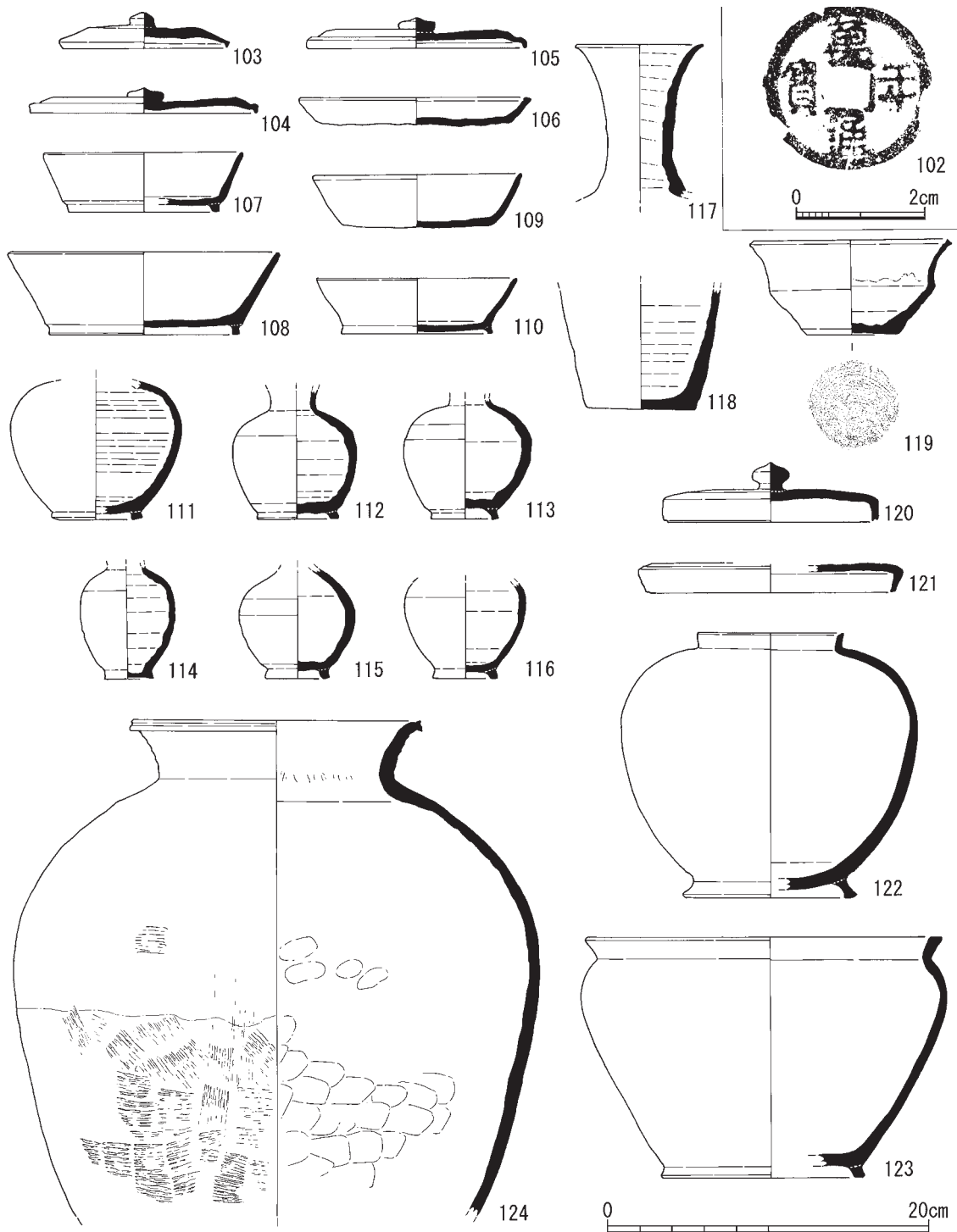


第68図 出土遺物実測図(7)

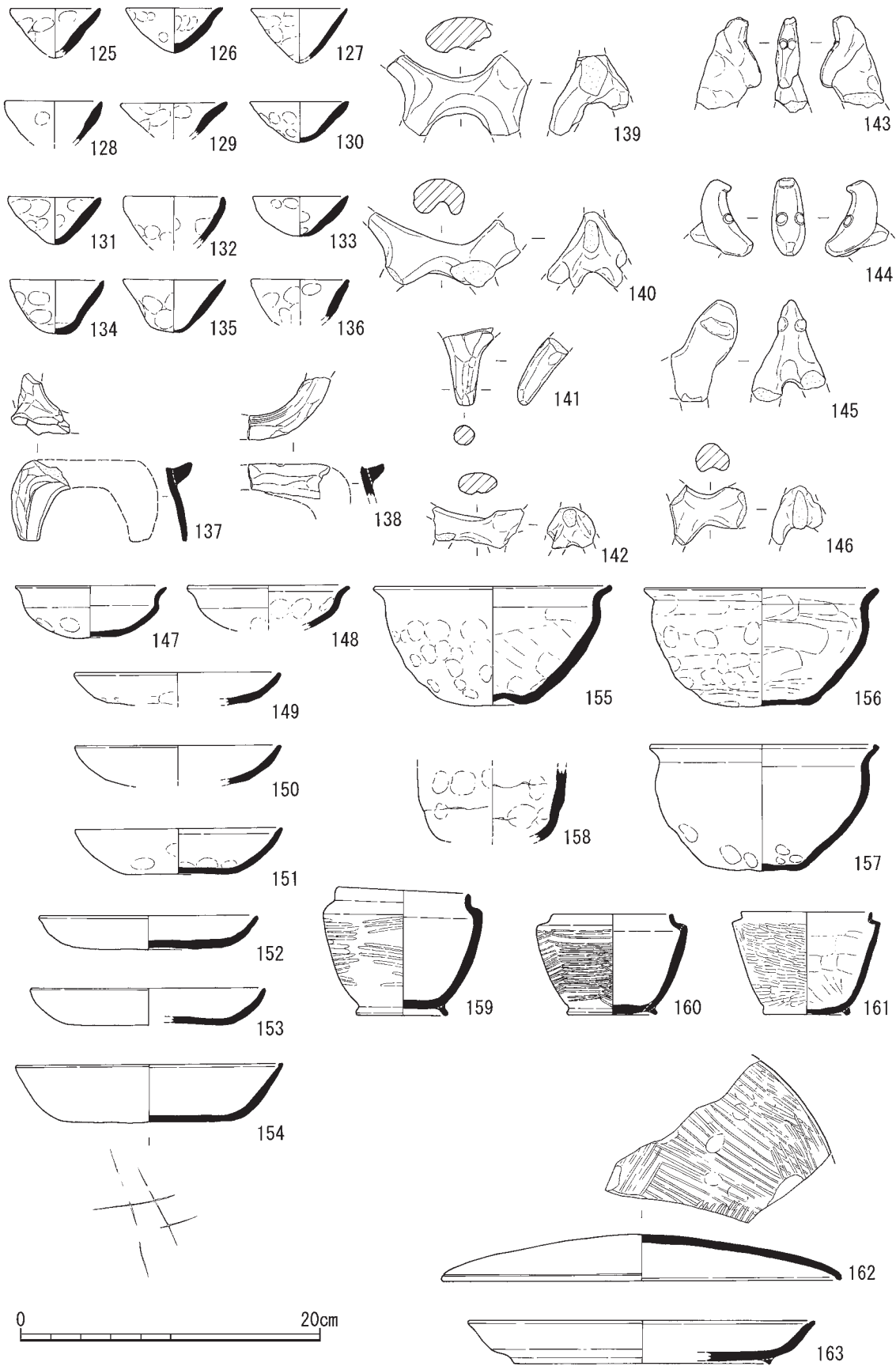


底部に高台を配し、丸い肩部に「く」の字状に屈曲した頸部から短い口縁部がつく。124は須恵器甕である。

125～136はミニチュア甌で、逆円錐をした形態である。底部は尖底のもの(125～127)、丸底のもの(130・131・133～135)がある。口縁部はやや内湾するもの、外湾するもの、直線状に終わるものがある。137・138はミニチュア竈で、焚き口部に底を有する。139～146は土馬で、頭部・体部・脚の破片が出土しており、全体が遺存するものはない。147・148は小型の土師器壺で、外反

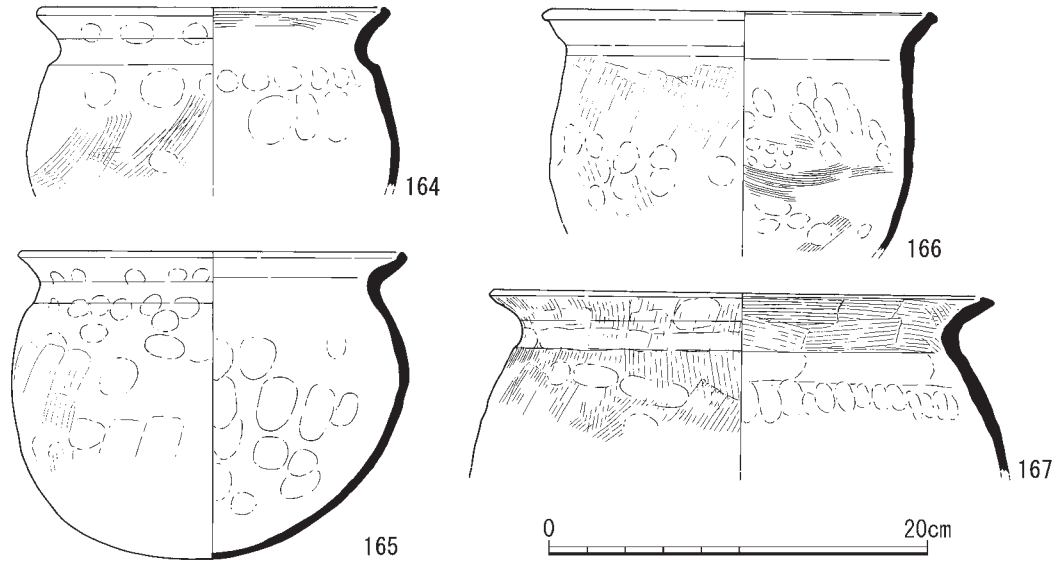


第69図 出土遺物実測図(8)

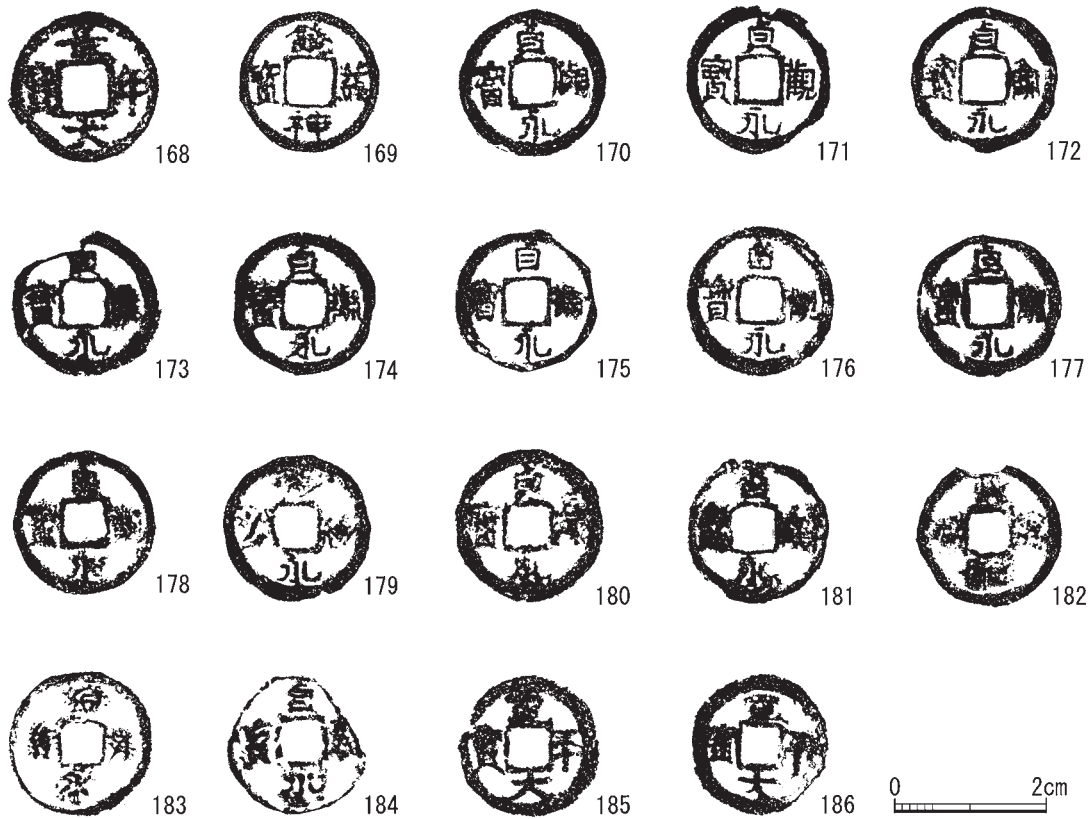


第70図 出土遺物実測図(9)

する短い口縁を有する。149・150・152・153は土師器皿で、149は底部付近をケズリで調整する。150・152・153はナデによる調整である。151・154は土師器杯で、ともにナデによる調整である。155～157は土師器壺Bである。丸い胴部に頸部がしまって肩が張り、口縁部が短く外反して立ち上がる。158は製塩土器である。159～161は土師器壺Eで、肩部が内側に屈曲し、短く立ち上が



第71図 出土遺物実測図(10)



第72図 出土遺物実測図(11)

る口縁部を有する。外面は丁寧に横方向にミガキを施している。163は土師器皿Bである。内外面ともにナデで仕上げられている。162は蓋で外面にヘラミガキ調整がなされている。164～167は土師器甕で、丸い体部に「く」の字状に屈曲する頸部から短く外方に伸びる口縁部を有し、口縁端部は内側に肥厚する。

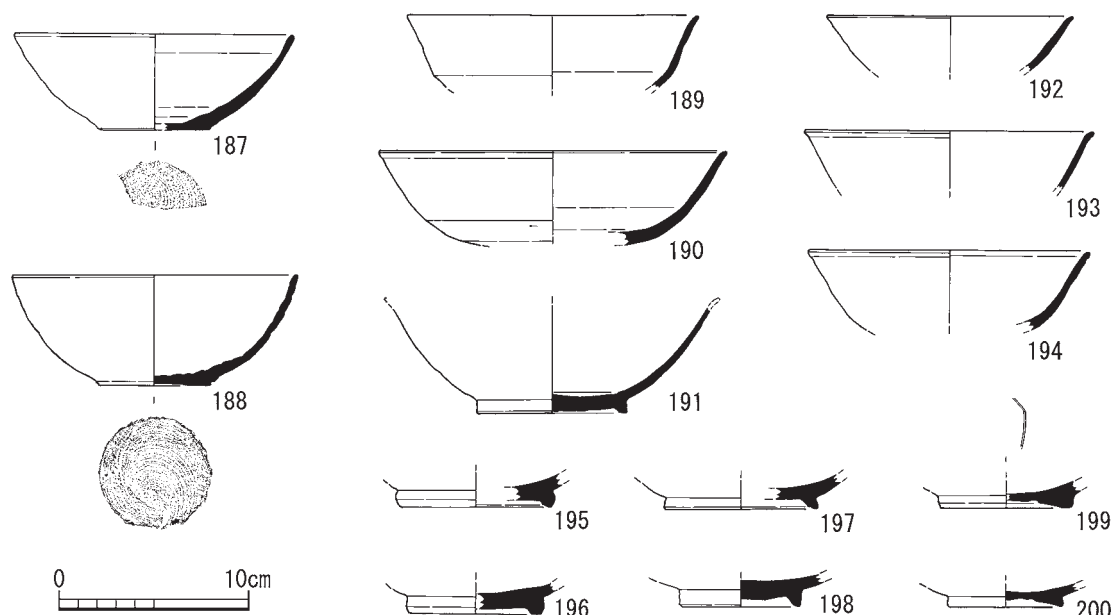
第72図は皇朝十二銭である。168は長年大豊(848年初鑄)で、H地区の精査中に出土した。169は饒益神寶(859年初鑄)で、H地区S X46から出土した。170～184は貞観永寶(870年初鑄)で、H地区S X46から出土した。185・186は寛平大寶(890年初鑄)である。185はH地区S X46から、186はH地区の精査中に出土した。

(5)平安時代後期(第73図)

187・193・197・199は、江戸時代の溝であるH地区S D21内から出土した。188は方形区画に伴う土橋S X133内埋土中から、192・198は堀S D111から出土した。いずれも混入遺物である。189はB地区S K126から、190はH地区S P94から、191はH地区S K53から、195はH地区S K44から出土した。196はS X27から、194はC地区S P467から、200はC地区S P189から出土した。

187・188は須恵器椀で底部糸切りである。亀岡市篠窯跡群の西長尾3号窯に併行し、10世紀前後のものである。189は緑釉陶器で、体部に稜線が認められる。190は無釉陶器の椀である。191～196は無釉陶器の椀で、器壁にミガキが施されている。197・199は緑釉陶器の底部である。197は削り出し高台で、見込みにトチンの痕跡がある。199は蛇の目高台である。198は無釉陶器の椀である。200は無釉陶器で、蛇の目高台である。

この時期の遺構は検出しなかったが、下海印寺遺跡ではこの時期の土器が出土しており、一般的な集落とは性格の異なる施設が存在した可能性が指摘されている。今回の調査で検出した平安時代末期の屋敷が出現する基盤になった可能性が考えられる。



第73図 出土遺物実測図(12)

## (6)平安時代末期～鎌倉時代(第74～77図)

201はC地区S D111から、202はJ地区S D50から、203・204は江戸時代の遺構の攪乱内から出土した。205・206・248はE地区S K34から、207・208はE地区S P06から、209はC地区S D111から、210はH地区S D50から、211はE地区S P51から、212はH地区S K44から出土した。

213～216・218～223・232・237・238・247はC地区S D111から、217はC地区土橋S X133内埋土中から、224は方形区画の南西コーナー部であるS D111とS D266の合流地点から出土した。226～231・234～236・249はH地区S D50から、233はH地区S K44から出土した。225・242はE地区S P01から、239はE地区S P08から、240はE地区S P110から、241はE地区S P07からの出土である。243はE地区S P03から、244はE地区S P92から、245はE地区S P80から、246はH地区S P64から出土した。

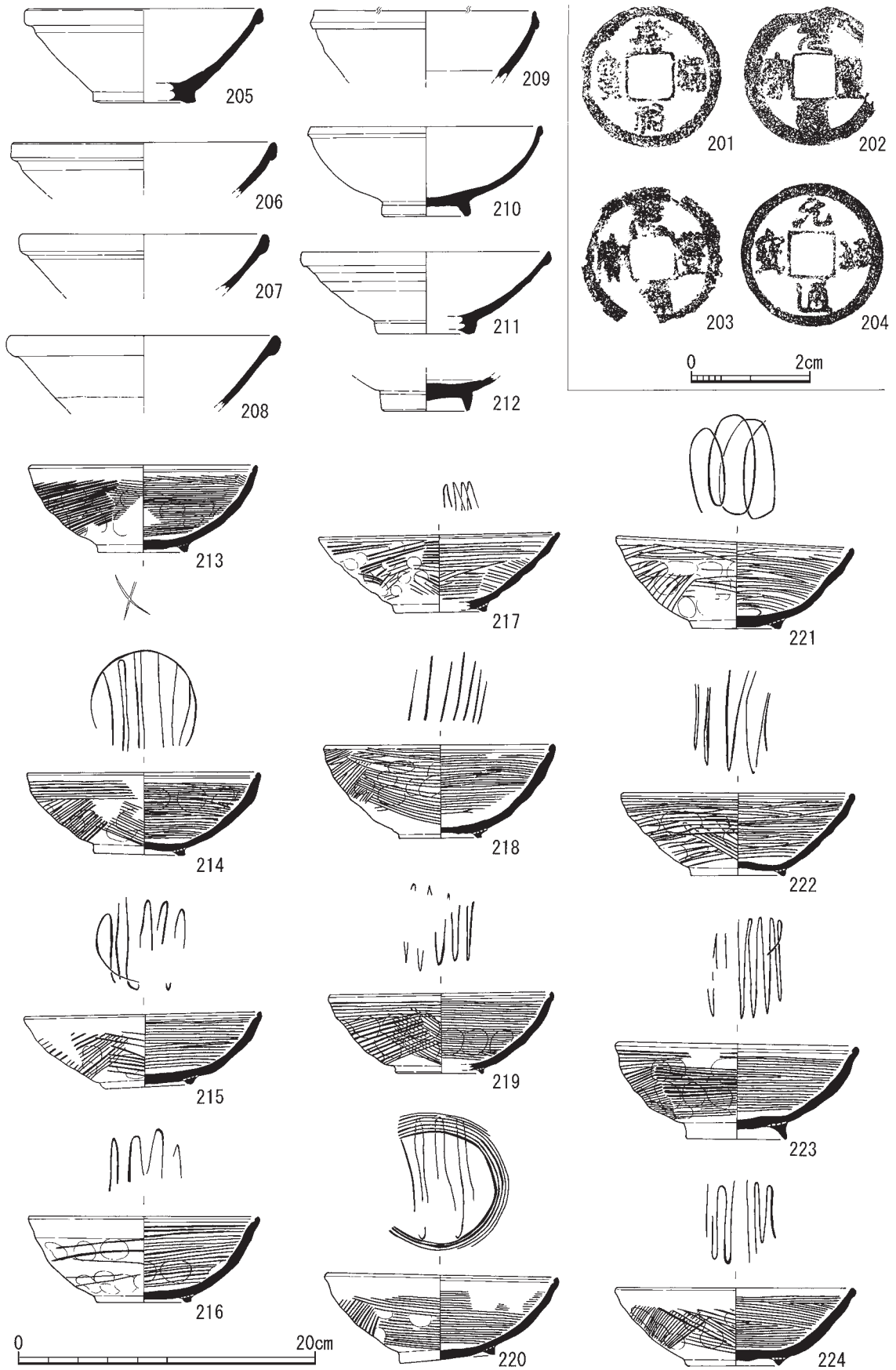
250～256・258・286～289・291はC地区S D111から、257はH地区S D50から、259・281・290は土橋S X133から出土した。260～263・282はE地区S P01から、264はE地区S P08から、265・266・283はE地区S P33から、267・268はE地区S P40からの出土である。269はE地区S P52から、270はE地区S P53から、271・272はE地区S P79から、273はE地区S P91から、274～280はH地区S K44から、284はE地区S P38から、285はE地区S P35から出土した。

201～204は北宋銭で、201が嘉祐通寶(1056年初鑄)、202・203は元豊通寶(1078年初鑄)、204が元祐通寶(1086年初鑄)である。

205～212は白磁碗である。体部が直線的に立ち上がり口縁部が大きく三角形に肥厚するもの(205～209・211)と、内湾しながら立ち上がり口縁部が小さく三角状に肥厚するもの(210)がある。210は他のものよりも古く11世紀後半と考える。

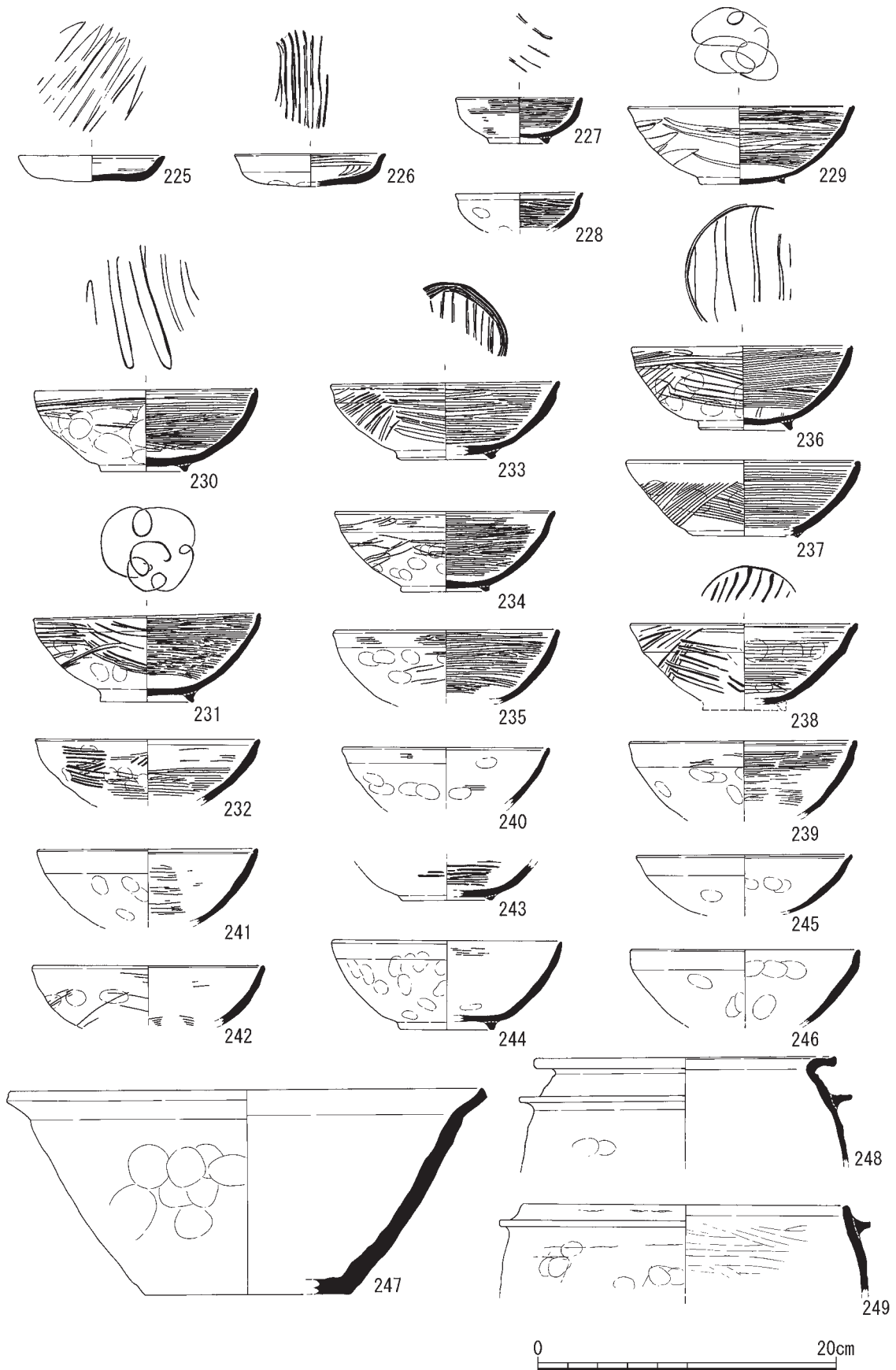
213～246は瓦器で、225・226は皿、227・228は小椀で、他は椀である。椀は、その大半が楠葉型のもので、わずかに大和型(229・236)と和泉型(224・231)が存在する。その比率は、おおむね両型で1%前後とみられる。221は見込み内に連続長楕円状のミガキが、229・231は連結輪状の暗文が施されているのに対して、大多数のものは見込み内にジグザグ暗文を施している。213～224は体部のミガキは密になされており、外面においては高台貼り付け付近までミガキを施す。高台は断面三角形のしっかりとしたもので、11世紀末～12世紀初頭にかけてのものとする。体部外面のミガキを高台貼り付け上方まで施す232・239は12世紀中葉のものと思われ、229は体部外面のミガキが希薄になることから12世紀後半のものと考えられる。245は口径が小さく、器高も低いことから、やや時期が下り、12世紀後葉～13世紀前葉のものとする。213～224や232が、方形に区画された屋敷地関連遺構から出土したことから、この屋敷地は11世紀末～12世紀中葉にかけて存続したものとする。247は瓦質の鉢である。248・249は瓦質の羽釜である。

250～291は土師器皿で、286～291は脚付きのものである。皿には小型のものとして大型のものがある。小型のもの形態は、コースター形を呈するもの(250)、「て」の字状口縁(251～254・258・259)を有するもの、口縁端部下を強くナデて外反するもの(255・256・260～264・266～280)がある。大型のものには、逆「ハ」字状に大きく外反するもの(281)、口縁下を強くなでて端部が外

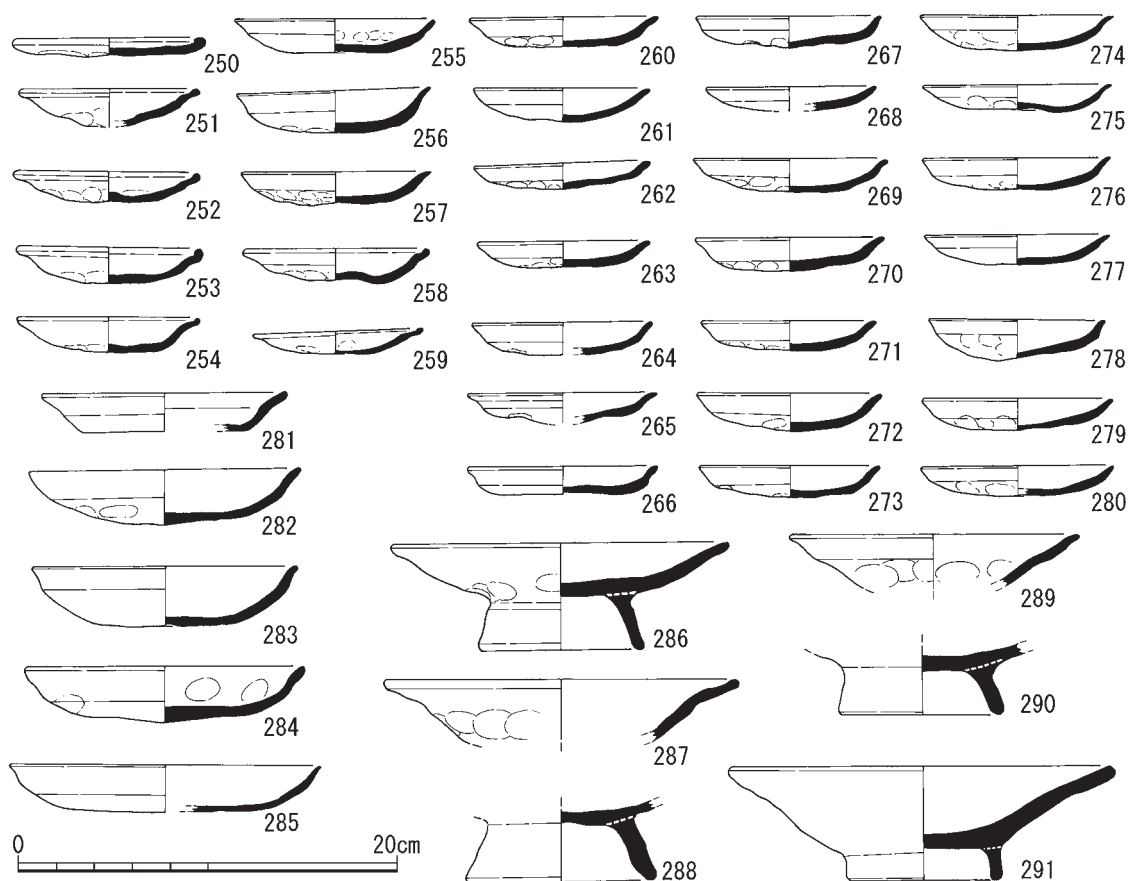


第74図 出土遺物実測図(13)





第75図 出土遺物実測図(14)



第76図 出土遺物実測図(15)

反するもの(282~285)がある。252は11世紀後半~12世紀初頭のものである。台付皿が多く出土した点は、11世紀後半頃の特徴の一つと考える。

292~299は瓦で、292・293はH地区東部の包含層から、294・295はH地区S D50から出土した。296は平瓦で、A地区S D132から出土した。297は丸瓦でJ地区S D50から、298は丸瓦でH地区S D50から、299は丸瓦でH地区S D50から出土した。

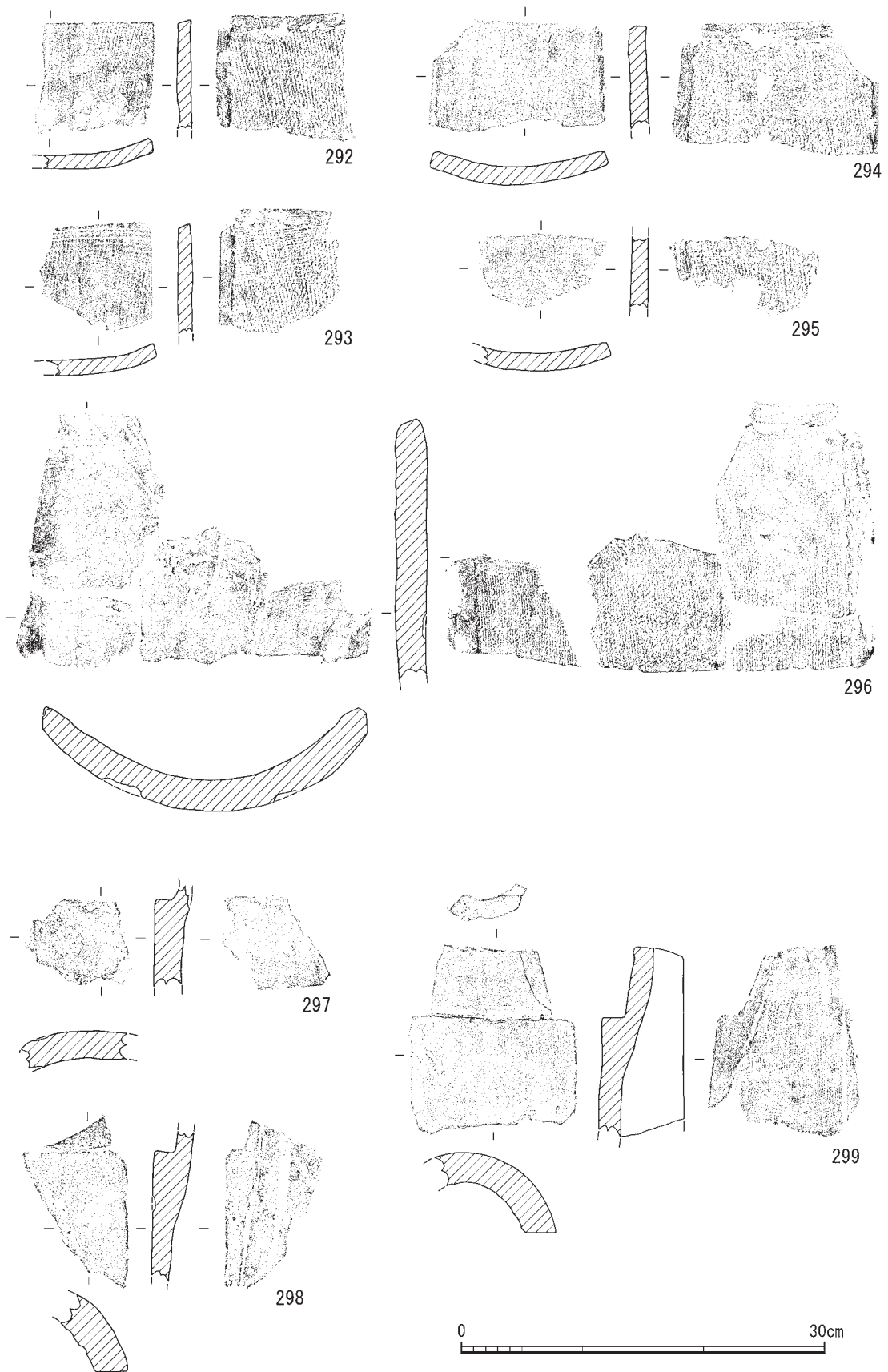
(岩松 保・岡崎研一)

### (7)江戸時代(第78~83図)

溝S D89上層からは、中世後半期から近世にかけての陶磁器や銭貨などが多数出土したが、多くを占めるのは近世陶磁器である。陶磁器類では、国産の製品が多い。さらに、中国や朝鮮王朝産の輸入陶磁器がわずかに含まれる。国産のものとしては、江戸時代の肥前陶磁器類(唐津・伊万里)が多数を占める。ほかに、瀬戸美濃や京都・信楽・丹波などの製品が含まれる。

#### a.陶磁器

301は中国製の青磁碗で、見込みに円刻がある。高台径5.2cmを測る。302・303は瀬戸美濃焼の天目碗で体部は丸味をもつ。16世紀後半頃の製品とみられる。302は口径11.6cm、器高6.1cm、高台径4.5cmを測る。304は瀬戸美濃焼の天目碗で、体部と口縁部が明瞭に屈曲し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。17世紀前半頃の製品とみられる。330・331は京焼の色絵碗で、330には内面に金彩がみとめられる。17世紀頃の製品とみられる。



第77図 出土遺物実測図(16)

305～314は肥前陶器(唐津)の椀である。305・306は、刷毛目椀で、内外面に白土を刷毛塗りする。17世紀後半頃の製品である。305は口径10.8cm、器高4.8cm、高台径4.1cmを測る。307は、17世紀後半頃の製品である。308～313は、見込みに呉須で山水文を描く。胎土は精良である。いわゆる、京焼風肥前陶器である。高台内に「小松吉」(308)、「木下弥」(309)、「森」(310)、「清水」(311・312)、「新」(313)の刻印を押す。17世紀後半頃の製品である。314は丸椀で、青釉を施す。口径10.2cm、器高6.0cm、高台径4.7cmを測る。

315～329は肥前磁器(伊万里)の椀である。315は梅樹文染付椀で、器胎は薄手であり、文様は比較的丁寧な描かれる。17世紀後半頃の製品とみられる。口径10.0cm、器高5.8cmを測る。316は菊花文染付椀である。器胎は薄手で、施文も丁寧である。京都からの注成品で、18世紀頃の製品とみられる。口径10.3cm、器高5.8cm、高台径4.8cmを測る。317は網目文染付椀で、内面見込みに菊花文、周囲に網目文を描く。外面には二本描きの二重網目文を施す。高台内には渦福文を描く。18世紀頃の製品とみられる。口径9.8cm、器高5.2cm、高台径4.2cmを測る。318～322は草花文染付椀である。器胎は厚手で、いわゆる「くらわんか」椀である。18世紀頃の製品とみられる。320は口径10.3cm、器高5.7cm、高台径4.1cmを測る。325・326・327は染付椀で、草花文や松竹梅文を描く。器胎は厚手で、いわゆる「くらわんか」椀である。323・324はコンニャク印版の染付椀で、323は笹文を、324は花文を施す。器胎は厚手で、いわゆる「くらわんか」椀である。18世紀頃の製品とみられる。324は口径10.1cm、器高5.3cm、高台径4.3cmを測る。328は手描きとコンニャク印版併用の染付椀で、草花文を手描きし、松樹文をコンニャク印版で施す。18世紀頃の製品とみられる。口径10.5cm、器高5.6cm、高台径5.2cmを測る。329は赤絵椀で、染付に赤釉で花文を上絵付けする。見込みは無釉であり、鉄釉で菊花文を描く。なお、このような上絵付けが、生産地でおこなわれたものか、消費地で施されたかは不明である。底部が厚手であり、「くらわんか」椀に属するものと考えられる。18世紀頃の製品とみられる。口径12.1cm、器高5.5cm、高台径4.3cmを測る。

300は中国製の青花磁器皿である。16世紀前半頃の製品とみられる。高台径7.2cmを測る。334は瀬戸美濃焼の黄瀬戸丸皿である。口径8.6cm、器高1.4cm、高台径5.6cmを測る。335は瀬戸美濃焼の灰釉折縁菊皿である。口径10.9cm、器高2.2cm、高台径5.8cmを測る。この2点は16世紀後半頃の製品とみられる。

336～340は肥前陶器の皿である。336・337は灰釉段皿である。見込みに砂目の目痕が残る。17世紀初頭頃の製品とみられる。336は口径12.8cm、器高3.1cm、高台径5.0cmを測る。338・339・340は見込みには蛇の目状の無釉部分があり、重ね焼きの痕跡が残る。338・339は部分的に銅緑釉を垂らしこむ。17世紀後半の製品とみられる。338は口径13.2cm、器高4.2cm、高台径5.0cmを測る。

341～349は肥前磁器の染付皿である。341は内面に獅子文とみられる動物文を描く。中国製の古染付などを真似たものか。口径13.8cm、器高3.1cm、高台径5.6cmを測る。344もやや稚拙であるが同文であり、あるいは一組のものか。342・343は花卉文を描く。345は鳥文を描き、口縁端

部に鉄釉を施す。口径13.2cm・器高2.9cm・高台径6.0cmを測る。347は段皿で、吹墨技法で施文する。346は見込みが蛇の目状の無釉で、重ね焼きの痕跡が残る。外面高台際も無釉である。以上7点は、17世紀前半頃の製品である。348・349は見込み中央にコンニャク印版で五弁花文を施し、周辺部に草花文を描く。器胎は厚手である。18世紀の製品である。348は口径12.9cm・器高3.5cm・高台径7.7cmを測る。

350は肥前磁器の青磁段皿である。内面に蛇の目状の無釉部分があり、重ね焼きの痕跡が残る。外面高台際は無釉である。17世紀前半から中葉頃の製品とみられる。351は肥前磁器の折縁青磁鉢で、口縁部に穿孔がある。17世紀の製品とみられる。

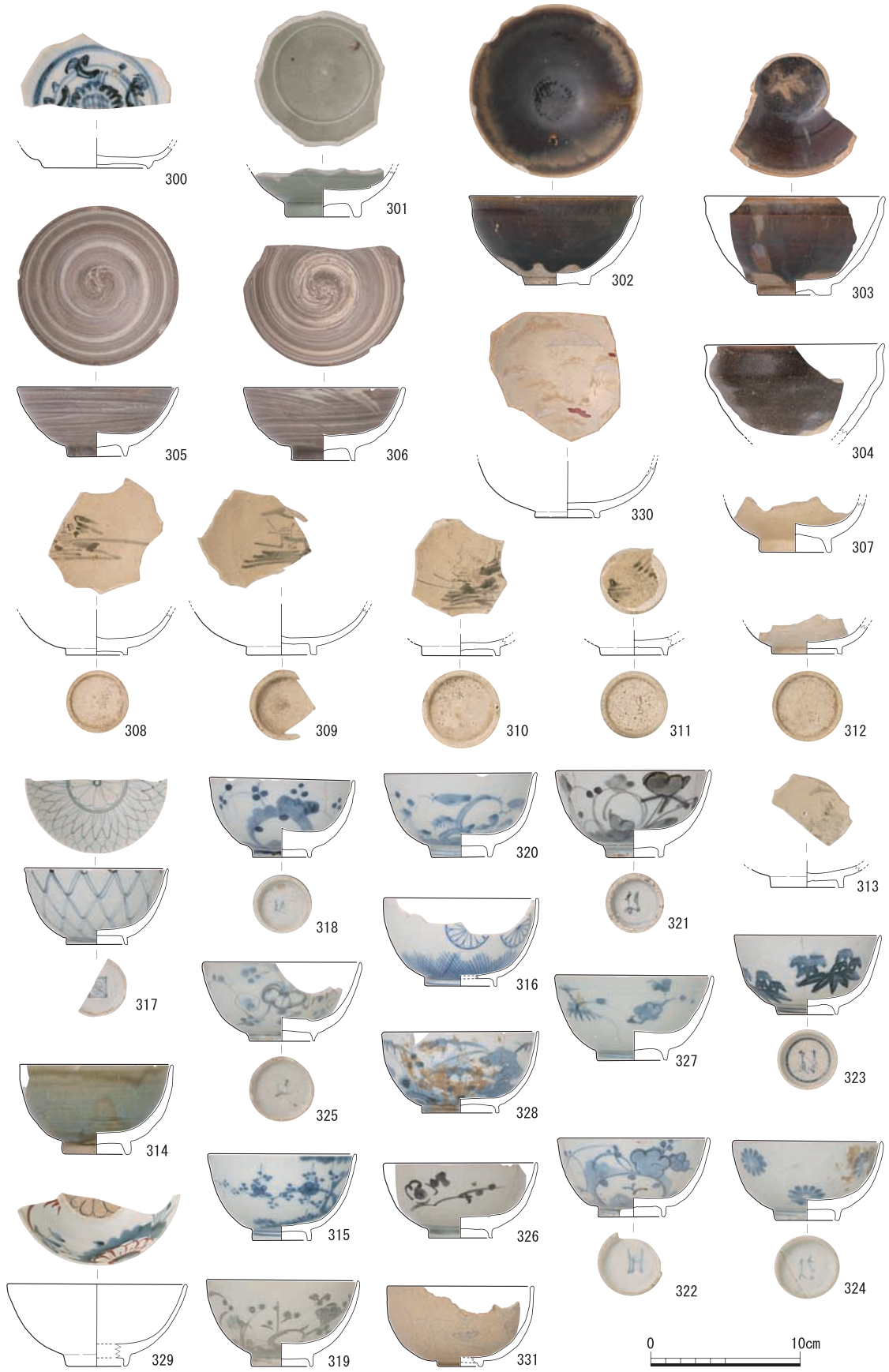
352は朝鮮王朝の半磁胎の白磁皿である。内面には砂目の目痕が残る。内面周縁部には黒土を象嵌して施文する。高台径6.0cmを測る。17世紀の製品とみられる。

361は肥前磁器の卸目皿である。高台は幅広の蛇の目状である。17世紀の製品とみられる。362は肥前磁器の染付大皿である。菊水文を描く。17世紀前半頃の製品とみられる。363は肥前磁器の青磁皿である。17世紀の製品とみられる。364は肥前陶器の蓮葉形皿である。内面に呉須で薄く葉脈を描く。高台内に「柴」の刻印を押す。胎土は精良で、高台は高い。京焼風肥前陶器である。17世紀後半頃の製品とみられる。365は肥前陶器の三島鉢である。内面に印花文を施し、見込みに9か所の砂目の目痕がある。口径28.5cm、器高9.2cm、高台径11.1cmを測る。17世紀後半頃の製品である。366は肥前磁器の染付鉢である。見込みに蛇の目状の無釉部分があり、重ね焼きの痕跡が残る。口径20.7cm、器高6.2cm、高台径8.0cmを測る。367は瀬戸焼の深鉢である。見込みに菊花文を押印する。18世紀後半以降の製品とみられる。368は信楽焼の壺である。胎土に長石粒が多く含まれる。器高16.9cmを測る。369は肥前磁器の染付瓶である。17世紀後半以降の製品か。

353～359は土師器皿である。口縁部に煤が付着するものがあり、燈明皿として使用されたものもある。358・359は、内面の底部と口縁部の境に沈線をもつ。358は口径10.8cm、器高1.7cmを測る。17世紀のものともみられる。332・333は施釉土師器皿である。口縁端部に燈芯置きを付する。358・359と同様、内面の底部と口縁部の境に沈線を持つ。360は陶器製の燈明皿である。口径6.5cm、器高1.2cmを測る。

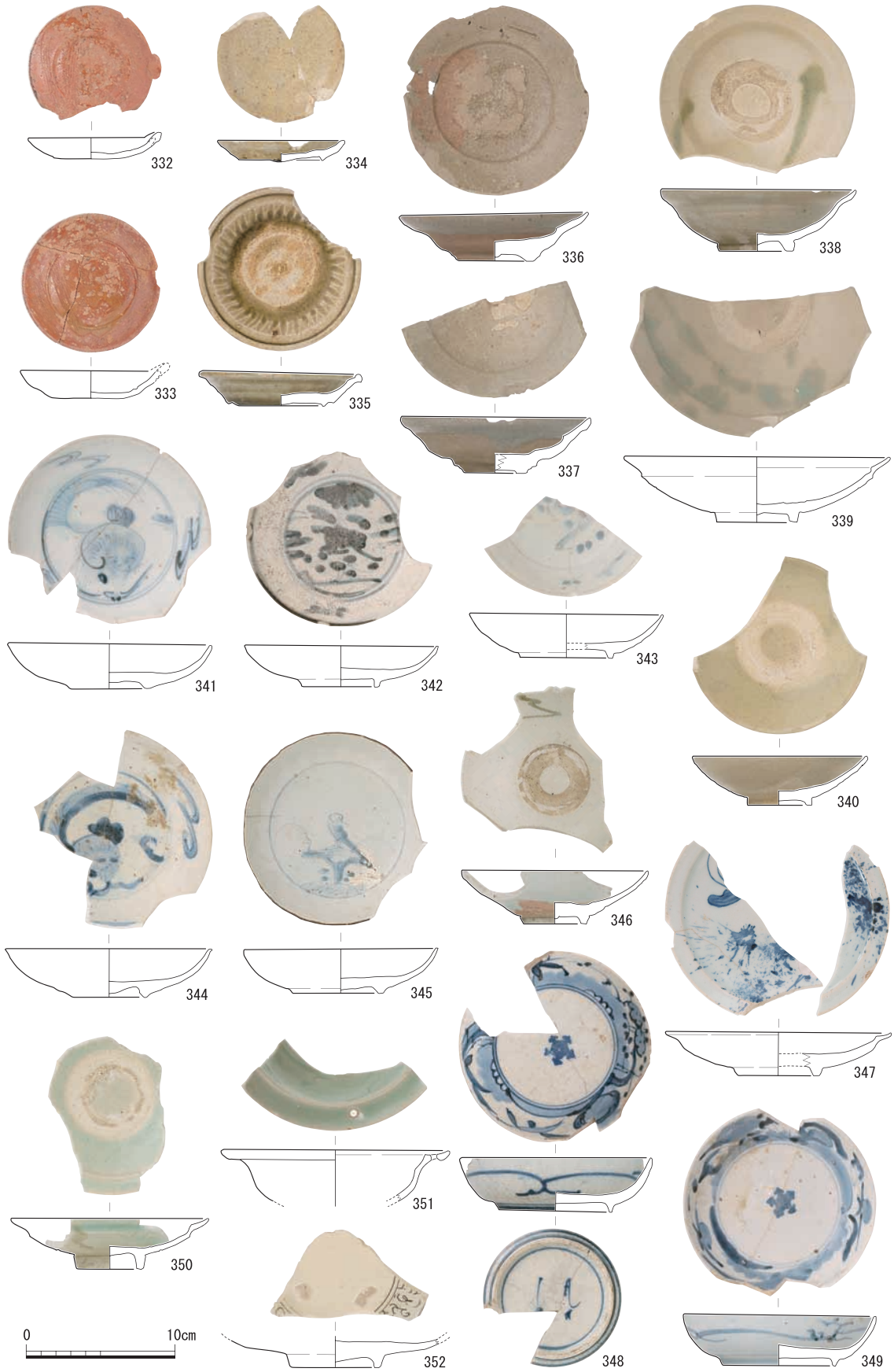
370～377は肥前磁器の仏飯器である。377は口径8.5cm、器高6.3cm、高台径4.9cmを測る。17世紀後半から18世紀にかけての製品とみられる。378は肥前磁器の染付小瓶である。簡略な草花文を描く。17世紀中葉から後半頃にかけての製品とみられる。379は瀬戸美濃焼の茶入である。鉄釉を施し、下部は無釉である。高台は糸切りである。17世紀頃の製品か。高台径4.6cmを測る。380は肥前磁器の染付小椀で、口縁部に雨降文を描く。18世紀後半頃の製品か。口径8.3cm、器高4.6cm・高台径3.8cmを測る。381は肥前陶器の小椀で、鉄釉を施す。口径6.8cm、器高3.6cm、高台径3.6cmを測る。382は肥前磁器の筒型椀である。外面に青磁釉を施し、内面は白磁である。18世紀後半頃の製品とみられる。386・387は京焼の椀である。鉄釉などで蔓草文や垣文を描く。386は口径11.1cm、器高5.9cm、高台径4.2cmを測る。





第78図 出土遺物実測図(17)

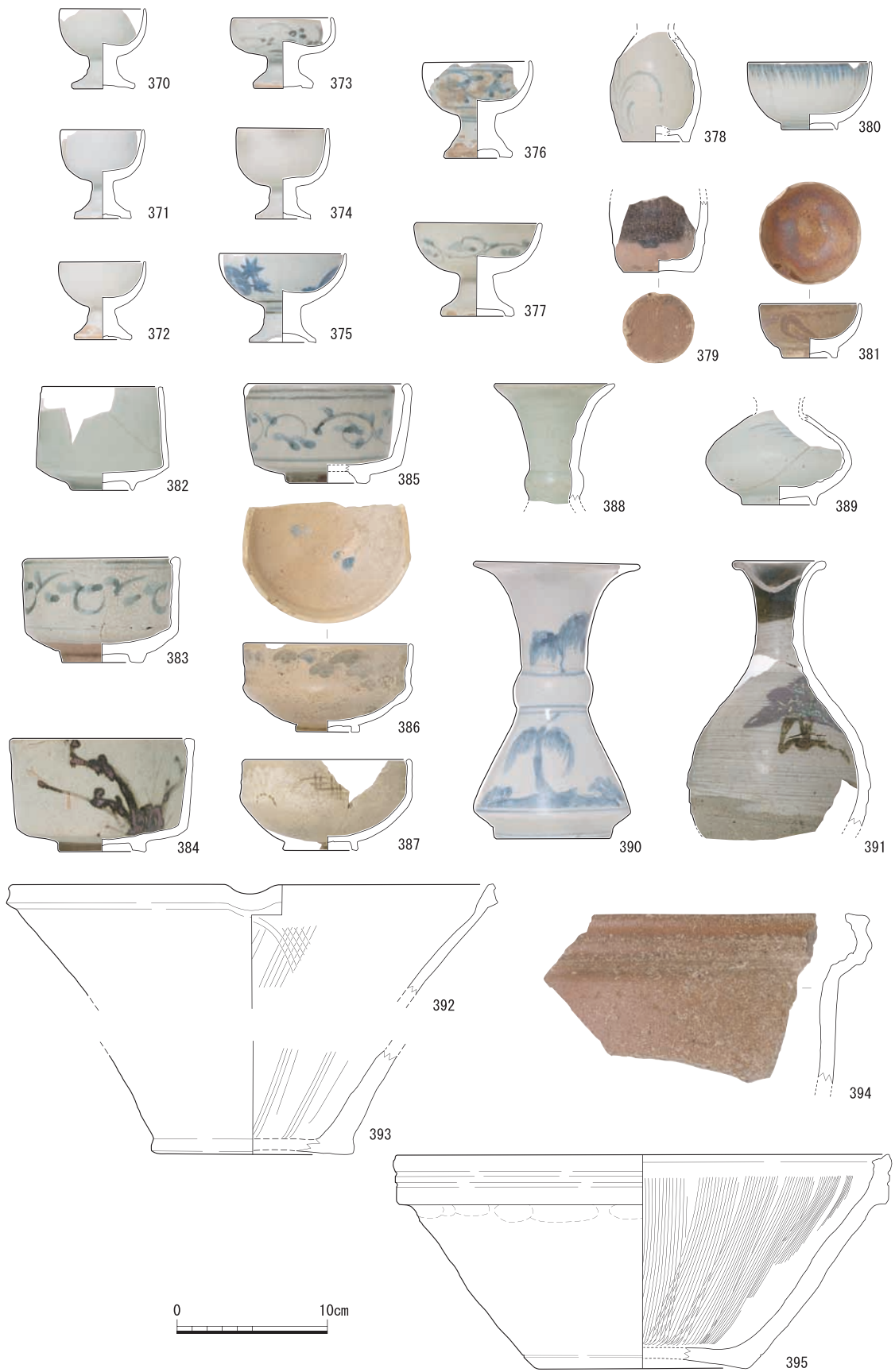




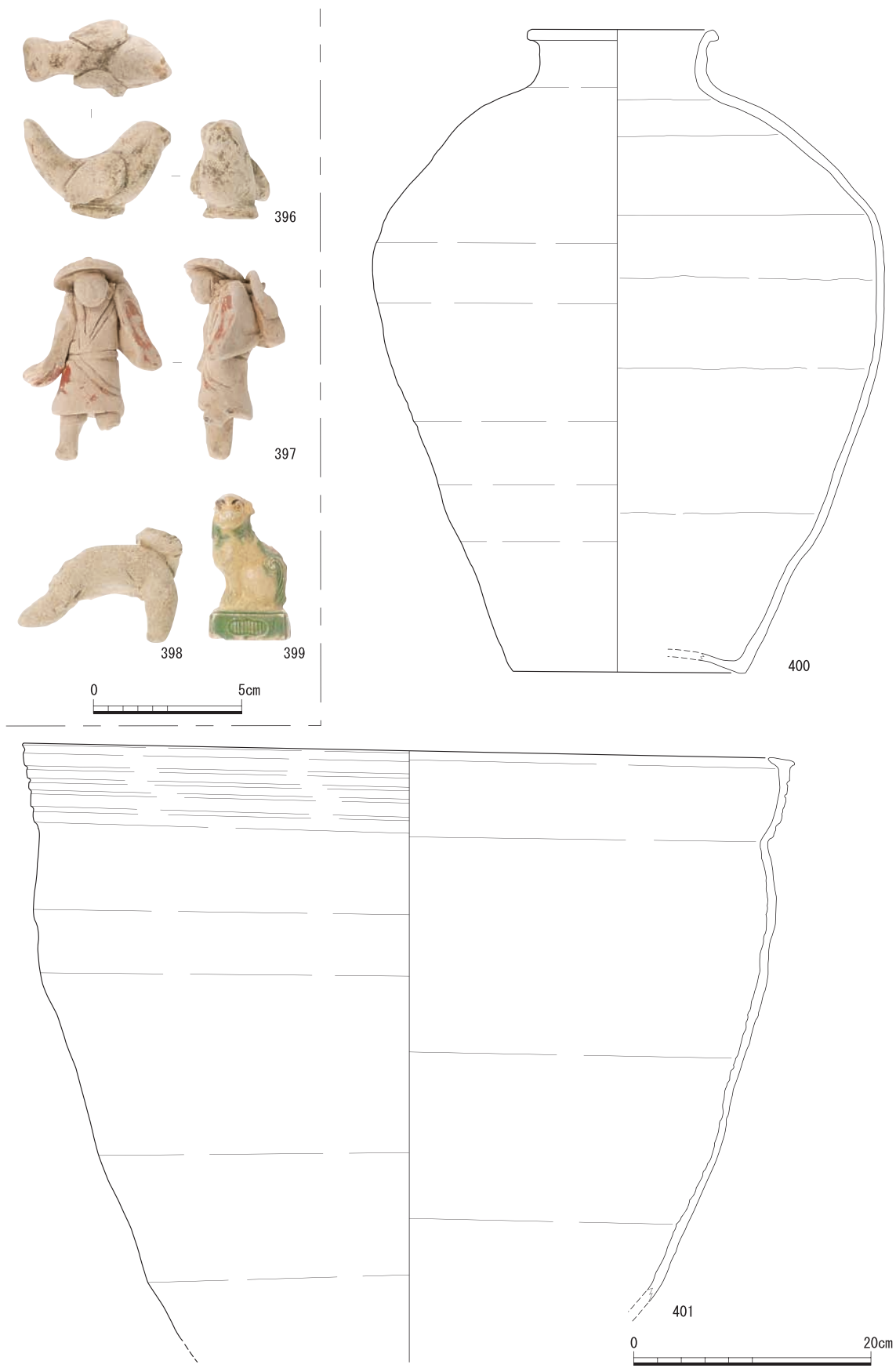
第79図 出土遺物実測図(18)



第80図 出土遺物実測図(19)



第81図 出土遺物実測図(20)



第82図 出土遺物実測図(21)



383～385は肥前陶器の香炉である。呉須や鉄釉で唐草文や梅樹文を描く。内面は無釉である。17世紀後半頃の製品か。383は口径9.8cm、器高6.9cm、高台径5.3cmを測る。390は肥前磁器の染付花瓶で、胴部と頸部の境が帯状に膨らむ形態である。17世紀末から18世紀前半頃の製品とみられる。口径11.0cm、器高18.5cm、高台径7.6cmを測る。388は肥前磁器の青磁花瓶で、390と同様の形態である。389は肥前磁器の染付瓶で、油壺形である。18世紀頃の製品とみられる。391は肥前陶器で白土を刷毛塗りした後、鉄釉や銅緑釉で松文を描く。17世紀後半以降の製品とみられる。

392は丹波焼の播鉢である。内面に粗い櫛描きの播目を施す。393は信楽焼の播鉢である。これら2点は17世紀の製品とみられる。395は堺播鉢で、密な播目を施す。18世紀の製品とみられる。394は信楽焼の深鉢とみられる。400は丹波焼の壺である。17世紀の製品か。口径15.3cm、器高54.1cm・高台径19.5cmを測る。401は丹波焼の甕である。口径61.0cmを測る。396～399は伏見人形である。鳥や西行、動物、狛犬形である。

#### b. 銭貨

寛永通寶が出土している。図示したものは、全て銅製の一文銭である。402～411はいわゆる「古寛永」である。寛永13(1636)年～万治2(1659)年に鑄造されたものである。412～422はいわゆる「新寛永」である。このうち、419・421・422は背面に「文」の字を鑄出す。いわゆる「文銭」と呼ばれるもので、寛文8(1668)年～天和3(1683)年に鑄造されたものである。412～418・420は元禄10(1697)年以降に鑄造されたものである。418は、背面に「元」の字が鑄出されている。それ以外は背面無文である。

#### c. 石造五輪塔

423は、一石五輪塔の風空輪である。空輪の宝珠形の先端は緩やかに尖る。中世後期頃のものと思われる。424は五輪塔の風空輪であるが、風輪の請花基部が破損しており、一石五輪塔、別石五輪塔の区別は不明である。空輪の宝珠形の先端が突出して尖り気味であり、江戸時代前期頃のものである可能性が考えられる。425は別石五輪塔の風空輪である。風輪下部に突出した臍が残る。空輪の宝珠形の先端が突出して尖っており、江戸時代前期頃のものである可能性がある。

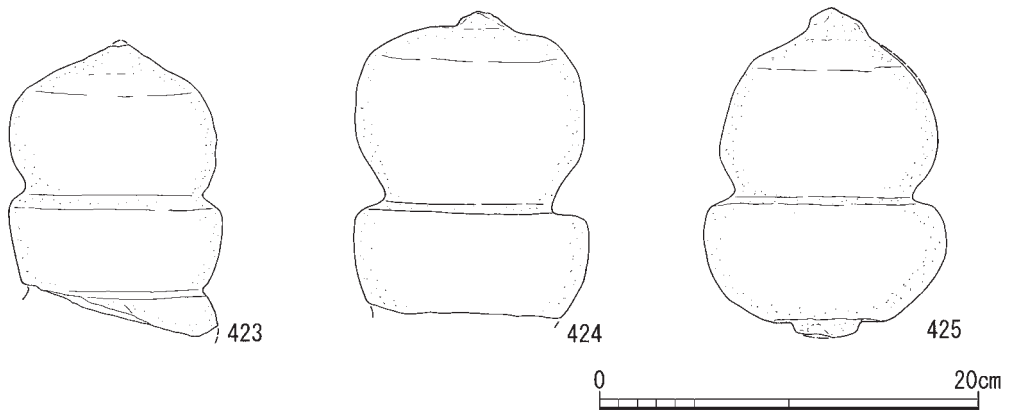
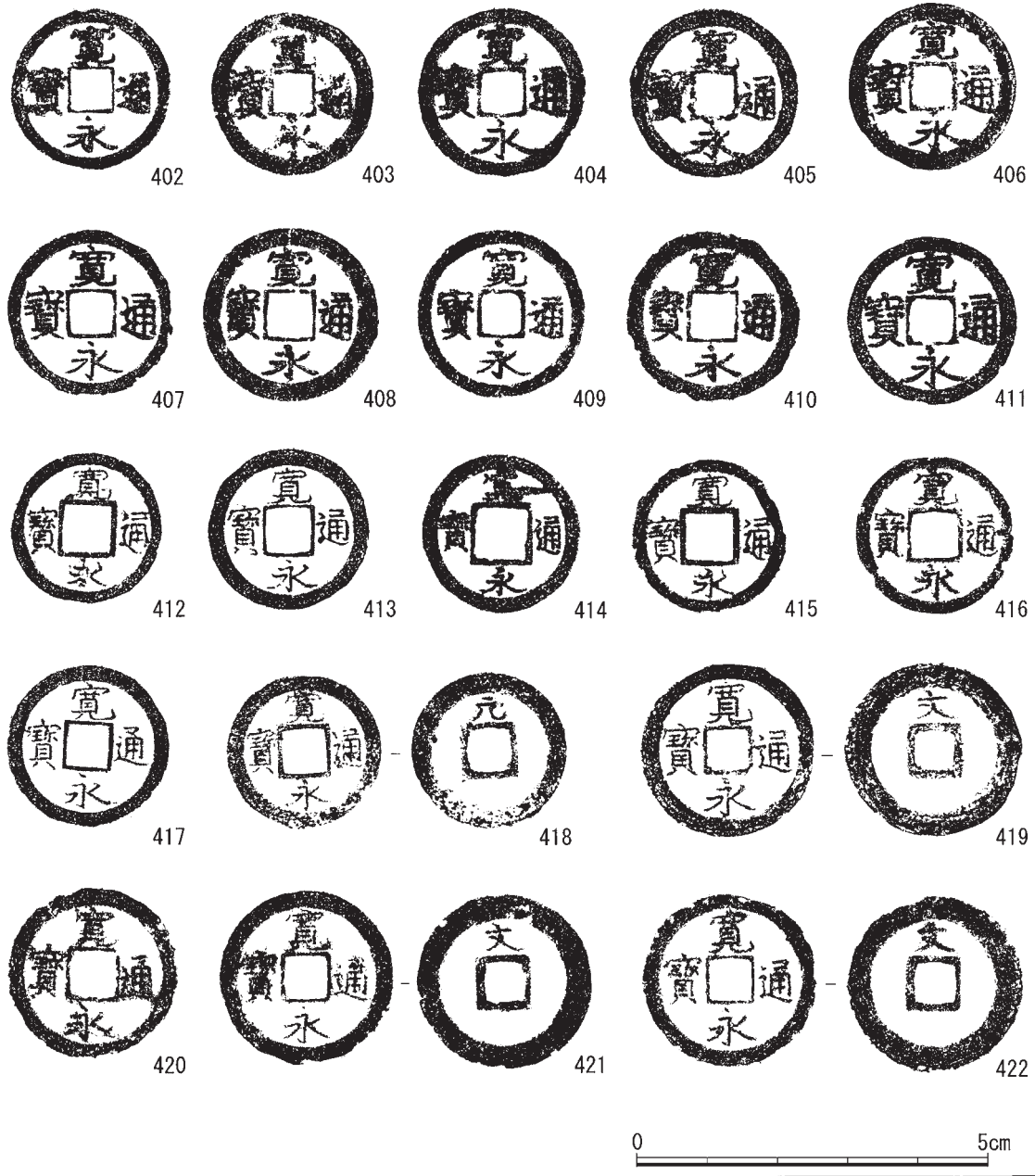
(引原茂治)

### 7. まとめ(第84～86図・付表)

下海印寺遺跡の調査としては、過去数回の調査が実施されてきた。その中でも西条地区周辺の調査はいずれも京都第二外環状道路建設に伴う調査で、この周辺の様相が明らか<sup>(注9)</sup>となってきた。西条周辺には、西から方丸・尾流・西条となり、南西に上内田地区があり、下海印寺遺跡の南部にあたる。以下、この下海印寺西条地区周辺で検出した主要遺構を時期毎に概観する。江戸時代については前述したので割愛する。

**弥生時代後期～古墳時代初頭** この時期の遺構は広範囲に点在している。上内田地区で検出した溝S D 2001(11：番号は付表に対応。以下同じ。)は、幅8mの大きな流路が南東方向に流れ、その右岸高台上に竪穴式住居跡S H 82(4)や竪穴式住居跡S H 121(5)が営まれている。S H 121





第83図 出土遺物実測図(22)

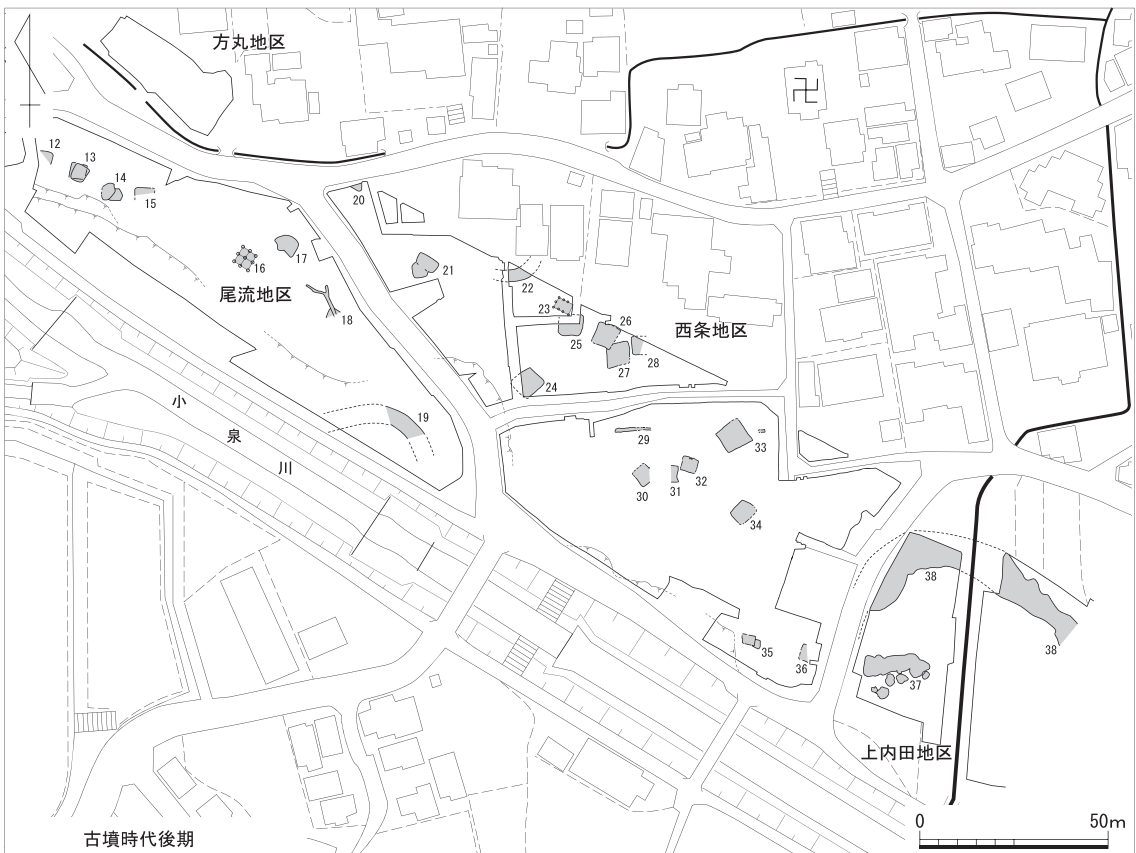
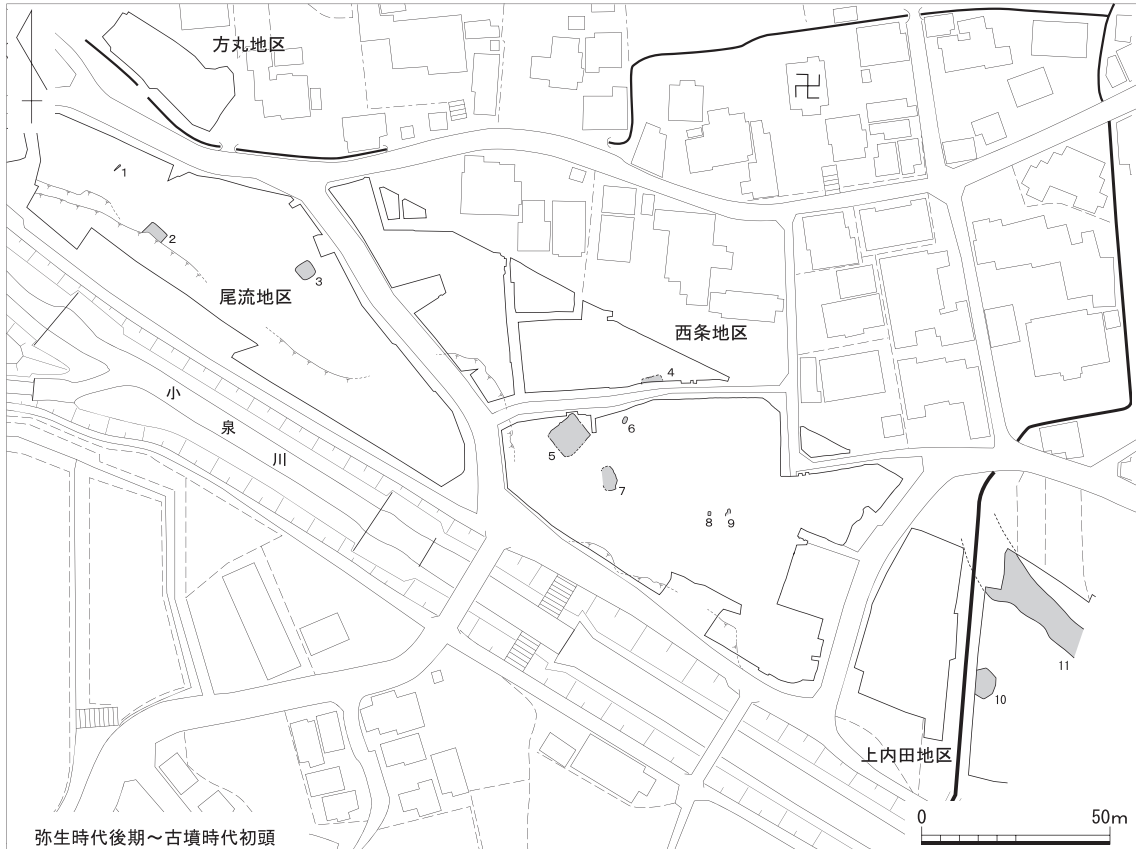
はベッド状遺構を有し、一辺9mを測る大形住居である。またその周囲の低位段丘上では竪穴式住居跡SH2(10)やSH58(2)、SH05(3)を検出した。特にSH2は、多角形住居である。

**古墳時代後期** 尾流地区では溝SD25(19)、上内田地区では溝SD1001・2001(37)を検出したことから、段丘裾部を大きく蛇行しながら流れる流路が復元できる。その上面にあたる段丘上に竪穴式住居跡が広範囲に数多く営まれる。竪穴式住居跡は、尾流地区東側から西条地区にかけて分布しており、北・東にはさらに住居跡が分布していることが想定できる。いわば、大集落の一面を検出したといえよう。掘立柱建物跡としては(16・23)の2棟のみである。また溝SD95703(22)は、幅3.6mを測り、弓状に検出した。竪穴式住居跡SH101・102・103(24～26)の埋土中から須恵器器台の破片が出土したことから、溝SD95703は古墳に伴う遺構である可能性も考えられる。

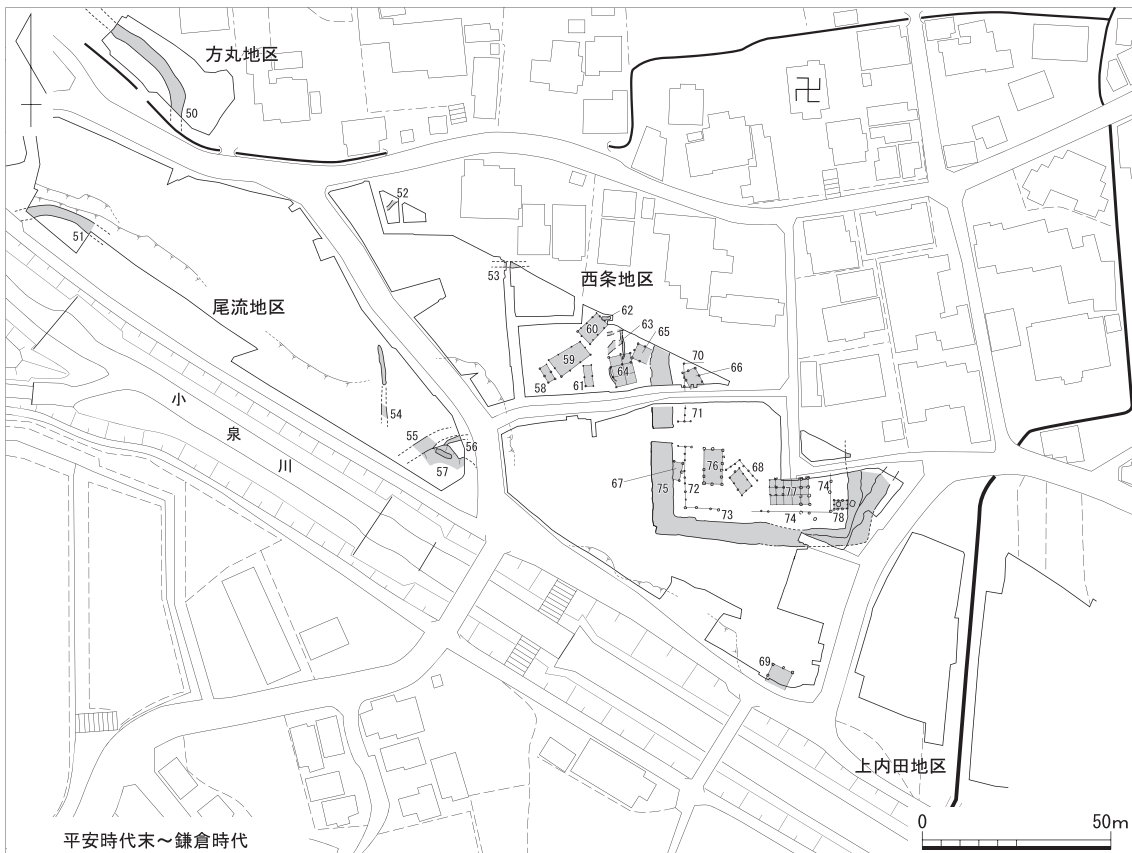
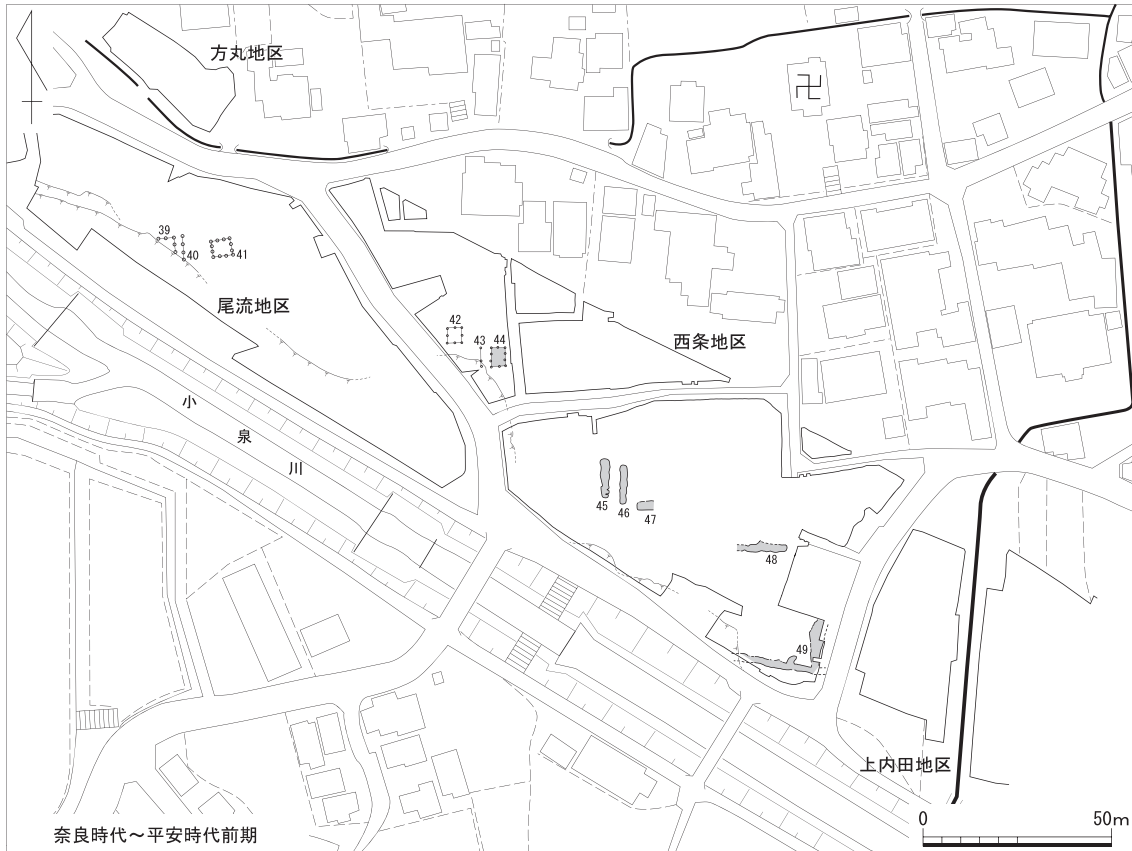
**奈良時代～平安時代前期** この時期の遺構は、掘立柱建物跡、柵列、溝跡、土坑などである。図示した範囲は、長岡京跡の南西部である右京七条四坊十一・十二・十四町付近にあたる。西条地区南東隅から検出した溝SD79・112(49)については、その主軸方向が真南北・真東西からわずかに斜傾することから、長岡京跡の側溝にはならないと判断した。一方、真東西を向く溝SD366(47)は、七条条間南小路付近に、真南北を向く溝SD132(45)は西四坊坊間西小路付近に位置する。しかし、いずれも検出長10m前後であり、周辺に遺構が続いていかないことから、条坊側溝の残欠であるかどうかについては不明である。なお、検出した掘立柱建物跡や柵列は、長岡京の条坊呼称では十四町内の施設となる。掘立柱建物跡SB06(39)の西側付近が西四坊大路の推定地とされているが、関連する遺構の検出には至らなかった。

**平安時代末期～鎌倉時代** この時期の遺構は、二時期に細分できる。

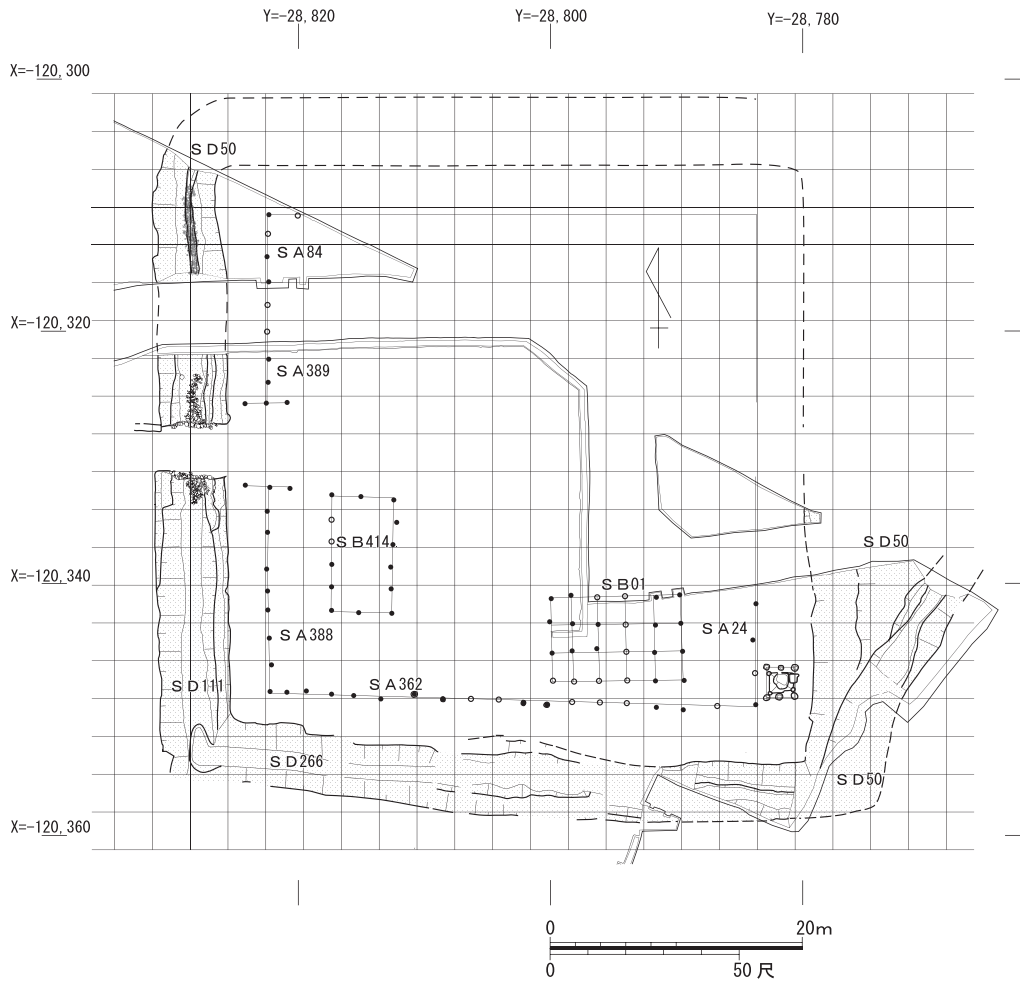
一つは平安時代末期で方形に区画された屋敷地に関連する遺構群と、尾流地区南東部で検出した遺構群である。屋敷地については、第86図に示すように規格に沿って築かれたものである。堀はおおむね20尺幅で築かれ、その10尺内側に柵列(板塀)が巡る。柵列間は、およそ130尺である。土橋の幅は10尺で築かれる。このような屋敷の年代は、瓦器碗(213～224)の出土により11世紀末頃に築かれ、瓦器碗(232・239)の出土により12世紀中葉にかけて存続したと考える。尾流地区で検出したSX51(55)は北東を向く、固く叩きしめた道路状遺構である。その側溝と考えられているSD64は東方に湾曲しており、同時期の遺物が出土している。その東方50m先には土橋SX133が存在する。さらにNR56(57)は当時の旧河道であり、SX51がそこで止まることから、おそらくこの付近に橋が架かっていたと考えられている。以上のようなことから方形区画から西方に通じる通路が存在したと思われる。また、溝SD95701(53)やSD02(54)もこの時期の区画溝と考える。同様の遺構としては久世郡に位置する佐山遺跡<sup>(注10)</sup>があり、当遺跡とともに堀や濠でもって方形に区画した在地領主層の屋敷跡の初見は、11世紀後半から末頃に求めることができる。この後、井ノ内遺跡や神足遺跡(第1図)などに見られるように、屋敷地内や周辺部に人々が集約され、屋敷跡は変貌していったと思われる。福知山市の大内城跡や堺市の日置荘遺跡、大阪市の長原遺跡や和気遺跡などに見られるように土塁を設け、防御的機能を備えた屋敷跡へとさらに変貌していったと思われる。<sup>(注11)</sup>



第84図 下海印寺遺跡遺構配置図(1)



第85図 下海印寺遺跡遺構配置図(2)



第86図 屋敷跡規格図

もう一つは鎌倉時代の遺構群である。その主軸方向を西に斜傾する掘立柱建物群や溝などである。西条地区に集中して築かれるが、その全容もその原因についても不明である。

今回の調査で数多くの成果を得ることができた。古墳時代後期の集落群や平安時代末期の屋敷跡についてはその一角が検出でき、隣接地にさらに及んでいることについても明らかとなった。今後の周辺部の調査に期待される。

(岡崎研一)

注1 岡崎研一ほか「4. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成20年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

注2 長岡京市史編さん委員会編集『長岡京市史』本文編一 長岡京市役所 平成8年

注3 注1に同じ

注4 山本輝雄・岩崎 誠「長岡京跡右京第104次調査概要(7ANOND地区)」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター) 1984

注5 岡崎研一ほか「3. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009



- 注6 百瀬ちどりほか『長岡京市文化財調査報告書』第58冊 長岡京市教育委員会 2011
- 注7 注6に同じ
- 注8 注6に同じ
- 注9 中川和哉ほか「2. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成18年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第126冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008  
 森 正ほか「5. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成21年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第142冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 注10 森島康雄ほか『佐山遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第33冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注11 岡崎研一「方形区画(居館)の調査事例-特に乙訓地域において-」(『京都府埋蔵文化財論集』第6集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

付表 下海印寺遺跡内主要遺構一覧表

番号	調査回数	地区名	トレンチ名	遺構番号	規模(m)	時期	備考
1	第862次	尾流地区	2トレンチ	S X 45	長2.0×幅0.5、深0.4	弥生時代後期	土器溜まり・完形品の甕などが出土
2	第957次	尾流地区		S H 58	5.0×4.0以上	弥生時代末	住居内から炉跡・貯蔵穴検出
3	第973次	尾流地区		S H 05	4.2×3.8	弥生時代後期	
4	第1007次	西条地区	J地区	S H 82	1.7×1.3、深0.4、後世に削平	古墳時代初頭	本報告集に掲載
5	第970次	西条地区	A地区	S H 121	9.0×7.6、深0.8、ベッド状遺構	古墳時代初頭	本報告集に掲載
6	第970次	西条地区	A地区	S K 149	1.0×1.8、深0.1	古墳時代初頭	本報告集に掲載
7	第970次	西条地区	A地区	S K 123	東西2.5×南北6.4、深0.4	古墳時代初頭	本報告集に掲載
8	第970次	西条地区	C地区	S K 458	0.7×1.0、深0.1	古墳時代初頭	本報告集に掲載
9	第970次	西条地区	C地区	S K 339	0.6×1.0、深0.1	古墳時代初頭	本報告集に掲載
10	第902次 第928次	上内田地区		S H 2	2.6×2.6	古墳時代初頭	多角形住居・幅1mのベッド状遺構
11	第937次	上内田地区	上内田-2	S D 2001	幅8.0、深0.4～0.6	弥生時代後期末	下層遺構
12	第862次	尾流地区	2トレンチ	S H 27	1.5×2.5以上	古墳時代後期か	
13	第862次	尾流地区	2トレンチ	S H 13-A	4.2×4.0	古墳時代後期	
				S H 13-B	4.1×4.0	古墳時代後期	
14	第862次	尾流地区	2トレンチ	S X 14-A	長軸4.0、深0.3	古墳時代後期	
				S X 14-B	長軸3.0、深0.3	古墳時代後期	
15	第862次	尾流地区	2トレンチ	S H 16	4.3×1.7、深0.2	古墳時代後期	
16	第973次	尾流地区		S B 184	2間(4.6)×2間(4.4)	古墳時代後期	
17	第957次	尾流地区		S K 54	6.5×5.5	古墳時代後期	
	第973次			S K 14			
18	第973次	尾流地区		S D 130	幅0.3～0.8	古墳時代後期	
				S H 140	3.0×2.0以上	古墳時代後期	
19	第870次	尾流地区		S D 25	幅5.0、検出長20		

番号	調査次数	地区名	トレンチ名	遺構番号	規模 (m)	時期	備考
20	第 852 次	西条地区		S H 23	3.0 以上 × 3.0 以上	古墳時代後期	
21	第 852 次	西条地区		S H 85208	5.0 × 3.5	古墳時代後期	
				S H 85215	4.2 × 4.2	古墳時代後期	S H 85208 に切られる
22	第 957 次	西条地区	西条 - 1	S D 95703	幅 3.6、深 0.3	古墳時代中期後半	弧状に巡る
23	第 957 次	西条地区	西条 - 1	S B 95706	3 間 (4.3) × 2 間 (2.8)	古墳時代後期	
24	第 970 次	西条地区	E 地区	S H 101	6.6 × 6.4、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
25	第 970 次	西条地区	E 地区	S H 102	6.4 × 5.8、深 0.1	古墳時代後期	本報告集に掲載
26	第 970 次	西条地区	E 地区	S H 103	6.0 × 6.0、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
	第 1007 次		J 地区	S H 79			
27	第 1007 次	西条地区	J 地区	S H 80	6.0 × 6.0、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
28	第 1007 次	西条地区	J 地区	S H 81	4.8 × 3.6 以上、深 0.1	古墳時代後期	本報告集に掲載
29	第 970 次	西条地区	A 地区	S D 144	検出長 9.6、幅 0.6 ~ 1.0 深 0.1	古墳時代後期	本報告集に掲載
30	第 970 次	西条地区	A 地区	S H 156	4.4 × 4.8、深 0.2 ~ 0.3	古墳時代後期	本報告集に掲載
31	第 970 次	西条地区	C 地区	S K 128	4.4 × 2.2、深 0.1	古墳時代後期	本報告集に掲載
32	第 970 次	西条地区	C 地区	S H 127	3.8 × 4.0、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
33	第 970 次	西条地区	C 地区	S H 350	7.2 × 7.2、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
				S K 394	長辺 1.2 × 短辺 0.7 深 0.05		
34	第 970 次	西条地区	C 地区	S H 351	5.6 × 4.8、深 0.2	古墳時代後期	本報告集に掲載
	第 1024 次		M 地区	S H 351			
35	第 970 次	西条地区	B 地区	S K 125	3.6 × 2.5、深 0.5	長岡京期	本報告集に掲載
36	第 970 次	西条地区	B 地区	S H 26	4.2 × 2.7、深 0.05	古墳時代後期	本報告集に掲載
37	第 937 次	上内田地区	上内田 - 1	S K 1009	東西 17.5、南北 6.0、深 0.5	古墳時代後期	水辺の祭祀関連遺構か
38	第 937 次	上内田地区	上内田 - 1	S D 1001	幅 10、深 0.4 ~ 0.8	古墳時代中期後半	
			上内田 - 2	S D 2001	幅 7.0 ~ 10、深 0.3	古墳時代中期後半	上層遺構
39	第 957 次	尾流地区		S B 06	2 間 (4.0) × 2 間 (4.1)	奈良時代	
40	第 957 次	尾流地区		S A 15	長 9.3 m	奈良時代	
41	第 957 次	尾流地区		S B 60	3 間 (5.2) × 3 間 (4.3)	奈良時代	
42	第 852 次	西条地区		S B 85202	2 間 (3.8) × 2 間 (3.8)	長岡京期 ~ 平安時代初頭	総柱の倉庫か
43	第 852 次	西条地区		S A 85204	南北 4 間 (5.0)	奈良 ~ 平安時代	
44	第 852 次	西条地区		S B 85201	2 間 (3.6) × 3 間 (5.1)	奈良 ~ 平安時代	
45	第 970 次	西条地区	A 地区	S D 132	長 10.3、幅 2.2 ~ 2.3、深 0.3	長岡京期	本報告集に掲載
46	第 970 次	西条地区	A 地区	S D 119	長 10.3、幅 1.5 ~ 2.0、深 0.3 ~ 0.5	長岡京期	本報告集に掲載
47	第 970 次	西条地区	A 地区	S K 158	2.2 × 4.3 以上、深 0.05	長岡京期	本報告集に掲載
48	第 970 次	西条地区	D 地区	S D 366	検出長 12.0、幅 1.4 ~ 2.0、深 0.05	長岡京期	本報告集に掲載
49	第 970 次	西条地区	B 地区	S D 79	検出長 19.5、幅 2.0、深 0.6 ~ 0.8	長岡京期	本報告集に掲載
				S D 112	検出長 12.6、幅 2.2 ~ 3.3、深 0.6		
50	第 973 次	方丸地区	A トレンチ	S D 01	幅 3.5、深 1.7、検出長 66	中世	北西方向の C トレンチまで続く
51	第 870 次	尾流地区	5 トレンチ	S D 48	幅 3.0 × 長 17	平安時代末期	旧河道

番号	調査次数	地区名	トレンチ名	遺構番号	規模 (m)	時期	備考
52	第970次	西条地区	F地区	S D 10	幅0.4、長1.4	中世?	
53	第957次	西条地区	西条-1	S D 95701	幅1.7、深0.5	中世	区画溝か
54	第862次	尾流地区	4トレンチ	S D 02	幅0.2~0.5、長13	中世?	区画溝か(確認長20)
	第870次	尾流地区	6トレンチ	S D 02	幅1.4、長3.6	中世?	
55	第870次	尾流地区	6トレンチ	S X 51	幅2.4~3.4、検出長12	平安時代後期	道路状遺構か
56	第870次	尾流地区	6トレンチ	S D 64	幅0.5~1.3、検出長5.0	平安時代後期	S X 51の側溝か
57	第870次	尾流地区	6トレンチ	N R 56 - B	幅3.4、深0.9	中世	中世の旧河道
				S X 55	基底幅1.1、高0.7、長5.6	中世	護岸施設
58	第970次	西条地区	E地区	S B 15	1間(2.0)×2間(4.7)	鎌倉時代	本報告集に掲載
59	第970次	西条地区	E地区	S B 46	2間(5.5~4.5)×3間(9.6)	鎌倉時代	本報告集に掲載
60	第970次	西条地区	E地区	S B 30	3間(4.6)×4間(7.0)	鎌倉時代	本報告集に掲載
61	第970次	西条地区	E地区	S B 12	1間(2.1)×2間(5.5)	鎌倉時代	本報告集に掲載
62	第970次	西条地区	E地区	S K 34	2.3×0.8、深0.3	平安時代末期	本報告集に掲載
63	第1007次	西条地区	J地区	S D 19ほか	幅0.9、深0.2	鎌倉時代	本報告集に掲載
64	第1007次	西条地区	J地区	S B 30	2間(5.7)×3間(8.2)	鎌倉時代	本報告集に掲載
65	第1007次	西条地区	J地区	S B 49	2間(4.1)×1間(2.3)以上	鎌倉時代	本報告集に掲載
66	第1007次	西条地区	J地区	S B 58	2間(3.6)×2間(4.2)以上	鎌倉時代	本報告集に掲載
67	第970次	西条地区	C地区	S B 406	2間(4.9)×1間(2.5)以上	鎌倉時代	本報告集に掲載
68	第970次	西条地区	C地区	S B 385	2間(3.5)×3間(5.9)	鎌倉時代	本報告集に掲載
				S A 386	4間(7.2)		
				S A 387	3間(4.4)		
69	第970次	西条地区	B地区	S B 08	2間(5.5)×1間(3.4)以上	鎌倉時代	本報告集に掲載
70	第1007次	西条地区	J地区	S A 84	3間(5.4)	平安時代末期	本報告集に掲載
71	第970次	西条地区	C地区	S A 389	2間(3.6)	平安時代末期	本報告集に掲載
72	第970次	西条地区	C地区	S A 388	8間(16.3)	平安時代末期	本報告集に掲載
73	第970次	西条地区	C・H地区	S A 362	5間(8.9)	平安時代末期	本報告集に掲載
74	第970次	西条地区	H地区	S A 24	南辺3間(7.9)、東辺3間(8.1)	平安時代末期	本報告集に掲載
75	第970次	西条地区	C地区	S D 111・266	幅4.0~0.6 深1.4~1.9	平安時代末期	本報告集に掲載
	H・J地区		S D 50	幅5.0~8.4 深0.6~1.6	平安時代末期	本報告集に掲載	
76	第970次	西条地区	C地区	S B 414	2間(4.8)×5間(9.1)	平安時代末期	本報告集に掲載
77	第1007次	西条地区	C・H地区	S B 01	3間(6.8)×4間(8.9)	平安時代末期	本報告集に掲載
78	第1007次	西条地区	H地区	S B 74	2間(2.3)×3間(3.5)	平安時代末期	本報告集に掲載

## (2)長岡京跡右京第1024次(7ANOKI-4 川向井地区)・伊賀寺遺跡

### 1. はじめに

川向井地区は、長岡京市下海印寺川向井に所在し、長岡京跡の条坊復元では右京七条四坊四・五町、七条大路(旧条坊では右京七条四坊二・七町、七条条間小路)に位置する(第87図)。また、縄文時代～中世の集落遺跡である伊賀寺遺跡の範囲に含まれる。

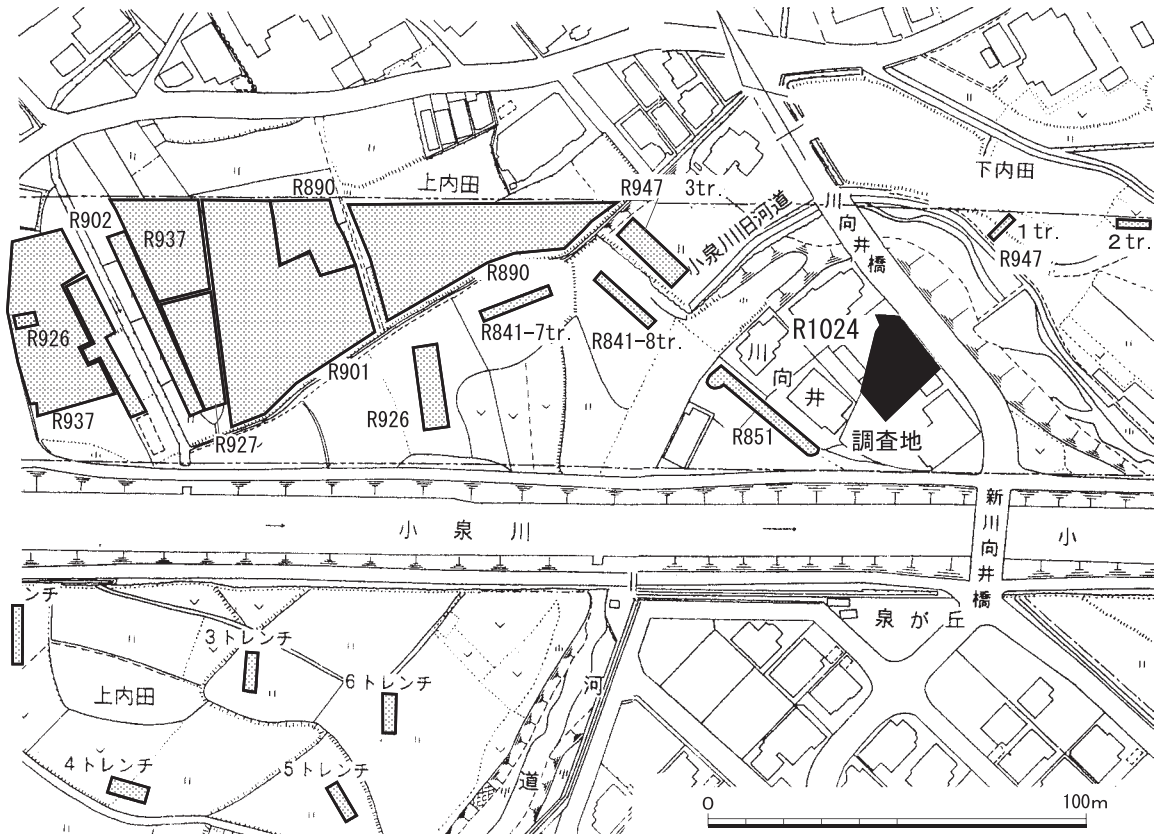
現在の小泉川は、昭和56年度以降に当時の建設省による河川改修で北西から南東方向の直線的な流路に改変されているが、それ以前は下海印寺地区より下流域は大きく蛇行しながら流れていた。今回の調査地は、旧小泉川と現小泉川にはさまれた中の島状に残る部分にあたり、西・北・東側には旧河道が大きく蛇行していた痕跡が残り、この旧流路部分にはコンクリート造りの川向井橋が現存している。旧地形を復原すると、南側にある泉が丘地区から丘陵が北に張り出した裾部に沿って旧河道が大きく「U」字状にカーブしていたものと考えられ、調査地は丘陵上の先端部分に相当する可能性が認められた(第88図)。

第二外環関係遺跡で実施した周辺の調査では、北西側の上内田地区では河岸段丘上に設けられたトレンチで竪穴式住居跡や流路が検出されている(右京第890・923・927次調査)。河岸段丘下の旧小泉川の流路内に設けられた右京第941次調査の8トレンチでは、河川氾濫原を田畑として利用する時点での整地土が確認され、中世以降に土地利用が開始されたことが明らかとなっている。同様な結果は、西側の旧河道肩部付近で調査された右京第947次調査の第3トレンチでも確認されている。北東側の下内田地区では、右京第947次調査で、河岸段丘肩部(第1・2トレンチ)が確認され、旧小泉川の氾濫原でないことが確認された。また、西側の右京第851次調査では、



第87図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)





第88図 周辺調査トレンチ配置図

小泉川の旧流路内であることが明らかとなった。

このような周辺における調査成果と旧地形の復原から、今回の調査地には遺構が存在する可能性が期待できた。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

調査担当者 調査第2課第2係長 岩松 保

同 主任調査員 増田孝彦・戸原和人

調査場所 長岡京市下海印寺川向井

現地調査期間 平成23年12月5日～12月16日、平成24年1月11日

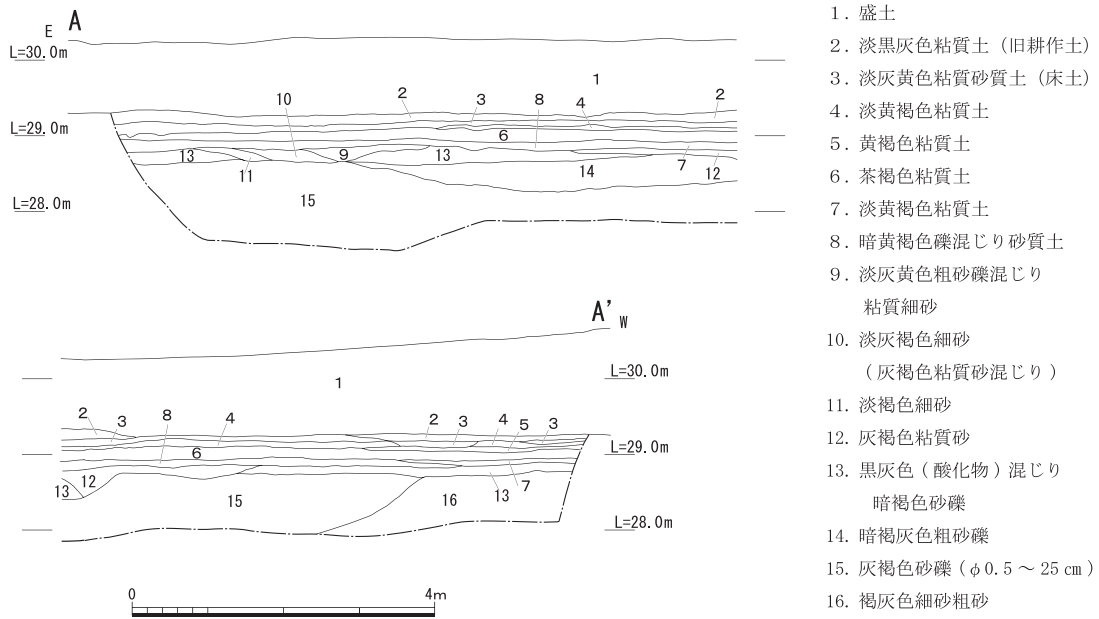
調査面積 300㎡

2. 調査概要

調査地の現地表面の標高は32.1mであり、現存の旧河道上に存在する水田面より2.4mほど高くなっており、旧河道に架かる川向井橋および道路その南側の住宅造成に伴う盛土が施されているものと考えられた。調査は盛土の除去作業より着手し、旧耕作土を確認後、トレンチを設定した。

旧耕作土の検出高は北西側で標高29.7m、南側で29.3mあり、トレンチ北西壁に沿った約1/3は



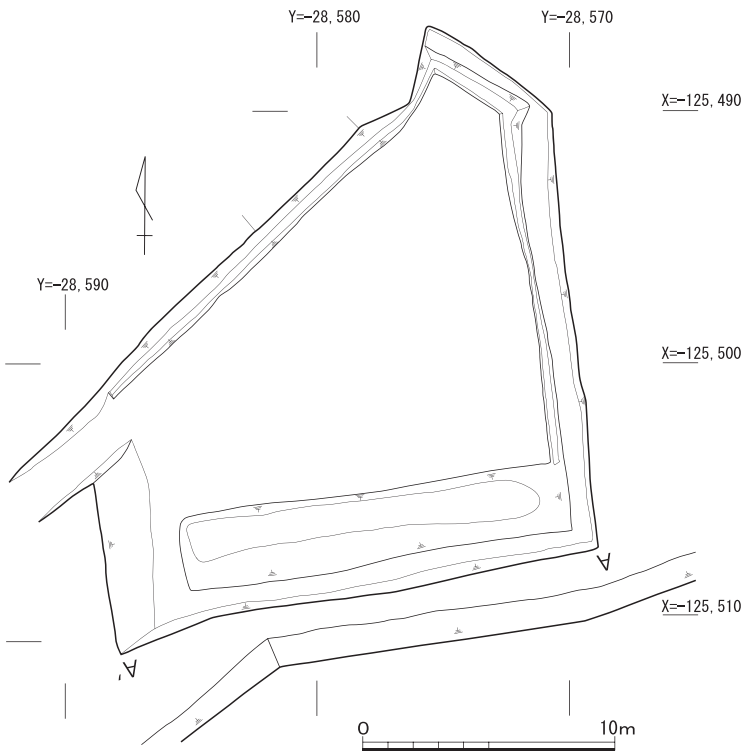


第89図 調査地南壁土層断面図

南側に比べて約0.4m高い水田となっている(第89図)。その下位には床土(第3層)があり、その下層には厚さ5～10cm程度の水平に堆積した土層が広がっていた(第4～7層)。水田造成に伴う整地土と判断される。この土層中より細片化した須恵器・土師器・瓦質土器が出土した。水田造成に伴い、土砂が持ち込まれた先に混じていたものと考えられる。

これより下層は、砂礫の堆積となっていた。部分的に3mの深さまで断ち割りを行い、旧小泉川流路内の砂礫が厚く堆積していることを確認した。砂礫内からは、遺物の出土は認められなかった。北・北西側には、この砂礫検出面に粘質砂と互層になる部分が認められ、北側の旧河道に向かって下る傾斜をもっていた。これを削平する形で整地土がある。最終流路の肩部付近であったと考えられる。南側部分はこの傾斜部分がすべて削平されており、流路が変更する前の流路本体部分における堆積であろう。

調査地南側の宅地について、家屋の解体後に立会調査を行っ



第90図 調査地平面図

たが、トレンチ南側の堆積状況と同じで、整地土より下位は旧小泉側の河川堆積で、砂礫が厚く堆積し、遺構・遺物包含層とも存在しなかった。

過去の周辺の調査では、小泉川の氾濫原における耕地化は中世以降の段階と判断されている(岩松ほか2005)が、今回の調査においても中世以降に耕地化されたものと判断され、過去の調査成果を追認する結果となった。また、今回の調査地は、旧流路の分布から南から北に張り出す丘陵を想定したが、その考えを積極的に肯定する成果は得られなかった。

(増田孝彦)

#### 参考文献

岩松 保ほか「京都第二外環状線道路関係遺跡 平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

## (3) 奥海印寺遺跡(7ANPAR-4 奥海印寺荒堀地区)

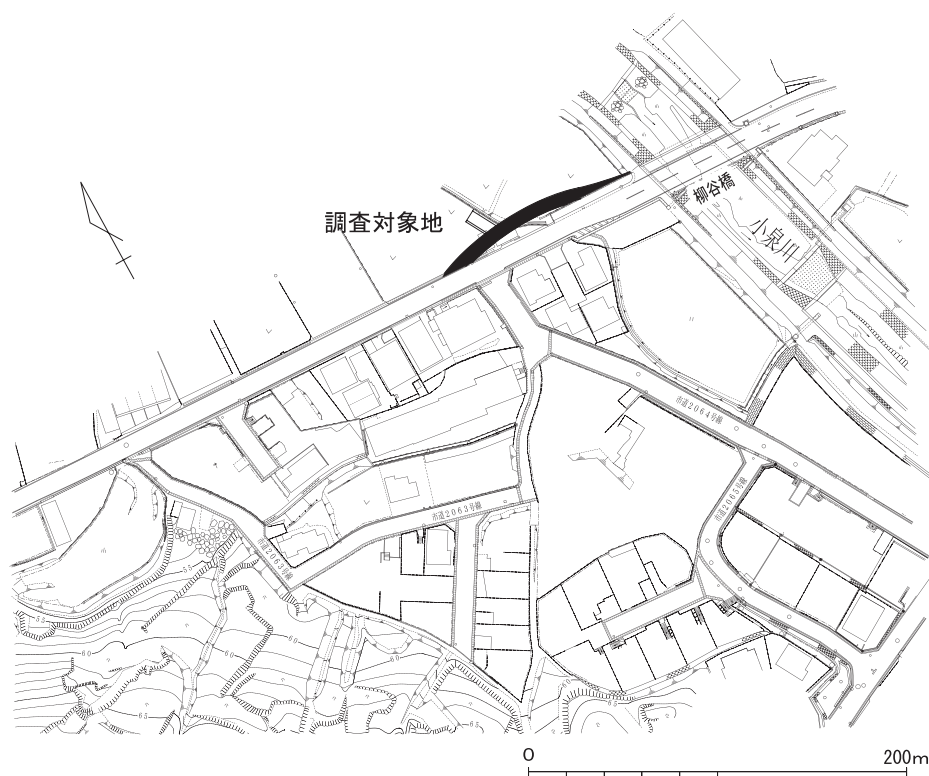
## 1. はじめに

荒堀地区は、長岡京市奥海印寺荒堀に所在する。長岡京跡の条坊復元では京外となり、奥海印寺遺跡の東端に位置する(第87図)。

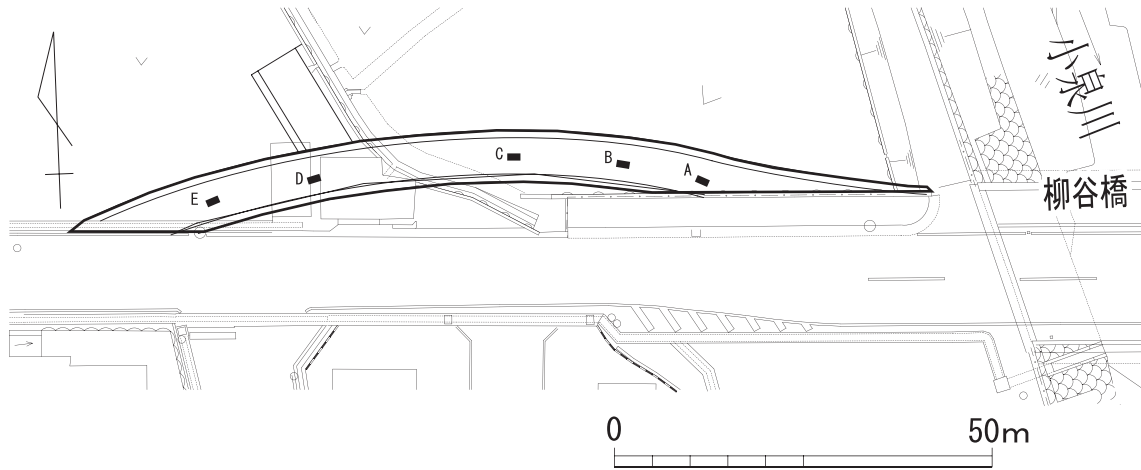
第二外環状道路建設に伴う府道伏見柳谷高槻線の拡幅工事に伴い調査を実施した。調査地は、小泉川右岸の河岸段丘上の水田である。現況の道路の北側、幅約4m、長さ42mが対象で、現況の水田面(標高47.9m)より下1mが地盤改良となるため、工事の進行に合わせて、まず東半を1月12日に調査し、2月16日に西半の調査を実施した。

## 〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克  
 調査担当者 調査第2課第2係長 岩松 保  
 同 主任調査員 増田孝彦  
 調査場所 長岡京市奥海印寺荒堀  
 調査期間 平成24年1月12日、2月16日  
 調査面積 5㎡



第91図 調査地位置図



第92図 トレンチ配置図

## 2. 調査概要

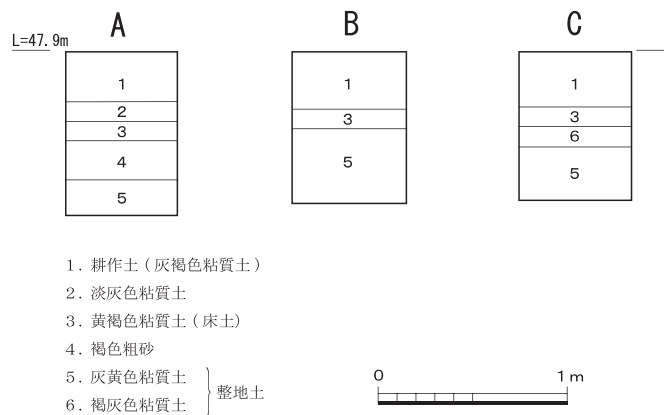
調査は、工事による掘削が現地表下70cmまで行うため、それまでの掘削深度の中で文化層や遺物が確認できるかどうかを主眼として実施した。幅約70cm、長さ約1.5mのトレンチを任意に配置した。調査は、工事の進行状況に合わせて2回実施し、1月12日には小泉川寄りの水田に3か所(A～Cトレンチ)、2月16日には西側の一段高い水田に2か所(D・Eトレンチ)の計5か所のトレンチを設定し掘削を行った。

A～Cトレンチは、水田耕作土下が床土、Aトレンチではその下層が小泉川の最終氾濫に伴うと考えられる砂礫の堆積が認められ、以下は黄褐色系の水田造成に伴う整地土である。B・Cトレンチは、床土以下は水田造成に伴う整地土である。

これらの整地土からは、遺物の出土は全く認められなかった。遺構が存在するとすれば、この整地土より下層になると考えられる。

西側の一段高い水田部にはD・Eトレンチを設定した。ここでは、地表下20cmまでの掘削で、耕作土が堆積しているだけであった。遺物や遺物包含層は確認できなかった。

(増田孝彦)



第93図 奥海印寺地区土層柱状図